

かながわの考古学

2010.3

財団法人 かながわ考古学財団

かながわの考古学

2010.3

財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

今年度も、各時代の研究プロジェクトチームから提出された共同研究と個人研究の成果を掲載することができました。

旧石器時代～近世の各研究プロジェクトチームは、いずれも通年設定したテーマの継続研究を行ってまいりました。

今後ともこうしたグループの共同研究を進めることによって、職員の資質向上が図られ、より充実した内容が発表されることを期待しております。

本書が埋蔵文化財の調査や考古学研究に広く活用されることを願うとともに、皆様方の一層のご指導とご教示を賜りますようお願い申し上げます。

2010年3月

財団法人 かながわ考古学財団
理事長 伊藤啓三

目 次

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その3）－L1S～L1H層（まとめ）－ 旧石器時代研究プロジェクトチーム ……………	1
神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅷ－後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その1－ 縄文時代研究プロジェクトチーム ……………	13
神奈川県内出土の弥生金属器（2） 弥生時代研究プロジェクトチーム ……………	21
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（7）－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－ 古墳時代研究プロジェクトチーム ……………	35
神奈川県における集落遺跡出土の瓦の様相（3） 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム ……………	51
神奈川の中世城館（2） 中世研究プロジェクトチーム ……………	61
近世民家の集成（7） 近世研究プロジェクトチーム ……………	75

例 言

1. 本書は、財団法人かながわ考古学財団および神奈川県教育庁教育部生涯学習文化財課の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに計画的に共同研究を行った結果を掲載するものである。
2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである（五十音順・◎はリーダー、○はサブリーダーを示す）。
 - ・旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム
◎井関文明・大塚健一・栗原伸好・砂田佳弘・鈴木次郎・長澤邦夫・○畠中俊明・三瓶裕司・吉田政行・脇 幸生
 - ・縄文時代研究プロジェクトチーム
阿部友寿・天野賢一・井辺一徳・◎小川岳人・○近藤匡樹・松田光太郎・宗像義輝
 - ・弥生時代研究プロジェクトチーム
飯塚美保・◎池田 治・櫻井真貴・新開基史・戸羽康一・○渡辺 外
 - ・古墳時代研究プロジェクトチーム
◎植山英史・○柏木善治・小西絵美・新山保和・林 雅恵・吉田映子
 - ・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム
◎加藤久美・齊藤真一・相良英樹・高橋 香・中田 英・○依田亮一
 - ・中世研究プロジェクトチーム
○松葉 崇・宮坂淳一・◎吉田智哉
 - ・近世研究プロジェクトチーム
◎木村吉行・○澁谷正信

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その3）

— L1S層～L1H層（まとめ） —

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

当プロジェクトでは、2007年度から遺物分布の集成を行っており、2007・2008の两年度で黒土層からローマ層への漸移層、L1S層、B0層、L1H層の各層位について遺物分布の集成を行った。これらの層位は、時期的には縄文時代草創期から旧石器時代終末期に相当し、2ヶ年で行った集成は、82遺跡、603箇所の中地点である。

今後、B1層以下の各層位についても集成作業を継続する予定であるが、今年度は、これまでに集成を行った漸移層～L1H層の各層位の石器集中についてのまとめとして、石器集中の分布範囲（規模）や分布密度、器種組成、石材組成、各種検出遺構との関係などの検討を行った。（鈴木）

1. 漸移層～L1S層の石器集中

ここでは黒土（FB）層～L1SM層を対象とし、相模野編年（諏訪間 1988・2001以下同）の段階X（細石器を伴う段階）、段階XI（槍先形尖頭器・石斧等を伴う段階）、段階XII（有舌尖頭器・石鏃等を伴う段階）にあたる。本段階の石器群を検討するにあたり、報告書において「IIIc～IV（漸）」・「IIIa～IIIc（漸）」・「IIIbL～漸」・「IIIb～L1S」・「IIIbL～L1S」・「IIIbL～L1SU」・「3L～5U」・「Va～VI」・「VI」・「VIc～VII（漸）」・「VI～VIII（漸）」・「FB」・「FBL」・「FBL～漸移」・「漸」・「FB～L1S」・「漸～L1S」・「漸移～L1S」・「L1SU」・「L1S」・「L1SU～M」・「L1SM」の記載層位を対象とした。石鏃、有舌尖頭器、槍先形尖頭器・石斧、細石器の順にそれらの器種を伴うか、もしくはそのいずれかに関係する石器（例えば船底形石器）を伴うかによって石器群の石器集中を中心に論じる。

a) 石器集中の器種組成

石鏃（「局磨鏃」を含む）を伴う石器集中は花見山（縄：以下、遺跡名後の括弧付き「縄」や「草」及び括弧無しのローマ数字等は「文化層」を表示）（遺跡No.31：以下、括弧内冒頭の算用数字は前号までの遺跡No.で、No.を省略し、算用数字のみ表示）、長堀北I（85-No.1（各集中地点No.、括弧内-No.後の算用数字は各集中地点を表示））、吉岡B区（草2）（101-No.1）、吉岡C区（草）（102-No.1・No.5）、三ノ宮・下谷戸I（166-No.1・2）の5遺跡、7石器集中がある。

石鏃を伴う石器集中の分布状況を一つの石器群における石器集中数とすると最大2箇所、最小1箇所、平均は1.4箇所である。その石器集中で石器点数が最も多いのは三ノ宮・下谷戸I（166-No.1）の53,696点で最も少ないのは吉岡C区（草）（102-No.1）の7点である。その分布範囲は、長軸（m）×短軸（m）の面積（m²）とした場合（以下分布範囲は同算出法による面積を示す）、最小が吉岡C区（草）（102-No.5）の3.51m²から、最大が花見山（縄）（31）の1,591m²までとなる。

石器点数と分布範囲（面積）の関係では相関関係はみうけられず、三ノ宮・下谷戸I（166-No.1）のように石器点数が多く、分布状態で「密集」（510m²）と捉えられる石器集中がある一方、吉岡B区（草2）

(101-No.1)のように石器点数(31点)が少ないが、「密集」(200m²)と捉えられる石器集中もある。とはいえ分布範囲(面積)が500m²以上であれば、器種組成における構成器種の種類が多くなるといった傾向がうかがえる。注目すべきは石鏃を伴う石器集中7集中のうち、6集中が槍先形尖頭器を伴う石器集中であることである。石鏃と槍先形尖頭器が組み合わせとして意味を持つかどうかは、今後の詳細な出土状況の検討を要する。

有舌尖頭器を伴う石器集中は、柏ヶ谷長ヲサ(縄)(74)、月見野上野第1地点I(81-No.2)、吉岡C区(草)(102-No.15)、吉岡D区(草)(103-No.1)、代官山I(109-No.K)、慶應義塾藤沢校地内(草2)(118-No.A・No.B①(12.0×9.0)・②(15.0×12.0)③(46.4×31.0)・No.C・No.D・No.E)、原口(縄)(171-No.1・2)、月見野上野第5地点I(325-No.1)、遠藤山崎(草)(341-No.1・2)、万福寺1(草)(358)、万福寺2(草)(358)の19石器集中がある。有舌尖頭器を伴う石器集中の分布状況を一つの石器群における石器集中数とすると最大7箇所、最小1箇所、平均は約1.7箇所である。その石器集中で石器点数が最も多いのは万福寺1(草)(358)の3,228点、最も少ないのは月見野上野第5地点I(325-No.1)の2点である。その分布範囲は、最小が吉岡C区(草)(102-No.15)の4.2m²で、最大が原口(縄)(171-No.2)の7,800m²となるが、2番目は慶應義塾藤沢校地内(草2)(118-No.B③)の1438.4m²である。石器点数と分布範囲(面積)では相関関係はみうけられず、万福寺2(草)(358)のように、石器点数が719点で、分布状態で「集中」(80m²)と捉えられる石器集中がある一方、遠藤山崎(草)(341-No.1)のように石器点数が576点で、分布状態で「やや密集」(475m²)と捉えられる石器集中もある。注目すべきは分布範囲(面積)の大小に関係なく、有舌尖頭器を伴う石器集中19集中、10集中が槍先形尖頭器を伴う石器集中であることである。これは相関がありそうである。

槍先形尖頭器・石斧を伴う石器集中は、槍先形尖頭器か石斧以外に石鏃、有舌尖頭器、細石器を伴わない石器集中で、栗原中丸I(70-No.3・4)、月見野上野第1地点(81-No.8・10・11・16・20・26)、長堀北II(85-No.5・8)、深見神社南I(89-No.1)、寺尾I(96-No.1・5・7・9・10・12・14・16・19・21)、吉岡A区(100-No.1・2、No.なし(FBL~漸移層))、吉岡C区(102-No.2・3・6~11・13・14)、吉岡D区(草)(103-No.2・4)、代官山I(109-No.D)、南葛野(草)(116-No.1・2)、慶應義塾藤沢校地内(草2)(118-No.E)、宮ヶ瀬北原No.10・11北(129-No.1~4)、宮ヶ瀬馬場No.6(131-No.2・4~7)、宮ヶ瀬南(132-No.1・2)、原口(縄)(171-No.3・4)、下森鹿島I(216-No.2・9・18・21・26)、藤沢市No.419(草)(219-No.1)、藤沢市No.419第1地点(草)(219-No.1)、葛原滝谷(草)(336-No.1)、遠藤山崎(草)(341-No.3)、下鶴間城山I(354-No.3)の64石器集中がある。槍先形尖頭器か石斧を伴う石器集中の分布状況を一つの石器群における石器集中数とすると最大10箇所、最小1箇所、平均は約3.0箇所である。その石器集中で石器点数が最も多いのは吉岡A区(100-No.なし)の862点、最も少ないのは宮ヶ瀬馬場No.6(131-No.2)・代官山I(109-No.D)・深見神社南I(89-No.1)の2点である。その分布範囲は、最小が吉岡C区(102-No.9)の0.27m²で、最大が吉岡A区(100-No.2)の39,900m²となるが、2番目は吉岡A区(100-No.なし(FBL~漸移層))の800m²である。石器点数と分布範囲(面積)では相関関係はみうけられず、吉岡C区(102-No.11)のように石器点数が552点で、分布状態で「密集」(77.3m²)と捉えられる石器集中がある一方、吉岡A区(100-No.なし(FBL~漸移層))のように石器点数が862点で、分布状態で「密集」(800m²)と捉えられる石器集中もある。分布状態(面積)や石器点数に関係なく、槍先形尖頭器か石斧を伴う石器集中64集中のうち、槍先形尖頭器と石斧を伴う石器集中は5石器集中

で、このうちで更に礫器を伴う石器集中は2石器集中ある。槍先形尖頭器に礫器を伴う石器集中は8石器集中あるが、石斧に槍先形尖頭器を除いて礫器を伴う石器集中はみあたらない。また槍先形尖頭器に石核を伴う石器集中は9石器集中あり、石斧に剥片を伴う石器集中は4石器集中ある一方、石斧に石核を伴う石器集中はみあたらないといった傾向が看取される。これらのことから槍先形尖頭器は礫器や石核と共伴し、石斧は剥片と共伴する傾向が高いように思われる。このことは資料数が少ないながらも槍先形尖頭器・石斧を伴う石器集中を単位とした場合に抽出される石器組成のあり方を考える上で極めて重要な要素になりうる。また、槍先形尖頭器を伴う石器集中58集中のうち、約1割を占める6石器集中で搔器・削器・石核を伴い、約3割を占める18石器集中で搔器か削器を伴う石器集中であり、着柄に関連する場を想定できようか。

細石器（船底形石器を含む）を伴う石器集中は、勝坂（第45次）（67-No.1）、月見野上野第1地点（81-No.1・2・6・7・9・13・14・19・22・24・30・31）、長堀北II（85-No.1～4・7）、上和田城山（1、2次）I（90-No.6区1・6区2）、寺尾I（96-No.4・11・13・17・18・20）、吉岡B区（101-No.1～4）、吉岡C区（草）（102-No.4）、下溝上谷開戸（357-No.6）の29石器集中がある（吉岡B区101はNo.1～4の4つの石器集中として前回までにデータ集成したが、これらの記載はいずれも全く同じであることから本稿では一つの石器集中として扱う）。細石器を伴う石器集中の分布状況を一つの石器群における石器集中数とすると最大12箇所、最小1箇所、平均は約3.6箇所である。その石器集中で石器点数が最も多いのは吉岡B区の3,618点でこの石器集中をNo.1～4の4つに均等割りした場合でも一つの石器集中の石器点数は約900点を占める。石器点数が最も少ないのは下溝上谷開戸（357-No.6）の2点である。その分布範囲は最小が月見野上野第1地点（81-No.6）・下溝上谷開戸（357-No.6）の1㎡で、最大が長堀北II（85-No.7）の44㎡であることから、最小と最大で50㎡も差がないという結果となった。このことは細石器を伴う石器集中は極めて限定された範囲に分布するという石器分布の特徴が捉えられるが、石器分布をそのように捉えてしまう「細石器」という石器の性状自体が分布範囲を捉える際にも影響しているとも考えられる。今後、石器分布の範囲を考える上では石器性状の違いによって捉えられる石器分布の範囲が異なる可能性も考慮しなければならぬ。石器点数と分布範囲（面積）では相関関係はみうけられず、寺尾I（96-No.20）のように石器点数が473点で分布状態で「密集」（17.6㎡）と捉えられる石器集中がある一方、月見野上野第1地点（81-No.24）のように石器点数が46点で、分布状態で「密度が低い」（14.4㎡）と捉えられる石器集中もある。本石器集中29石器集中のうち、細石刃に槍先形尖頭器を伴う石器集中は16石器集中あり、船底形石器か細石核に槍先形尖頭器を伴う石器集中は12石器集中あり、その両者を伴う石器集中は8石器集中ある。このことは細石器が槍先形尖頭器と共伴することを石器集中を単位としてより強く認識せざるをえない状況が想定される。他に細石器（細石刃）に槍先形尖頭器のみならず、石斧を伴う石器集中は寺尾I（96-No.18）の1石器集中があり、船底形石器を細石器関係の所産と考えてこれに槍先形尖頭器と石斧を伴う寺尾I（96-No.20）の石器集中を含めた場合、2石器集中を数えるが、寺尾遺跡に限定されたあり方である。

b) 石器集中と石材組成

石鏃を伴う石器集中の石材組成は7石器集中のうち、安山岩・ホルンフェルスをいずれの石器集中でも含み、凝灰岩を含む石器集中が6石器集中あり、次いでチャート・黒曜石の5石器集中、頁岩の4石器集中となる。三ノ宮・下谷戸I（166-No.1・2）や長堀北I（85-No.1）等の石器集中でも黒曜石は主体的な石材でないことが確認される。有舌尖頭器を伴う石器集中の石材組成は19石器集中のうち、安山岩（ガラス質黒色・細流・輝石安山岩等を含む）もしくは凝灰岩を含む石器集中が13石器集中、頁岩（珪質・黒色頁岩等

を含む)を含む石器集中が10石器集中あり、これらの石材が石器集中の主体を占めることが確認される。本石器集中では黒曜石が主体を占める石器集中はみうけられない。槍先形尖頭器・石斧を伴う石器集中の石材組成は63石器集中(1石器集中が不明のため)のうち、凝灰岩を含む石器集中は48石器集中、安山岩を含む石器集中は42石器集中、黒曜石を含む石器集中が27石器集中、粘板岩を含む石器集中は22石器集中、砂岩を含む石器集中は21石器集中、頁岩を含む石器集中は14石器集中である。全ての石材に数量の記載があるわけではないため詳細は不明となるが凝灰岩か安山岩が石器集中の主体となる石材である可能性が示唆される。月見野上野第1地点(81-No.10・11・16・20)の4つの石器集中のように砂岩を主体とする石器集中や南葛野(草)(116-No.2)石器集中のように黒曜石を主体とする石器集中もあるが、黒曜石を主体とする石器集中は総点数5点にとどまる。注目すべきは寺尾I(96-No.1・5~7・9・10・12・14・16・19・21)の10石器集中の石材組成がいずれも凝灰岩、安山岩、黒曜石、粘板岩、砂岩、頁岩の6種類の石材のみで構成されていることである。これらの石材の組み合わせが一つの遺跡に限定される石器集中でもあることから何らかの特殊な場の機能を反映している可能性も考えられる。細石器を伴う石器集中の29石器集中のうち、黒曜石・砂岩を伴う石器集中は20石器集中、凝灰岩を伴う石器集中は18石器集中、安山岩を伴う石器集中は14石器集中、チャートを伴う石器集中は13石器集中、粘板岩を伴う石器集中は12石器集中である。また、寺尾I(96-No.4・11・13・17・18・20)の6石器集中のうち、5石器集中の石材組成がいずれも凝灰岩、安山岩、黒曜石、粘板岩、砂岩、チャートの6種類の石材のみで構成されている。

c) 石器集中と遺構分布

石鏃を伴う石器集中では三ノ宮・下谷戸I(166-No.1・2)、花見山(縄)(31)等のように石器点数が多く、分布範囲が広い石器集中で遺構もしくは土器を伴うことが確認される。有舌尖頭器を伴う石器集中では19石器集中のうち、吉岡C区(草)(102-No.15)、月見野上野第5地点I(325-No.1)等のように石器点数が少なく、分布状態が密集と捉えられない石器集中以外では遺構もしくは土器を伴うことが確認される。槍先形尖頭器・石斧を伴う石器集中では約半数の35石器集中で遺構もしくは土器を伴わない石器集中だが、その石器集中は石器点数が少なく、分布状態が散漫である。伴う土器には隆線文・爪形文・無文土器等がある。細石器を伴う石器集中では約7割を占める19石器集中で遺構もしくは土器を伴い、更に土器を伴う場合には遺構も伴い、その際の土器は無文土器である。遺構もしくは土器を伴う石器集中は石器点数の大小や分布状態と相関性がないあり方を呈している。(井関)

2. L1S層~B0層の石器集中

L1S層~B0層の石器集中であるが、相模野編年では第V期後半(鈴木・矢島 1976)、段階X(細石器を伴う段階)にあたる。本段階の石器群を検討するにあたり、報告書において「L1S層」「L1S~B0層」「L1SL~B0U層」「B0層」「B0U層」「B0M層」「B0L~U層」等の記載のある層位を対象とするがここでは主にL1SL~B0M層を中心とする。また「L1S~B1層」のように層を跨いで出土した遺跡・石器群については基本的に除外し検討対象外とした。遺跡No.62(以下No.省略)、70、71、73、74、81、82、84、85、88、90、91、93、94、97、102、103、109、121、125、126、127、128、154、163、164、165、166、243、325、328、335、355、357の34遺跡33文化層を検討対象とする。石器集中数は78箇所である。

a) 石器集中の器種組成

細石器を伴う石器集中を1つの文化層においてみると最大28箇所、最小1箇所、平均3.8箇所である。石

器集中の最多出土点数は三ノ宮・下谷戸Ⅲ（166- No.1）の3,977点、最小は代官山Ⅱ（109- No.A）と下溝上谷開戸Ⅱ中（357- No.7）の2点である。

石器集中範囲は、最小0.11㎡から最大765㎡までである。集中範囲は、10㎡未満が64例と最も多い。10～19㎡が36例、20～29㎡が宮ヶ瀬サザランケⅡb（128- No.1）（第1図）等10例、30～39㎡が5例となる。40㎡以上の分布範囲は用田鳥居前Ⅰ（335- No.1～3）（第2図）等24例である。出土範囲と遺物点数の関係では、台山Ⅱ（84- No.1）のように9.2㎡の範囲から146点出土する例もあるが、分布範囲が10㎡を下回ると出土数が10点以下の箇所が30箇所と、分布範囲と出土点数には概ね比例関係が見られる。遺物分布状態をみると不明（記載無し）、点在、散漫、散在、求心、やや集中、中央集中、やや密、密集、密度濃い（高い）などがある。不明（記載無し）が49箇所と多いが、石器出土数が少数でも密集状態の例はあるものの、石器出土点数と密集の度合い・分布密度にも比例関係が見られる。石器の器種は、細石器を伴う60箇所の石器集中のうち、細石器が多くを占める石器集中が23箇所である。細石器を伴う石器に搔器・削器・彫器等の剥片石器を伴う石器集中は22箇所であるが、このうち搔器のみを伴う石器集中が13箇所あり、削器（削片）のみを伴う石器集中が19（1）箇所、彫器のみを伴う石器集中は僅かに1箇所である。さらに搔器・削器を併せて伴う石器集中は11箇所である。細石器を伴う石器に叩石・磨石・礫器等の礫石器を伴う石器集中は12箇所であるが、叩石のみを伴う石器集中は12箇所あり、磨石のみを伴う石器集中は3箇所、台石のみを伴う石器集中は2箇所、凹石のみを伴う石器集中は2箇所である。さらに叩石・磨石を併せて伴う石器集中は3箇所、叩石・磨石・台石を併せて伴う石器集中と台石・凹石を併せて伴う石器集中は僅かに各1箇所である。細石器を伴う石器集中に剥片石器・礫石器の両者を伴う石器集中は12箇所見られ、器種組成に様々な形態が見られるが、削器・叩石を併せて伴う石器集中が5箇所と半数近くを占めている状態である。これらの器種組成では、細石器及びそれに削器・搔器・彫器等の剥片石器を含む石器集中の多くを占めている。

b) 石器集中の石材組成

本層の細石器を伴う石器集中で主な石材は、黒曜石、凝灰岩、チャート、砂岩、ホルンフェルス、粘板岩、安山岩、頁岩、玄武岩等である。

この段階では黒曜石を伴う石材組成とチャートを伴う石材組成の石器集中があることが知られているが、黒曜石を伴う石器組成の石器集中は27箇所見られ、黒曜石・チャートを伴う石器組成の石器集中は26箇所、チャートを伴う石器組成の石器集中は3箇所、黒曜石・チャート以外の石材を伴う石器集中と石材が不明の石器集中がそれぞれ1箇所見られ、黒曜石を伴う石材組成の石器集中と黒曜石・チャートを伴う石材組成の石器集中がその大半を占めている。また本層では14箇所の石器集中から槍先形尖頭器が検出されているが、細石器を伴う石器集中から槍先形尖頭器が出土した箇所は8箇所である。このうち6箇所は黒曜石を伴う石材組成の石器集中からで、残り2箇所は黒曜石・チャートを伴う石材組成の石器集中からである。細石器を伴う石器群の石材組成から分布や範囲の傾向・差異を読み取ることは石材別の平面・断面分布図を掲載していない報告書が多いため困難である。

c) 石器集中と遺構分布

本層の細石器を伴う石器集中で確認された遺構は、礫群32箇所（以下遺構名後の箇所は省略）、炉址1、木炭集中1、配石状礫1である。これ以外に細石器を伴わない石器集中で確認された遺構は礫群32、配石1である。

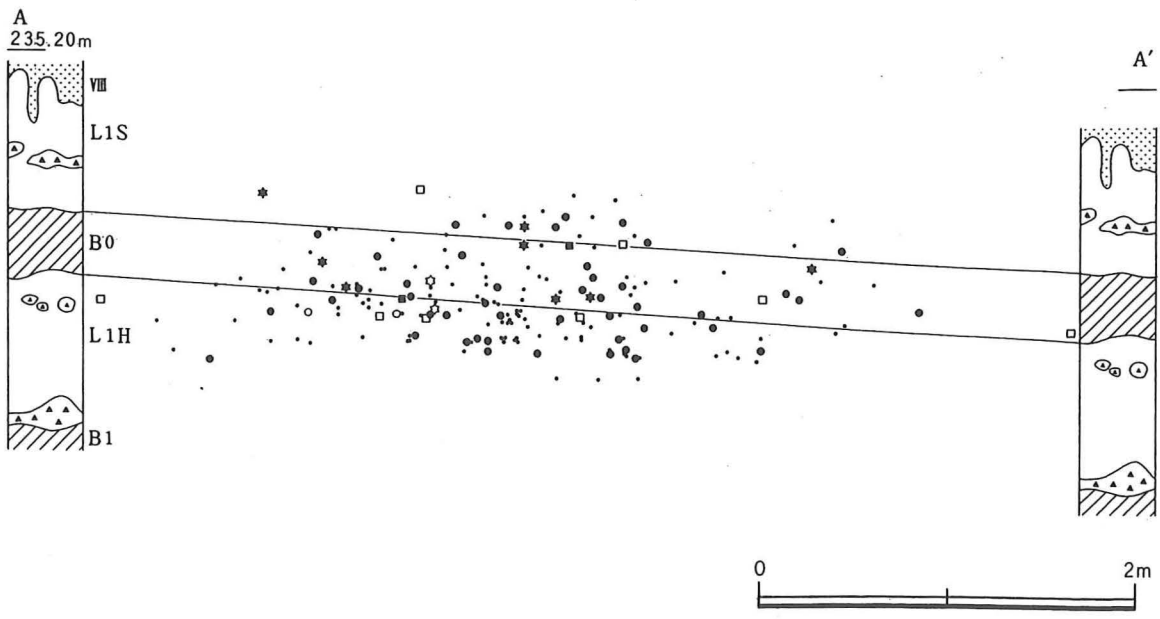
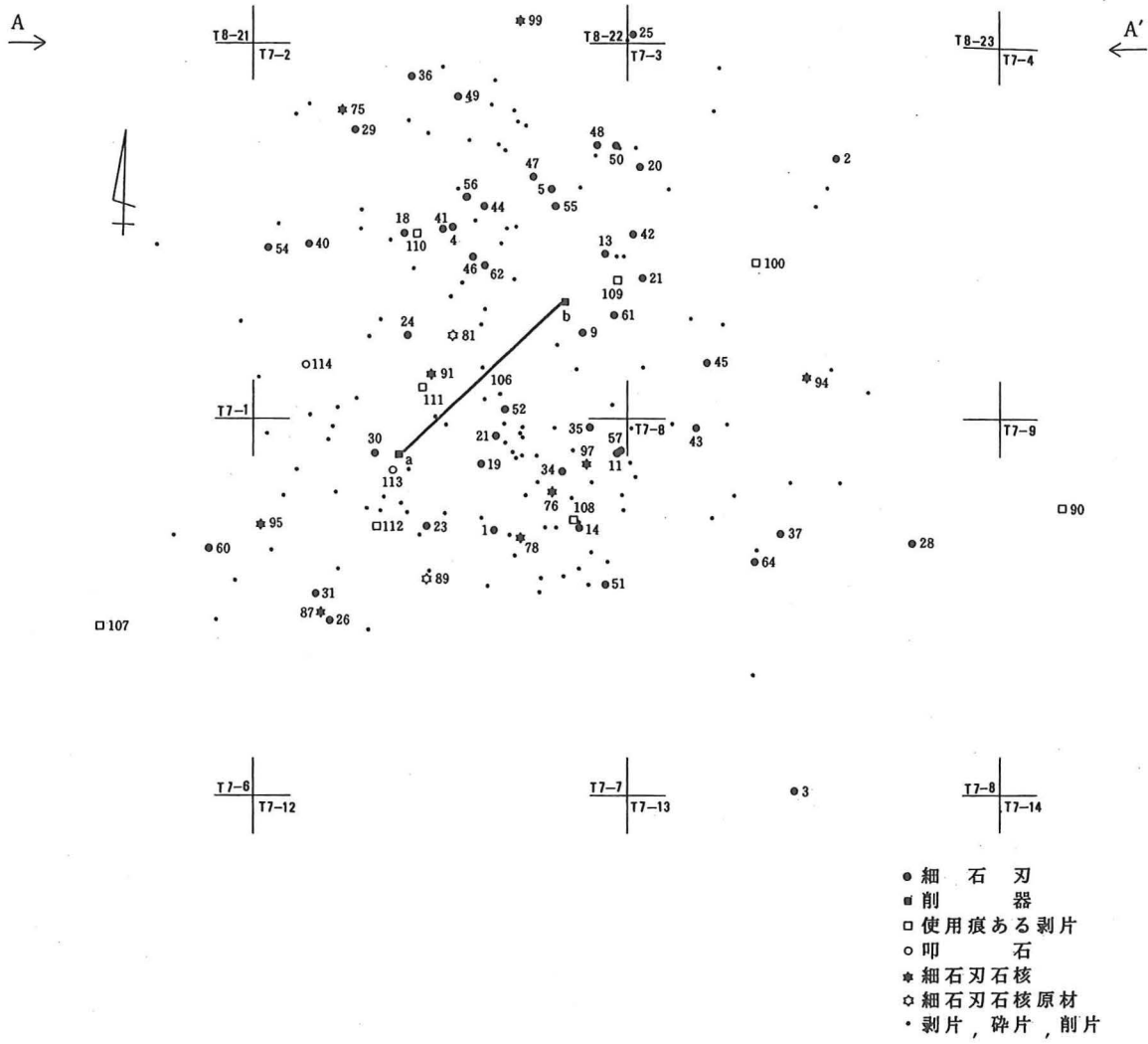
礫群が一番多く見られる遺構であり、他は僅少である。石器集中と重複もしくは一部重複している礫群は

12箇所では独立している。礫群は2m～12mの範囲にまとまって確認される状態が多い。石器集中と礫群との関係は、礫群を伴う石器集中15箇所のうち、細石器を伴う石器集中が8箇所、細石器を伴わない石器集中と槍先形尖頭器・細石器を伴う石器集中はそれぞれ3箇所見られた。

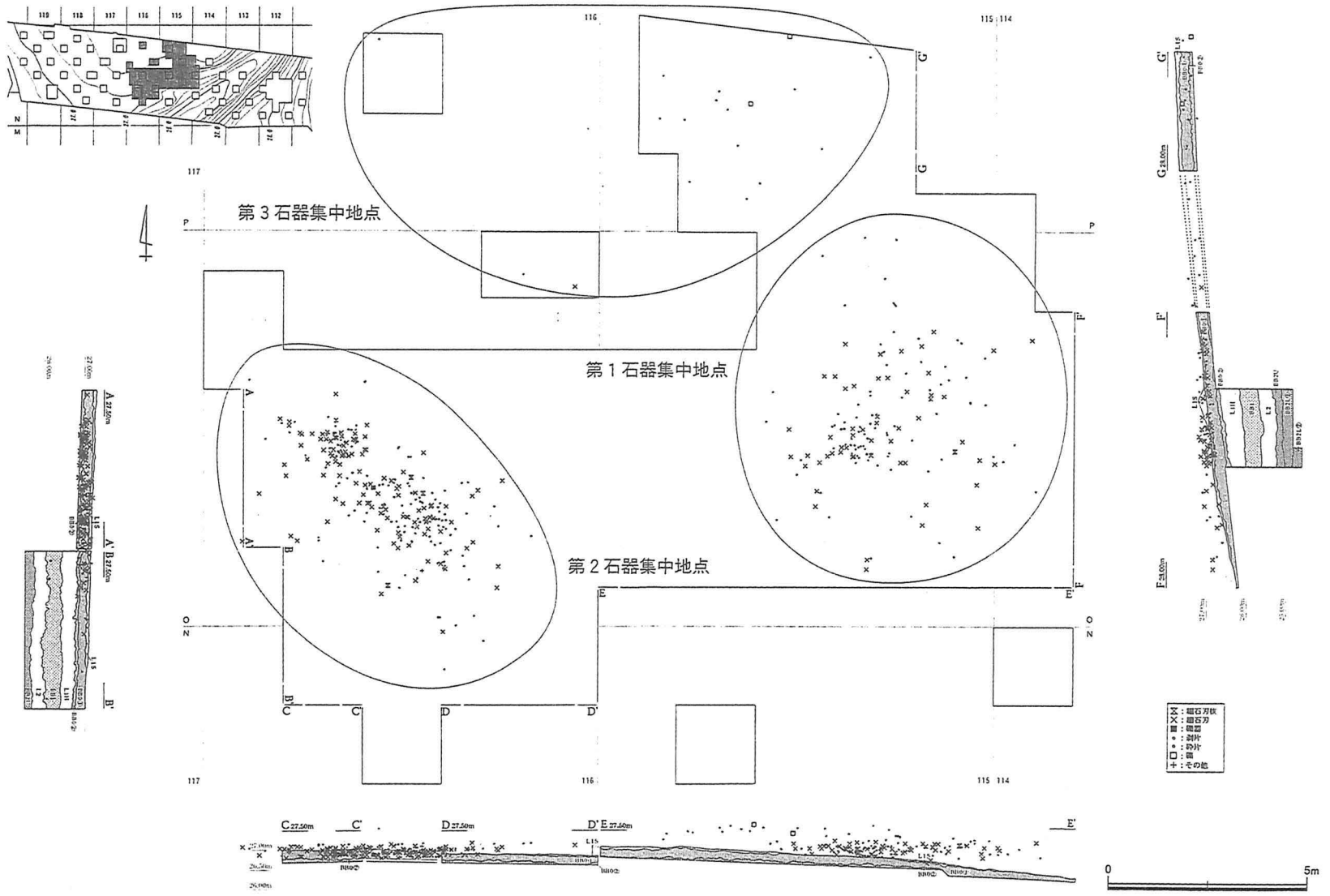
炉址、木炭集中については上和田城山（1、2次）Ⅱ（90-No.4区A・B）でそれぞれ1箇所検出されている。炉址は、Aブロックで、木炭集中はBブロックでの検出である。炉址は5.6m×3.2mほどの範囲の石器集中と平面的・断面的に重複しているが平面では南西寄りに、断面では下底の石器分布の中心からずれて確認されている。炉址の直上には1.2m×0.9mほどの範囲で、木炭片が楕円形状に30cm～55cmほどの厚みを持って堆積している。炉址の北側には10cm～15cmほどの礫5点（被熱の有無は不明）が接して散在しているが断面分布はほぼ平坦である。木炭集中は、8.5m×4.2mほどの範囲の石器集中・破碎礫と平面的・断面的に重複しているが平面ではブロックの遺物が散漫な状態の南側に部分的に、断面では下底の石器分布の中心部分に納まって確認されている。木炭集中の範囲は2.3m×1.7m、厚さ80cmほどの楕円形状で、木炭片は断面分布ではB0層の下部から上部へかけて扇状に放射現象を起こし上昇・拡散する傾向を見せている。木炭集中と部分的に重複し、その北側に散在する破碎礫は、木炭集中との関連性が見てとれる。

配石状遺構は田名塩田B地点Ⅰ（62-No.1）で1箇所、2.4m×1.6mほどの範囲で10cm～50cmほどの大形礫16点（被熱の有無は不明）が環状に検出されている。9.1m×8.3mほどの範囲の石器集中（1号ブロック）と平面的・断面的に重複しているが平面ではやや東側に、断面では下位の石器分布の中心からややずれて確認されている。大形礫の断面分布はほぼ平坦である。配石は柏ヶ谷長ヲサⅢ（74-No.1）で2箇所検出されている。径16mほどの範囲の石器集中に2.8m×1.7mほどの範囲の礫群と、1.9m×0.9mほどの範囲の礫群2箇所が平面的にはやや中心からずれて重複し、さらにこの礫群範囲の中に配石の分布が重なっている。石器集中と礫群・配石の断面的な重複関係については報告書からは捉えられなかった。上記の各遺構は、大多数が石器集中と重複するという傾向が認められる。しかし、細石器を伴う石器集中における礫群は散漫な分布を示している。

（長澤）



第1図 宮ヶ瀬サザランケ (No.12) 遺跡 第II b文化層第1ブロック遺物分布図



第2図 用田鳥居前遺跡 第I文化層 第1～3石器集中地点遺物出土状況図(器種別)

3. B0層～L1H層の石器集中

ここではB0L～L1H層を対象とする。この段階は、相模野編年では第V期。段階Ⅷ（槍先形尖頭器を伴う段階）、段階Ⅸ（細石器を伴う段階）にあたる。本段階の石器集中を検討するにあたり、報告書において「B0L」「B0L～L1H」「L1H」の記載のある層位を対象としている。また「L1S～B1層」といったように層を跨いで出土した石器集中については基本的に除外しているが、石器集中の内容が明確な遺跡については検討対象とした。遺跡No.31（以下No.省略）、48、68、74、80、81、82、85、90、91、94、96、99、103、109、111、118、120、127、128、165、183、185、325、326、328、340、348、352、356の29遺跡、36文化層を検討対象とする。石器集中数は、段階Ⅷで153箇所。段階Ⅸで21箇所である。

a) 石器集中の器種組成

槍先形尖頭器を伴う石器集中からは、ナイフ形石器、搔・削器、彫器、錐器、UF、RF等が確認され、細石器を伴う石器集中も同様の器種組成が見られる。上記器種は、両石器集中とも分布範囲の中心やや外側から出土していることが確認できる。この他、器種別の分布や規模、密度などの傾向や差異について検討したが、それらを見つけることは出来なかった。

次に石器集中の分布・範囲・規模・密度を見ることとする。槍先形尖頭器を伴う石器集中の一遺跡の石器集中数は最大37箇所、最小1箇所、平均6.4箇所である。石器集中の最多出土点数は用田南原Ⅱ（340-No.4）の2,468点、最小は長堀北Ⅳ（85-No.5）（他2遺跡の石器集中あり）の2点である。石器集中範囲は、最小0.08㎡から最大150㎡までである。集中範囲は、10㎡未満が78例と群を抜いて多い。10～19㎡が35例、20～29㎡が14例、30～39㎡が16例となる。40㎡以上の分布範囲は10例である。

出土範囲と遺物点数の関係では、4.3㎡の範囲から441点出土するケースもあるが、150㎡から23点しか出土しないケースもある。範囲と点数は比例関係になく、石器集中の性格・作業内容の違いによると思われる。遺物分布をみると不明（記載無）、点在、希薄、散漫、求心傾向、密集などがある。不明が多いが、少数でも密集状態にあったり、その逆もあったりと「遺物量の多さ＝密集」という関係を見て取ることは難しい。

細石器を伴う石器集中の一遺跡における石器集中数は最大8箇所、最小1箇所、平均3.5箇所である。対象とした遺跡の石器集中の多寡も影響していると思われるが、槍先形尖頭器を伴う石器集中の約2分の1の数である。石器集中での最多出土点数は柏ヶ谷長ヲサⅣ（74-No.1）の717点、最小は吉岡D区Ⅰ（103-No.2）の14点である。石器集中範囲は、最小2.7㎡から最大90㎡までである。集中範囲は、10㎡未満が9例と一番多く、次に10～19㎡が6例と続く。この石器群では20㎡未満のものが7割を占め、30㎡を超えるものは3割である。槍先形尖頭器を伴う石器集中の分布範囲と比較すると、10㎡未満のものが多い事は共通するが、20㎡以上の分布範囲が顕著に少なくなっている。出土範囲と遺物点数の関係では、槍先形尖頭器を伴う石器集中と同じように遺物量と分布範囲との比例関係はない。遺物の分布は、密集が多い傾向にある。遺物分布密度が高いと出土点数が多い傾向にあり、槍先形尖頭器を伴う石器集中とはやや異なった在り方をするようである。

b) 石器集中の石材組成

槍先形尖頭器を伴う石器集中に含まれる石材はチャート、粘板岩、硬質砂岩、玄武岩、ガラス質安山岩、黒曜石である。この段階では、黒曜石を伴う石器集中とチャート等の在地の石材を伴う石器集中のあることが知られている。細石器を伴う石器集中に含まれる石材は黒曜石、安山岩、凝灰岩、頁岩、チャート、頁岩で、黒曜石が圧倒的に多い。槍先形尖頭器を伴う石器集中では同一遺跡内にある石器集中毎の石材組成の変

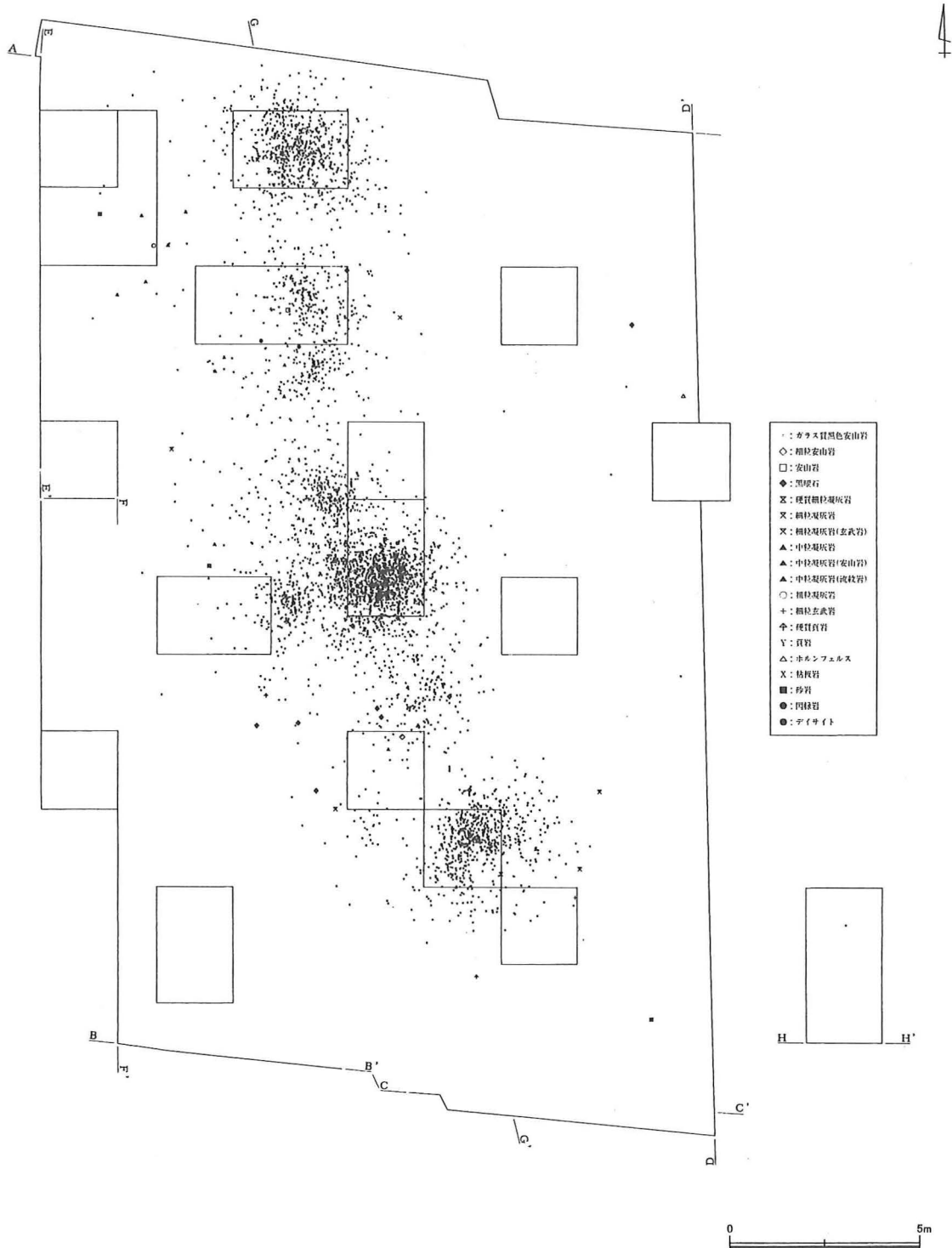
化は少ないが、中村Ⅲ（68-No.1～14）や月見野上野第1地点Ⅳ（81-No.1～37）では一遺跡内で確認された各石器集中において、それを構成する石材の種類が多いと、槍先形尖頭器の点数が多い傾向が見られた。中村Ⅲでは石材平均3.7種類に対し、槍先形尖頭器を含む石器集中の平均は4.7種類。月見野上野第1地点Ⅳでは平均3.7種類に対し、槍先形尖頭器を含む石器集中平均は4.5種類であった。石材組成の分布や範囲については、点数の多い石材が中心部に分布するのに対し、数量が少ない石材は、外縁に分布するという傾向が用田南原Ⅱで認められた（第3図）。なお石材別の平面分布図を掲載していない報告書が多いため、即断出来ないが、他の遺跡でも同様の傾向が見られる可能性がある。

細石器を伴う石器集中の石材組成は、代官山Ⅲ（109-No. A～G）のように石器集中の石材の全てが黒曜石のみで構成されているものは多くはなく、黒曜石に加えて安山岩、凝灰岩、チャートが混じるという石材組成をしている。これらの石器集中についても、上記と同じ理由で情報を読み取ることは困難であった。

C) 石器集中と遺構分布

槍先形尖頭器を伴う石器集中で確認された遺構は、礫群58、炭化物集中5、石囲炉2、配石1である。槍先形尖頭器を伴う石器集中で礫群が一番多く見られる遺構であり、石囲炉・配石は僅少である。礫群は、1つの石器集中と重複、もしくは一部重複していたり、幾つかの石器集中に跨り重複している。独立した礫群もあるが、多くはない。礫群は1m～3mの範囲にまとまって確認されるケースが多い。炭化物集中は、石器集中と重複しているが、中心からは、ややずれて確認され、単独分布もある。石囲炉・配石は、宮ヶ瀬サザランケ（No.12）Ⅲ（128-No.3 4）で確認されている。石囲炉は2例あり、いずれも石器集中と重複している。また石囲炉の1つは、配石と近接している。

（脇）



第3図 用田南原遺跡 第II文化層 第1～6石器集中地点 遺物出土状況〔平面〕図（石材別）

おわりに

今回対象とした時期は細石器石器群を中心とするその前後に相当する。下層からは、1・L I H層～B O下部層の槍先形尖頭器の展開と細石器の発生と展開初頭、2・B O層中部～L I S層下部の細石器の発展期、3・L 1 S層中部～F B層の在在系細石器の終末と削片系細石器の進出と縄文時代相草創期に該当する。

この間の槍先形尖頭器の分布は細石器群よりも広範で礫群は散漫化し、細石器石器群石器分布は集中的で礫群の散漫化を継続し、配石をままた伴ってくる。石材組成では細石器石器群の黒曜石の偏在性が多種化し、縄文時代草創期へと継続する。器種組成は細石器石器群と搔器・削器・礫器の伴い方が、草創期での槍先形尖頭器との伴い方に継続、石斧と剥片の伴い方や集中地点と石材組成の特異性が際立ってくる。これらの集中地点の規模と礫群・配石の設備、特定器種間の結びつきは、石器石材の選択、動植物素材の利用と狩猟具・加工具のメンテナンスなど、環境利用と土地改変にまで及ぶ器種形態を超えた場の機能が想定される。今回集成した遺物分布に関する各属性の検討は今後もおこなわれる。(砂田)

引用・参考文献

- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 1996～2001 「旧石器時代後半における石器群の諸問題」『研究紀要1～6』
財団法人かながわ考古学財団
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2002～2007 「神奈川県内における旧石器時代の遺構」『研究紀要7～12』
財団法人かながわ考古学財団
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2008～2009 「神奈川県における旧石器時代の遺物分布」『研究紀要13～14』
財団法人かながわ考古学財団
- 鈴木次郎・矢嶋國雄 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1 神奈川考古同人会
- 諏訪間 順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について — 層位的出土例の検討による石器群の段階的把握 —」
『神奈川考古』24 神奈川考古同人会
- 諏訪間 順 2001 「相模野旧石器編年の到達点」『考古学講座 相模野旧石器編年の到達点』神奈川県考古学会

神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅷ

—後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その1—

縄文時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

昨年までの後期初頭期・称名寺式土器文化期をめぐる研究に続き、今回から後期前葉の堀之内式土器文化期の様相を検討する。

後期前葉になると、東京湾の東岸一帯や霞ヶ浦沿岸に大規模な貝塚が営まれ、また神奈川県を含む関東西南部一帯には配石遺構を伴う遺跡が形成されるようになる。遺跡・遺物に示される関東地方の縄文時代社会は、中期末葉から後期初頭の退嬰期とも呼ぶべき減少傾向を脱し、この時期に新しい段階を迎えたとしてよいだろう。また遺跡数が増え、その規模が拡大する一方で、中期段階では認められなかった文化的要素が加わるのである。例をあげれば、前述した配石遺構がそうであるし、後期の縄文土器を特徴づける注口土器もまた堀之内式期でその器形が確立し、土器の組成の中に一角を占めることとなる。

こうした堀之内式期から加曽利B式期にかけての遺跡は県内に多数が知られ、後述するようにここ神奈川県は当該時期を扱う研究者にとって格好のフィールドを提供してきた。

今回は報告書を中心とした文献から、堀之内式段階の遺跡に関する情報を抽出し、遺跡のデータベースを作成した。集成したデータについては従前に倣い、神奈川県内における堀之内式土器出土主要遺跡を地名表・参考文献としてまとめ、掲載している。集成したデータに基づき、次年度以降、住居址出土の一括資料に比重を置きながら、主要遺跡における土器の比較・検討を行い、当該段階における「土器編年試案」構築をめざす。また堅穴住居址・住居以外の遺構・集落構造・遺跡分布及び土器以外の遺物に関する検討を実施していく計画である。

2. 研究略史

堀之内式土器は、千葉県堀之内貝塚採集資料や1921年の東京大学人類学教室による出土遺物を標識遺跡として山内清男により設定された土器型式である。学史的には1924年の千葉県加曽利貝塚の発掘調査、1925年の千葉県姥山貝塚、1928年の千葉県上本郷貝塚の発掘調査を経る中で、阿玉台式・加曽利E式・堀之内式・加曽利B式の配列が明らかにされたとされるが、堀之内式土器の型的な内容が明確に示されるのは、1940年の山内清男による『日本先史土器図譜』（山内1940）を待たねばならなかった。なお、山内が示した土器型式の変遷は、その後、加曽利E式と堀之内式の間で1951・1957年に発掘調査された横浜市金沢区の称名寺貝塚出土土器から型式提唱された称名寺式を挟むことにより、現在我々が見る加曽利E式・称名寺式・堀之内式・加曽利B式という中期後葉から後期前半にかけての配列が出来上がる。また前段階となる称名寺式が設定されることにより、堀之内式土器の位置づけが明瞭となり、その系譜や地域性へと研究者の注意が向けられることとなった。今村啓爾による称名寺式から堀之内式への系統的な研究（今村1977a・b・1981）はその代表であろう。堀之内式土器の研究はその後の調査事例の増加により、編年的な序列と系統・地域性へと展開していく。

堀之内式土器研究の大きな画期となったのは、市立市川考古博物館による「シンポジウム堀之内式土器」(市立市川考古博物館1982)である。同シンポジウムでは、関東北部、下総台地、大宮・武蔵野台地、関東西南部の地域別の報告により、堀之内式土器の編年とその地域性への研究者の関心を集めることとなった。特に東南西部の編年と資料を担当した石井寛による作業、同じくシンポジウムで下総台地を中心とした関東南東部についての鈴木徳雄による分類と編年の提示などは、その後続く諸研究の基礎になるものと位置づけられる。また、港北ニュータウン埋蔵文化財調査団により開催された「称名寺式土器に関する交流研究会」(港北ニュータウン埋蔵文化財調査団1985)により、称名寺式土器の最終末段階と初現期の堀之内式土器との関連が照射されたことも、ここでふれておかなければならないだろう。なお、堀之内式の地域性・地域差については、既に山内清男による指摘があり(山内1940)、『先史土器図譜』の中で、「下総方面」と「武蔵相模方面」の位相の違いが述べられている。こうした地域性について、特に後者「武蔵相模方面」の土器群を、「下北原式土器」(安孫子1981)や「東正院式」(澤柳1979)と呼称する主張があった。これらの土器群の扱いについては、研究者間でも扱いが異なり、一定の定義は難しい。安孫子昭二による「下北原式土器」は比較的研究者間に膾炙したもので、無文地に沈線を描いた前段階称名寺式の系譜を引く土器群と理解されたが、型式名称として定置されることはなく現在に至っている。

80年代後半から90年代には堀之内1式土器についての阿部芳郎による論考(阿部1987・1988a・b・1990・1994)が発表された。阿部は一連の研究で東北地方南部における編年に照らしながら堀之内1式土器の編年を提示するとともに、その「構造」へと論及している。一方、阿部の諸作業に相前後し、堀之内式土器の編年研究の強力な推進役となったのが前述の石井である。石井はシンポジウムの後、1984年に堀之内2式土器の編年を提示した(石井1984)。石井による5細分は、今なお当該時期編年の基軸の一つと見なされる。その後石井は堀之内1式土器について6つの類型とその5細分を提示した(石井1993)。石井の編年は「各類型の変遷・消長と相互の関係や、地域性の把握などが示され、今日、最も整備された編年案」との評価(加納2008)を得ている。また石井は続く1995年には横浜市原出口遺跡20号住居址出土の一括資料について、堀之内1式終末から堀之内2式の資料を集成し、後者が成立する複雑な様相を、主に東北地方の土器群との関係から論じている(石井1995)。

近年の研究は、石井の諸作業や鈴木(鈴木1998・1999b・c、縄文セミナーの会2002a・b)の強い影響下、土器型式内の類型の把握と変遷、類型相互の影響関係また地域性について事例の集成と検討が重ねられている(鯉淵2002、松田2002、加納2000・2003・2008)と把握される。石井が既に指摘するように堀之内式土器の形式的な内容は複雑である(石井1995)。堀之内式土器の分析にあたっては、型式内の土器群における類型の設定、設定した類型の時間的変遷と、類型間の相互影響関係、堀之内式土器の地域性、他地域からの影響等、多角的な視野を踏まえた分析が必要とされるだろう。(小川岳人)

参考文献

- 相川陽子 1994「堀之内式土器」「堀之内1式土器」「堀之内2式土器」『縄文時代研究辞典』東京堂出版
- 安孫子昭二 1981「関東・中部地方」『縄文土器大成 3 後期』講談社
- 阿部芳郎 1987「縄文時代後期前葉型式群の構造と動態」『駿台史学』71
- 阿部芳郎 1988a「堀之内1式土器の構成と変遷」『信濃』40巻4号
- 阿部芳郎 1988b「堀之内2式型式基礎論考〔I〕」『千葉市立加曾利貝塚博物館紀要』15号
- 阿部芳郎 1990「西ヶ原貝塚小泉ビル地点出土の堀之内1式土器について—堀之内1式終末段階の検討序説—」『文化財研究紀要』四集
- 阿部芳郎 1994「西ヶ原貝塚出土の堀之内1式土器とその変遷」『北区埋蔵文化財調査報告』12集
- 石井 寛 1984「堀之内2式土器の研究(予察)」『調査研究集録』第5冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井 寛 1990「称名寺式土器に関する研究史」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井 寛 1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊 (財)横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1993「堀之内1式土器群に関する問題」『牛ヶ谷遺跡・華蔵台南遺跡』(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1995「原出口遺跡20号住居址出土土器群をめぐって」『川和向原遺跡・原出口遺跡』(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 市立市川考古博物館 1982『シンポジウム堀之内式土器資料集』
- 市立市川考古博物館 1983『シンポジウム堀之内式土器の記録』
- 市立市川考古博物館 1992『堀之内貝塚資料図譜』
- 稲村晃嗣 1988「鴻ノ巣貝塚出土の縄文時代後期初頭の土器群(補遺)」『村上徹君追悼論文集』村上徹君追悼論文集編集委員会
- 稲村晃嗣 1989「鴻ノ巣貝塚出土の縄文時代後期初頭の土器群」『考古学の世界』慶應義塾大学民族考古学研究室
- 今井康博 1990「勝田第6遺跡のJ1号住居址出土遺物」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 今橋浩一 1980「堀之内式土器について」『太田区史 資料編考古II』大田区
- 今村啓爾 1977a「称名寺式土器の研究(上)」『考古学雑誌』第63巻第1号 日本考古学会
- 今村啓爾 1977b「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌』第63巻第2号 日本考古学会
- 今村啓爾 1981「主要遺跡・図版解説 120~126」『縄文土器大成 3 後期』講談社
- 今村啓爾 1983「文様の割りつけと文様帯」『縄文文化の研究』5 雄山閣
- 小川和博 1984「堀之内2式土器編年の課題」『奈和15周年記念論文集』奈和同人会
- 柿沼修平 1981「称名寺式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 加納 実 2000「武士遺跡出土の関西系土器群の再評価」『千葉市立加曾利貝塚博物館紀要』27号
- 加納 実 2003「縄文時代後期堀之内1式土器の系統分析」『千葉市立加曾利貝塚博物館紀要』30号
- 加納 実 2008「堀之内式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1985『称名寺式に関する交流研究会 資料集』1985
- 鯉淵義紀 2002「相模湾沿岸域における堀之内2式土器の変遷」『神奈川考古』第38号 神奈川考古同人会
- 斉藤弘道 1978「堀之内式土器研究のあゆみ」『茨城県歴史館報』5 (財)茨城県教育財団・茨城県歴史館
- 縄文セミナーの会 1990『第4回縄文セミナー 縄文後期の諸問題』
- 縄文セミナーの会 2002a『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討』
- 縄文セミナーの会 2002b『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討—記録集—』
- 菅谷通保 1990「堀之内2式土器について」『日暮里延命院貝塚』足立区教育委員会
- 鈴木徳雄 1984「関東西部における縄文後期前半の土器様相」『王子台遺跡とその周辺』東海大学文化部連合会考古学研究会
- 鈴木徳雄 1990「称名寺式土器」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄 1991「称名寺式の変化と文様帯の系統」『土曜考古』第16号 土曜考古学研究会
- 鈴木徳雄 1995「称名寺式の文様施文過程と伝統」『縄文時代』第6号 縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1998「称名寺式の文様変化と論理—称名寺式と堀之内1式の文様構造—」『東海大学校地内遺跡調査団報告8』東海大学校地内遺跡調査委員会
- 鈴木徳雄 1999a「関東地方 後期(称名寺式)」『縄文時代』第10号〔第1分冊〕縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1999b「関東地方 後期(堀之内式)」『縄文時代』第10号〔第1分冊〕縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1999c「称名寺式関伏類型の後裔—堀之内1式期における小仙塚類型の形成—」『縄文土器論集—縄文セミナー10周年記念論文集—』縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄 2000「称名寺式終末期と装飾帯の変化」『群馬考古学手帳』10
- 鈴木正博 1980「加曾利B1式精製土器様式(概説)」『太田区史 資料編考古II』大田区
- 谷井 彪 1977「称名寺式土器の推移について」『埼玉県立博物館紀要』3 埼玉県立博物館
- 中島庄一 1981「土器文様の変化—称名寺様式を中心として—」『神奈川考古』第12号 神奈川考古同人会
- 中島庄一 1989「称名寺式土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 西田泰民 1989「堀之内・加曾利B式土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 西田泰民 1996「堀之内式土器」『日本土器辞典』雄山閣
- 日本人類学会 1950「本会成立七十周年記念 堀之内貝塚発掘」『人類学雑誌』65巻5号
- 堀越正行 2000「堀之内貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1』
- 柳沢清一 1977「称名寺式土器論(前)」『古代』第63号 早稲田大学考古学会
- 柳沢清一 1978「称名寺式土器論(中)」『古代』第65号 早稲田大学考古学会
- 柳沢清一 1979「称名寺式土器論(続)」『古代』第66号 早稲田大学考古学会
- 柳沢清一 1980「称名寺式土器論(結編)」『古代』第68号 早稲田大学考古学会
- 山内清男 1937『縄文土器の細別と大別』先史考古学会
- 山内清男 1940「堀之内式」『日本先史土器図譜』先史考古学会
- 吉田 格 1960「横浜市称名寺貝塚発掘調査報告」『東京都武蔵野郷土館調査報告書』第一冊 武蔵野文化協会

神奈川県内 後期掘之内式土器出土主要遺跡地名表

- (1) この表は、神奈川県内における縄文時代後期掘之内式の主要な遺跡をまとめたものである。掲載にあたっては、当該期の遺構（住居・土坑・埋設土器など）が発見された遺跡の他、遺物包含層などから土器の出土が報告されている遺跡を対象とした。なお、以下の場合は都合によりデータから除外している。①遺跡台帳や遺跡地図で掘之内式土器の出土が記載されているのみの遺跡。②県史・市区町村史、年報・概要集などで掘之内式土器の出土が報じられているが、まとまった出土量が見込まれない遺跡。③正確な位置や内容が把握できない遺跡。
- (2) この表は、土器編年の基礎資料を集成するためにまとめたものであり、時期細分などについては次年度以降明らかにする予定である。
- (3) 作成にあたっては分担して集成し、データベース化した。なお、表の編集は近藤が担当した。

No.	遺跡名	所在地	文献No.
横浜市鶴見区			
1	荒立台上貝塚	東寺尾	4
2	小仙塚貝塚	下末吉6丁目	3
横浜市神奈川区			
3	三ツ沢台遺跡		5
4	沢渡遺跡		5
横浜市南区			
5	稲荷山貝塚	山谷56他	121
横浜市保土ヶ谷区			
6	帷子峯遺跡	峰沢町358-1	25・32
7	西原遺跡	川島町	46
横浜市磯子区			
8	三殿台遺跡	岡村	9
9	左藤内遺跡		12
横浜市金沢区			
10	金沢文庫遺跡	金沢町142外及〇217-6	42
11	上行寺裏遺跡	瀬戸4249-1ほか	147
12	野島貝塚	野島470-2	6
横浜市港北区			
13	篠原大原遺跡	篠原町72-2	130
14	篠原大原北遺跡	篠原町73-21ほか	141
15	公団篠原団地内貝塚	篠原町	43
16	畳屋の上遺跡	新吉田町	87
横浜市戸塚区			
17	細田遺跡	沢沢字細田90～1102	24
横浜市港南区			
18	港南台遺跡	日野町榎戸2978・2982	17
横浜市旭区			
19	小池遺跡	上白根町字小池1161-7ほか	30
20	上白根おもて遺跡	上白根3丁目	33
21	都筑自然公園地内No.5地点	都岡町1175ほか	53
横浜市緑区			
22	玄海田遺跡	長津田町字玄海田	80
23	住撰遺跡	長津田町字住撰	74
24	霧ヶ丘遺跡群	霧ヶ丘	16
25	三保天神前遺跡	三保町天神前	108
横浜市青葉区			
26	あざみ野遺跡	新石川3丁目19	44
27	稲ヶ原遺跡A地点	さつきが丘8-3ほか	59
28	上谷本遺跡群祥泉院遺跡	みたけ台36	13
横浜市都筑区			
29	華蔵台遺跡	荏田南5丁目10	142
30	矢崎山西遺跡	荏田南町4247番地ほか	134
31	小高見遺跡	大丸2・11付近	136
32	月出松遺跡	加賀原1-14	135
33	高山遺跡	高山4	131
34	北川貝塚	早瀬三丁目30付近	138
35	西ノ谷貝塚	南山田二丁目17付近	126
36	三の丸遺跡	川和町2047	28
37	清水場遺跡	佐江戸町	19
38	古梅谷遺跡	牛久保東2丁目22	71
39	華蔵台南遺跡	荏田南1丁目20	62
40	牛ヶ谷遺跡	荏田南2丁目5	62
41	山田大塚遺跡	東山田町2015	48
42	川和向原遺跡	川和台25	72
43	原出口遺跡	川和台33	72
44	北川貝塚南遺跡	早瀬3丁目	87
45	小丸遺跡	大丸11	102
46	中川地区		14
川崎市中原区			
47	井田中原遺跡B地点	井田1485-1	128

No.	遺跡名	所在地	文献No.
川崎市高津区			
48	新作八幡台遺跡	新作1323他	10
49	新作小高台遺跡	新作1丁目9	29
川崎市多摩区			
50	多摩区No.61遺跡	宿河原地先	91
51	下原遺跡	長尾7-12	109・112
川崎市麻生区			
52	岡上丸山遺跡	岡上675-1	49
53	東生小中学校内遺跡	王禅寺東6-3-1.	73
54	岡上-4遺跡第2地点	岡上字栗畑793ほか	113
55	岡上-4遺跡	岡上字栗畑793ほか	97
横須賀市			
56	吉井城山遺跡	吉井字下吉井735ほか	100
平塚市			
57	原口遺跡	上吉沢1,617番地ほか	120
58	上吉沢市場遺跡群A地区	上吉沢市場1,5301ほか	107
59	上吉沢遺跡	上吉沢地内	7
60	真田・北金目遺跡群3区	北金目1494番ほか	101
61	真田・北金目遺跡群32A区	北金目字上野原1574-11ほか	145
62	真田・北金目遺跡群12B区	北金目字塚越1624ほか	145
63	真田・北金目遺跡群12D区	北金目字塚越1628-イほか	145
64	真田・北金目遺跡群15D区	北金目字入谷戸1523-31ほか	129
65	王子ノ台遺跡	東海大学構内	51・67
66	万田遺跡第5地点	万田331-3番地先	114
67	万田貝殻坂貝塚	万田493番地ほか	1・2・139
68	万田貝塚	万田字熊之台349番地先	37
鎌倉市			
69	関谷島ノ神西遺跡	関谷字島ノ神1524-11ほか	35
70	東正院遺跡	関谷東正院	15
71	手広八反目遺跡	手広字八反目1253番地	31
藤沢市			
72	遠藤貝塚(西部217地点)	茅ヶ崎市堤79-4及び遠藤	60
73	南鍛冶山遺跡	石川205番地ほか	70
74	遠藤広谷遺跡	遠藤3,520番地ほか	127
75	慶應義塾SFC内遺跡	遠藤刈込5355	58
76	西部209地点遺跡	大庭字二番橋5686ほか	52
77	西部225地点遺跡	大庭羽根沢5119-11ほか	52
78	南葛野遺跡	葛原字南葛野・葛原字滝谷	69
79	西富貝塚(藤沢市No.46遺跡)	西富字光徳467番地	123
80	西富貝塚	西富字光徳竹之下	8・11
81	用田南原遺跡	用田440-11ほか	137
82	用田鳥居前遺跡	用田655ほか	117
小田原市			
83	久野北側上遺跡第I地点	久野1177番地	125
84	久野北側下遺跡第II地点	久野字北側下903ほか	133
85	久野北側下遺跡第III地点	久野字北側下	77
86	久野北側下遺跡第IV地点	久野字北側下890-3, 889-1	133
87	久野北側下遺跡第V地点	久野字北側下889-4ほか	133
88	久野久保下遺跡第I地点	久野字北久保下865-61ほか	125
89	久野北久保遺跡第II地点	久野1184番地ほか	125
90	久野北久保遺跡第IV地点	久野1179番地	125
91	久野一本松遺跡	久野1282他	119
92	久野天野遺跡	久野3778-21ほか	119
93	御組長屋遺跡第II地点	南町地内	111
94	御組長屋遺跡第III地点	南町地内	111
95	御組長屋遺跡第IV地点	南町地内	111
茅ヶ崎市			
96	白久保遺跡	芹沢字白久保4222ほか	99
相模原市			
97	相原八幡前遺跡	相原4-176-1	122
98	勝坂遺跡	磯部字中峰1740-11ほか	148

No.	遺跡名	所在地	文献No.
99	田名四ッ谷遺跡	大島2437番地先ほか	110
100	古清水遺跡	大島古清水2434番1ほか	140
101	相模原市No.104遺跡	大島字中の原3056-301ほか	124
102	下九沢下作ノ口遺跡	上溝1丁目	93
103	相模原市No.154遺跡	下九沢1296	40
104	稲荷林遺跡	下溝19-84	22
105	下中丸遺跡	下溝字下中丸611ほか	55
106	下溝鳩川遺跡	下溝字溝開戸737-1ほか	66
107	はじめ沢下遺跡	城山町中沢地先	146
108	川尻遺跡	城山町	57・105
109	新戸遺跡	新戸2607-2ほか	41
110	東原遺跡	当麻1,358番地ほか	56
111	当麻亀ノ甲・西原遺跡	当麻490-2ほか	116
112	当麻亀形遺跡	当麻字亀形526-1ほか	115
113	相模原市No.62遺跡	田名4766-1ほか	75
114	田名塩田・西山遺跡	田名塩田・西山地区40街区	118
115	橋本遺跡	橋本7	36
116	寸嵐二号遺跡	相模湖町寸嵐字寸嵐	96
117	青根馬渡No.2遺跡	津久井町青根馬渡1676-1他	98
118	青根上野田遺跡	津久井町青根上野田1770他	64
三浦市			
119	間口東洞穴遺跡	南下浦町松輪	82
秦野市			
120	今泉峰遺跡	今泉953	92
121	中里遺跡	上大槻字芦沢509-1ほか	85
122	下大槻峯遺跡	下大槻664ほか	81
123	寺山遺跡	寺山485番地ほか	76
124	同明遺跡	平沢1168ほか	26
125	砂田台遺跡	南矢名165-1	45
厚木市			
126	御屋敷添遺跡	愛甲275-5ほか	88
127	東谷戸遺跡	上荻野430	65
大和市			
128	相ノ原遺跡V地点4次調査	大和市つきみ野3-28-2	86

No.	遺跡名	所在地	文献No.
伊勢原市			
129	池端・椿山遺跡	池端242他	132
130	三ノ宮・下谷戸遺跡(No.14)	三ノ宮字下谷戸1,100ほか	106
131	下北原遺跡	日向字下北原	21・143
座間市			
132	明王堂下A遺跡	入谷3-5873	23
133	間の原遺跡	栗原1927	54
134	上栗原D遺跡	栗原3029-1・3032-1	27
綾瀬市			
135	上土棚南遺跡	上土棚南	61・95・104・144
136	上土棚遺跡	上土棚字松山1358ほか	61
137	宮久保遺跡	早川字新堀瀬	83
138	吉岡遺跡群	吉岡字蟹ヶ谷	39
高座郡寒川町			
139	県営岡田団地内遺跡	岡田2,839番地ほか	38
中郡大磯町			
140	城山遺跡	西小磯	34
141	大磯小学校遺跡	東小磯3番地	18
足柄上郡中井町			
142	東向遺跡	境字東向1620-1	94
143	井ノ口平治山遺跡	井ノ口字平治山2490番地ほか	78
足柄上郡山北町			
144	尾崎遺跡	神尾田	20
愛甲郡清川村			
145	久保ノ坂遺跡	旧宮ヶ瀬字馬場1280	90
146	馬場遺跡	旧宮ヶ瀬字馬場1330ほか	103
147	馬場(No.3)遺跡	旧宮ヶ瀬字馬場1447ほか	79
148	馬場(No.6)遺跡	旧宮ヶ瀬字馬場1330ほか	68
149	表の屋敷(No.8)遺跡	旧宮ヶ瀬字馬場1370ほか	84
150	北原遺跡	旧宮ヶ瀬字北原1159ほか	89
151	北原(No.9)遺跡	旧宮ヶ瀬字北原1159ほか	63
152	北原(No.11)遺跡	旧宮ヶ瀬字北原1080ほか	63
153	ナラサス遺跡	旧宮ヶ瀬字ナラサス	50
154	上村遺跡	宮ヶ瀬字上村66ほか	47

文献目録（文献No.は表中文献No.と一致）

- 1925 日本人類学会「神奈川県中郡旭村万田貝殻塚の石器時代遺跡」『人類学雑誌』第40巻第4号 東京人類学会
- 1925 山崎直方・八幡一郎・中谷宇二郎「相模国中郡旭村万田貝殻塚遺跡」『人類学雑誌』第40巻第5号 東京人類学会
- 1935 池上啓介・大給尹・土岐仲雄『横浜市鶴見区下末吉 小仙塚貝塚』
- 1938 坂詰伸男・芹沢長介「横浜市鶴見区荒立台上貝塚に於ける住居址の発掘」
- 1941 石野 瑛『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第9集 神奈川県
- 1947 赤星直忠「神奈川県野島貝塚」
- 1964 江坂輝弥ほか「平塚市上吉沢敷石遺跡調査」『平塚市文化財調査報告書第五集』平塚市教育委員会
- 1964 服部清道・寺田兼方『藤沢市文化財調査報告書 第一集』藤沢市教育委員会
- 1964 和島誠一・井上庄平『三殿台 横浜市磯子区三殿台遺跡集落址調査報告』横浜市教育委員会
- 1967 村田文夫ほか『川崎市末長遺跡発掘調査報告』川崎市文化財調査報告第3冊 川崎市教育委員会
- 1970 寺田兼方『藤沢市文化財調査報告書 第六集』藤沢市教育委員会
- 1971 神沢勇一「左藤内遺跡」『神奈川県立博物館発掘調査報告書』第5号 神奈川県立博物館
- 1971 横浜市埋蔵文化財調査委員会調査団「横浜市緑区 上谷遺跡群調査報告」『昭和45年度横浜市埋蔵文化財調査報告書(2)』横浜市埋蔵文化財調査委員会調査団・横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 1971 岡本勇ほか「早淵川北岸地域および周辺地域における埋蔵文化財の予備調査」『昭和45年度港北区ニュータウン地域内文化財調査報告II』横浜市埋蔵文化財調査委員会調査団・横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 1972 鈴木保彦『東正院遺跡調査報告 神奈川県鎌倉市関谷所在の縄文遺跡について』神奈川県教育委員会・東正院遺跡調査団
- 1973 今村啓爾ほか『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団・武蔵野美術大学考古学研究会
- 1976 川上久夫ほか『港南台』神奈川県埋蔵文化財調査報告9 神奈川県教育委員会
- 1976 鈴木一男・池田彦三郎『大磯小学校遺跡』大磯町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 大磯町教育委員会
- 1977 佐江戸遺跡調査会『清水場 横浜市緑区佐江戸町における弥生・土師集落址の調査(上)』佐江戸遺跡調査会
- 1977 岡本孝之ほか『尾崎遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告13 神奈川県教育委員会
- 1977 鈴木保彦ほか『下北原遺跡 伊勢原市下北原所在の縄文時代配石遺構の調査』神奈川県埋蔵文化財調査報告 14 神奈川県教育委員会
- 1981 江藤昭『稲荷林遺跡 神奈川県相模市下溝稲荷林遺跡調査概報』相模市下溝稲荷林遺跡調査団
- 1981 金子皓彦・剣持雅章・土屋政博『明王堂下A遺跡』座間市文化財報告第7集 座間市教育委員会
- 1981 白石浩之『細田遺跡 県立汲沢高等学校建設にともなう調査』神奈川県立埋蔵文化財調査報告23 神奈川県教育委員会
- 1981 禿 仁志ほか『帷子峯遺跡 横浜新道三ッ沢ジャンクション建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告書』横浜新道三ッ沢ジャンクション遺跡試掘調査団・横浜新道三ッ沢ジャンクション遺跡調査会
- 1982 杉山博久・山本守男・平野吾郎・谷藤保彦『同明遺跡』秦野市教育委員会
- 1982 金子皓彦・土屋政博・浅野寛ほか『上栗原D遺跡調査報告書』座間市文化財報告第8集 座間市教育委員会
- 1983 伊藤藤・今井康博・坂上克弘・倉沢和子『三の丸遺跡発掘調査報告書』横浜市文化財シリーズ 57-1 横浜市埋蔵文化財調査委員会・横浜市教育委員会
- 1983 増子章二ほか『新作小高台遺跡発掘調査報告書本編・論考編』川崎市教育委員会

縄文時代研究プロジェクトチーム

- 30 1984 國平健三『小池遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告7 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 31 1984 永井正憲ほか『手広八反目遺跡発掘調査報告書』手広遺跡発掘調査団
- 32 1984 近藤英夫ほか『帷子峯遺跡 横浜新道三ツ沢ジャンクション建設予定地区遺跡発掘調査報告書』横浜新道三ツ沢ジャンクション遺跡試掘調査団・横浜新道三ツ沢ジャンクション遺跡調査会
- 33 1984 平子順一ほか『上白根おもて遺跡発掘調査報告 県管上白根団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 34 1985 鈴木一男ほか『城山遺跡Ⅱ』大磯町文化財調査報告第26集 大磯町教育委員会
- 35 1985 永井正憲ほか『関谷島ノ神西遺跡発掘調査報告書』関谷島ノ神西遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会
- 36 1986 大貫英明・青木 豊『橋本遺跡 縄文時代編 本文』相模原市橋本遺跡調査会
- 37 1986 日野一郎『平塚市文化財調査報告書 第22集』平塚市教育委員会
- 38 1987 相原俊夫『県営岡田団地内遺跡（第1期～第4期）発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 39 1987 御堂島正・長岡史紀『宮久保遺跡Ⅰ 県立綾瀬西高等学校建設にともなう調査』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 40 1987 山田不二郎『埋蔵文化財発掘調査概報集』相模原市埋蔵文化財調査報告12 相模原市教育委員会
- 41 1988 大上周三・御堂島正・砂田佳弘『新戸遺跡 県立新磯高校建設にともなう調査 第1分冊』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告17 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 42 1988 山本暉久・服部実喜・谷口肇『金沢文庫遺跡 県立金沢文庫新築予定地内遺跡（国指定史跡「称名寺境内」）の調査』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告19 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 43 1988 中村若枝『横浜市港北区 公団篠原団地内貝塚資料』
- 44 1988 小西雅徳ほか『あざみ野遺跡 国学院大学あざみ野運動場内遺跡発掘調査報告書』あざみ野遺跡調査団・国学院大学
- 45 1989 宍戸信悟・上本進二『砂田台遺跡Ⅰ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 46 1989 橋本昌幸『川島町西原遺跡発掘調査報告 市営西原住宅建替に伴う埋蔵文化財調査報告書』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 47 1990 鈴木・坂口滋浩『宮ヶ瀬遺跡群Ⅰ 上村遺跡 半原向原遺跡 宮ヶ瀬ダム建設にともなう調査』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 48 1990 石井 寛ほか『山田大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告11 横浜市埋蔵文化財センター
- 49 1989 竹石健二ほか『神奈川県川崎市麻生区 岡上丸山遺跡発掘調査報告書本文編』川崎市教育委員会社会教育部文化課・川崎市教育委員会
- 50 1991 上田薫・長岡文紀『宮ヶ瀬遺跡群Ⅱ ナラサス遺跡 ナラサス北遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター 21 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 51 1991 常木晃ほか『東海大学校地内遺跡調査報告2』東海大学校地内遺跡調査団
- 52 1991 寺田兼方・澤田大郎『藤沢市西部開発地域内埋蔵文化財発掘調査報告書 西部209地点遺跡・西部215地点遺跡・西部225地点遺跡』藤沢市西部開発事務局・藤沢市西部開発地域内埋蔵文化財発掘調査団
- 53 1991 橋本昌幸『都筑自然公園予定地内遺跡群（2）発掘調査報告 都筑自然公園建設計画に伴う埋蔵文化財調査報告書（No.5・6・7地点遺跡）』横浜市埋蔵文化財センター
- 54 1992 浅野寛ほか『間の原遺跡 目久尻川遊水池建設に伴う発掘調査記録』座間市教育委員会 間の原遺跡発掘調査団
- 55 1992 三ツ橋正夫ほか『神奈川県相模原市下中丸遺跡』相模原市当麻・下溝遺跡群調査会
- 56 1992 三ツ橋勝『神奈川県相模原市東原遺跡』相模原市当麻・下溝遺跡群調査会
- 57 1992 御堂島正・河野喜映・恩田勇『川尻遺跡 県道相模原久井線川尻バイパス建設にともなう調査』神奈川県立埋蔵文化財センター 23 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 58 1992 桜井準也・小林謙一ほか『慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡』慶應義塾大学
- 59 1992 平子順一・橋本昌幸『稲ヶ原遺跡A地点発掘調査報告 横浜市立さつきが丘小学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告』（財）横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター
- 60 1992 寺田兼方・澤田大郎『遠藤貝塚（西部217地点）』藤沢市西部開発事務局・藤沢市西部開発地域内埋蔵文化財発掘調査団
- 61 1993 中村喜代重・小滝勉・阿部芳郎『吉岡塚ノ内横穴墓群 上土棚遺跡（縄文時代編）上土棚遺跡』綾瀬市埋蔵文化財調査報告3 綾瀬市教育委員会
- 62 1993 石井 寛『牛ヶ谷遺跡・華蔵台南遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告14（財）横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター
- 63 1994 市川正史・恩田勇『宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ 北原（No.9）遺跡（2）北原（No.1）遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター 21 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 64 1994 河野喜映『青根上野田遺跡』かながわ考古学財団調査報告2 財団法人かながわ考古学財団
- 65 1994 戸田哲也・迫和幸・中山豊『東谷戸遺跡発掘調査報告書』上荻野東部土地区画整理事業区域内遺跡発掘調査団
- 66 1994 迫和幸・相原俊夫・麻生順司・玉川久子『神奈川県相模原市下溝鳩川遺跡発掘調査報告書』下溝鳩川遺跡発掘調査団
- 67 1995 秋田かな子ほか『東海大学校地内遺跡調査報告5』東海大学校地内遺跡調査委員会東海大学校地内遺跡調査団
- 68 1995 鈴木次郎ほか『宮ヶ瀬遺跡群Ⅴ』かながわ考古学財団調査報告4 財団法人かながわ考古学財団
- 69 1995 寺田兼方・須田英一・桜井準也ほか『神奈川県藤沢市南葛野遺跡-県道横浜・伊勢原線葛原地内に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』南葛野遺跡調査団
- 70 1995 桜井準也・小林謙一・望月芳『南鍛冶山発掘調査報告書 藤沢市都市計画事業北部第二土地区画整理事業に伴う調査 第2巻縄文時代』藤沢市教育委員会
- 71 1995 小宮恒雄・坂本 彰『古梅谷遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告17（財）横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター・横浜市教育委員会
- 72 1995 石井寛『川和向原遺跡 原出口遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告19（財）横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター・横浜市教育委員会
- 73 1995 竹石健二ほか『川崎市東柿生小学校内遺跡発掘調査報告書』東柿生小学校内遺跡発掘調査団・川崎市教育委員会
- 74 1996 伊丹徹ほか『長津田遺跡群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告12 財団法人かながわ考古学財団
- 75 1996 後藤喜八郎・若井千佳子・谷本靖子・門田優子『相模原市 No.62遺跡発掘調査報告書』相模原市 No.62遺跡発掘調査団
- 76 1996 後藤喜八郎ほか『No.19寺山遺跡発掘調査報告書』No.19寺山遺跡発掘調査団
- 77 1996 小林義典『久野北側下遺跡Ⅲ地点 発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 78 1996 杉山博久・井辺一徳・矢納健志『井ノ口平治山遺跡』グリーンテクなかい埋蔵文化財発掘調査団
- 79 1996 富永樹之『宮ヶ瀬遺跡群Ⅶ』かながわ考古学財団調査報告9 財団法人かながわ考古学財団
- 80 1997 伊丹徹ほか『長津田遺跡群Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告14 財団法人かながわ考古学財団
- 81 1997 大上周三・大塚健一・飯塚美保『下大槻峯遺跡（No.30） 第一東海自動車道厚木・大井松田間改築事業に伴う調査報告2- 秦野市内-』かながわ考古学財団調査報告24 財団法人かながわ考古学財団
- 82 1997 川上久夫・野内秀明・釘持輝久・小暮慶明『間口東洞穴遺跡 急傾斜地防災工事にともなう緊急調査』松輪間口東海蝕洞穴遺跡調査団

縄文時代研究プロジェクトチーム

- 83 1997 阪本宏児・砂田佳弘ほか『吉岡遺跡群Ⅲ 旧石器時代2 B2・L2層の石器文化 縄文時代1 早期～後期 綾瀬浄水場建設にともなう発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告20 財団法人かながわ考古学財団
- 84 1997 近野正幸ほか『宮ヶ瀬遺跡群XⅢ』 かながわ考古学財団調査報告19 財団法人かながわ考古学財団
- 85 1997 村上吉正・吉垣俊一・谷口 肇『中里遺跡(No.31) 西大竹上原遺跡(No.32) 第一東海自動車道厚木・大井松田間改築事業に伴う調査報告4- 秦野市内-』 かながわ考古学財団調査報告30 財団法人かながわ考古学財団
- 86 1997 村澤正弘・細井佳浩・小池聡『相ノ原遺跡第Ⅴ地点第4次調査(大和市No.207遺跡)』 大和市文化財調査報告書65 大和市教育委員会
- 87 1997 鈴木重信・鹿島保宏・橋本昌幸『豊屋の上遺跡・西谷戸の上遺跡・北川貝塚南遺跡 第三京浜道路(改築)新港北インターチェンジ(仮称)埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター・日本道路公団
- 88 1998 相原俊夫・河合英夫・中山豊『御屋敷添遺跡第1地点 発掘調査報告書』 御屋敷添遺跡第1地点発掘調査報告書
- 89 1998 市川正史・鈴木次郎・吉田政行『宮ヶ瀬遺跡群XⅤ 北原(No.10・11北)遺跡 宮ヶ瀬ダム建設にともなう発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告41 財団法人かながわ考古学財団
- 90 1998 恩田 勇・近野正幸・吉田政行『宮ヶ瀬遺跡群XⅥ 久保ノ坂(No.4)遺跡 宮ヶ瀬ダム建設にともなう発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告42 財団法人かながわ考古学財団
- 91 1998 戸田哲也ほか『多摩区No.61遺跡(宿河原縄文時代低地遺跡)発掘調査報告書』 多摩区No.61遺跡発掘調査団
- 92 1998 増田精一『今泉遺跡群』 今泉地区遺跡群発掘調査団
- 93 1998 松井泉ほか『下九沢下作ノ口遺跡-市道376号ほか2道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』 市道376号ほか2道路改良工事地内発掘調査団
- 94 1998 村上吉正・吉垣俊一『東向遺跡(No.33) 第一東海自動車道厚木・大井松田間改築事業に伴う調査報告5- 中井町内-』 かながわ考古学財団調査報告31 財団法人かながわ考古学財団
- 95 1998 矢島國雄・阿部佳郎・小滝勉・井上洋一『上土棚南遺跡第3次調査』 綾瀬市埋蔵文化財調査報告5 綾瀬市教育委員会
- 96 1998 吉田浩明ほか『寸嵐二号遺跡発掘調査報告書』 相模湖町No.6遺跡発掘調査団
- 97 1998 呉地英夫ほか『岡上-4遺跡発掘調査報告書』 岡上-4遺跡発掘調査団
- 98 1998 平野裕久ほか『道志導水路関連遺跡』 かながわ考古学財団調査報告59 財団法人かながわ考古学財団
- 99 1999 松田光太郎・井辺一徳・田村裕司『白久保遺跡 第2分冊 縄文時代 芹沢配水池建設にともなう発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告60 財団法人かながわ考古学財団
- 100 1999 野内秀明ほか『吉井城山』 横須賀市文化財調査報告書第34集 横須賀市教育委員会
- 101 1999 若林勝司ほか『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書1』 平塚市真田・北金目遺跡調査会
- 102 1999 石井寛『小丸遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告25 (財)横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター・横浜市教育委員会
- 103 1999 鈴木次郎・市川正史・近野正幸『宮ヶ瀬遺跡群XⅧ 馬場(No.6)遺跡(2) 北原(No.9)遺跡(3) 宮ヶ瀬ダム建設にともなう発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告51 財団法人かながわ考古学財団
- 104 2000 市川正史・井関文明『上土棚南遺跡 第4次調査 蓼川改修事業に伴う発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告109 財団法人かながわ考古学財団
- 105 2000 加藤勝仁・小川岳人・伊丹徹『川尻遺跡Ⅱ 谷ヶ原浄水場内事業に伴う発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告69 財団法人かながわ考古学財団
- 106 2000 穴戸信悟・宮坂淳一・松田光太郎・三瓶裕司『三ノ宮・下谷戸遺跡(No.14)Ⅱ 第一東海自動車道(東名高速道路)厚木～大井松田間拡幅工事に伴う調査 17 -伊勢原市内-』 かながわ考古学財団調査報告76 財団法人かながわ考古学財団
- 107 2000 高杉博章・小山裕之・中山 豊・佐々木竜郎『上吉沢市場地区遺跡群 発掘調査報告書』 平塚市
- 108 2000 小池 聡ほか『三保天神前遺跡 三保天神前第二土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告』 三保天神前第二土地区画整理事業地内遺跡発掘調査団
- 109 2000 浜田晋介ほか『下原遺跡 縄文時代晩期、弥生時代後期、古墳時代前期の集落址の調査』『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』4 川崎市市民ミュージアム
- 110 2001 河本雅人『埋蔵文化財発掘調査概報集』 相模原市埋蔵文化財調査報告25 相模原市教育委員会
- 111 2001 小林義典・小山裕之・中山 豊・香川達郎『御組長屋遺跡 第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点 発掘調査報告書 都市計画道路小田原早川線街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』 都市計画道路小田原早川線改良工事遺跡発掘調査団
- 112 2001 浜田晋介ほか『下原遺跡Ⅱ』『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』5 川崎市市民ミュージアム
- 113 2001 大野 悟『神奈川県川崎市麻生区岡上-4遺跡第2地点発掘調査報告書』 岡上-4遺跡発掘調査団
- 114 2002 大野 悟・栗山雄輝・菅沼圭介・宮田忠洋『万田遺跡・構之内遺跡 平成11・12年度公共下水道建設に伴う発掘調査』 平塚市埋蔵文化財シリーズ37 平塚市
- 115 2002 伊東秀吉・大坪宣雄・長澤邦夫・小林克利・守屋照代『当麻亀形遺跡』 相模原市都市計画道路嶽之内当麻線道路改良事業地内遺跡調査団
- 116 2002 大貫英明・内田洋隆『当麻亀ノ甲・西原遺跡』 相模原市埋蔵文化財調査報告26集 相模原市教育委員会
- 117 2002 栗原伸好・新開基史・中田 英・葉山俊章・天野賢一『用田鳥居前遺跡 県道22号(横浜伊勢原)線道路改良事業(用田バイパス建設)に伴う発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告128 財団法人かながわ考古学財団
- 118 2002 土井永好・長谷川宙輝『田名塩田・西山遺跡』 相模原市埋蔵文化財調査報告27集 相模原市教育委員会
- 119 2002 戸田哲也・吉田浩明・麻生順司・中山豊『久野諏訪ノ原遺跡群Ⅰ 久野一本松・久野天野藪・久野坂下窪遺跡 市道0036号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査』 小田原市文化財調査報告書第101集 小田原市教育委員会
- 120 2002 長岡文紀『原口遺跡Ⅲ 縄文時代(第1分冊 本編1 第2分冊 本編2 第3分冊 自然科学分析・写真図版編) 農業総合研究所建設に伴う発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告134 財団法人かながわ考古学財団
- 121 2002 松田光太郎・大塚健一・中村賢太郎『稲荷山貝塚 根岸米軍(11)法面整備工事に伴う発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告131 財団法人かながわ考古学財団
- 122 2002 香村紘一ほか『相原八幡前遺跡』 相模原市相原地区遺跡調査団
- 123 2003 加藤信夫『西富貝塚(藤沢市No.46遺跡)』 藤沢市文化財調査報告書第38集 藤沢市教育委員会
- 124 2003 香村紘一ほか『神奈川県相模原市No.104遺跡発掘調査報告書』 相模原市No.104遺跡発掘調査団
- 125 2003 小林義典『久野北側下遺跡第1地点 久野北側上遺跡第1地点 久野北久保遺跡第Ⅱ・Ⅳ地点 市道2421号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査』 小田原市文化財調査報告書第114集 小田原市教育委員会
- 126 2003 坂本彰ほか『西ノ谷貝塚』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告33 財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 127 2003 戸田哲也・麻生順司・中山豊・坪田弘子『遠藤山崎・遠藤谷遺跡 発掘調査報告書』 玉川文化財研究所
- 128 2003 北原實徳・新開英樹『神奈川県川崎市井田中原遺跡B地点』 井田中原遺跡B地点発掘調査団
- 129 2003 河合英夫ほか『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書4』 平塚市真田・北金目遺跡調査会
- 130 2004 天野賢一・宮井 香『篠原大原遺跡 篠原団地(先工区)建て替え事業に伴う発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告175 財団法人かながわ考古学財団
- 131 2004 石井寛『高山遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告35 財団法人横浜市ふるさと歴史財団

縄文時代研究プロジェクトチーム

- 132 2004 小川岳人・井辺一徳 『池端・椿山遺跡 緊急地方道路整備事業（主要地方道路横浜・伊勢原線）に伴う発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告165 財団法人かながわ考古学財団
- 133 2004 小池聡・山田仁和・粕屋隆・阿曾正彦 『久野北側下遺跡第Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ地点 久野久保下遺跡第1地点』 小田原市文化財調査報告第123集 小田原市教育委員会
- 134 2004 武部喜充ほか 『矢崎山西遺跡発掘調査報告書』 山武考古学研究所
- 135 2005 坂上克弘 『月出松遺跡 月出松南遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告37 財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 136 2005 山田光洋 『大高見遺跡 小高見遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告38 財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 137 2005 吉田政行・新開基史・中田 英 『用田南原遺跡Ⅱ 県道22号（横浜伊勢原）線道路改良事業（用田バイパス建設）に伴う発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告180 財団法人かながわ考古学財団
- 138 2007 坂本彰ほか 『北川貝塚』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告39 財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 139 2007 戸田哲也・中村哲也・麻生順司・小森明美・石川真紀・金子浩昌・松島 『万田貝殻坂貝塚（万田遺跡第9地点） 発掘調査報告書』 平塚市
- 140 2007 水澤丈志・内田仁 『古清水遺跡—第1次発掘調査報告書—』 加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部
- 141 2007 山田仁和ほか 『横浜市港北区篠原大原北遺跡』 吾妻考古学研究所
- 142 2008 石井寛 『華蔵台遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告41 財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 143 2008 大塚健一・小西絵美 『下北原遺跡Ⅱ 伊勢原調整池築造工事に伴う発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告222 財団法人かながわ考古学財団
- 144 2008 矢島國雄・小滝勉・高橋毅・初鹿野博之 『上土棚南遺跡 第5次～第7次調査の記録』 綾瀬市埋蔵文化財調査報告6 綾瀬市教育委員会
- 145 2008 若林勝司ほか 『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書6』 平塚市真田・北金目遺跡調査会
- 146 2009 井辺一徳・小林晴生・相良英樹 『はじめ沢下遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道（さがみ縦貫道路）建設事業に伴う発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告236 財団法人かながわ考古学財団
- 147 2009 加藤勝仁・小西絵美・菊川 泉・井関文明 『上行寺裏遺跡（瀬戸14番地やぐら群）Ⅲ 平成19・20年度金沢八景南地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査』 かながわ考古学財団調査報告241 財団法人かながわ考古学財団
- 148 2009 山田不二郎・山本暉久 『縄文時代遺跡資料調査報告書』 相模原市史調査報告書5 相模原市教育委員会

神奈川県内出土の弥生時代金属器（2）

—銅製品集成—

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

前回は神奈川県内出土の弥生時代から古墳時代前期の鉄器集成を行ったが、今回は神奈川県内出土の銅製品の集成を行い、データの蓄積を図ることとした。

集成にあたって、前回と同様に、器種の消長と画期をより明らかにする上では弥生時代に限定せず古墳時代前期までの動向を押さえる必要があることから、集成範囲を弥生時代から古墳時代前期（前半）までとしたが、基本的に古墳出土資料は対象に含めていない。資料の所属時期は、各報告書報文における記述に基づいているが、一部表記方法を変えて記載したものもある。また遺物名についても、報告書掲載の名称を変更したものが若干ある。集成結果は第1表にまとめ、遺跡番号は第1図および第7～10図の遺物分布図と対応させている。遺物図は基本的に報告されている図を使用し、第2～6図に縮尺1/2に統一して掲載した（一部1/3で掲載）。第1表の「図番号」は第2～6図の遺物に付けた通し番号に対応し、「文献No.」は文末の文献一覧に付けた番号に対応している。データ集成は池田 治、櫻井真貴、新開基史、戸羽康一、渡辺 外で行った。本文は、今回は遺物分布の概略を記すのみとし、分担して執筆した。

（池田）

神奈川県内の弥生時代青銅器概要

銅鏃（第2・7図） 弓矢の鏃として使用された製品である。神奈川県内では25遺跡39点（河原口坊中遺跡は個数未確認）が出土している。県内における分布範囲は、県東部（横浜・川崎）、三浦半島（横須賀・三浦・逗子）、県中部（藤沢・茅ヶ崎・綾瀬・海老名・厚木・伊勢原・平塚・秦野）、県西部（小田原）である。県中部の遺跡から数多く出土しているが、一遺跡から出土する数は1～2点と多くはない。一遺跡からの最大出土数は小田原市諏訪の前遺跡（46）の5点であり、真田・北金目遺跡群（38）の4点がこれに続く。遺存状態にもよるが、遺物の形態的な特徴として共通しているのは、いずれの銅鏃も有茎で中央部に稜を持ち、鏃身断面が菱形を呈する点である（9除く）。特筆されるのは、鏃身部に多数の孔を持ついわゆる多孔銅鏃である12・23と柳葉形を呈する9である。12・23については伊勢湾岸～東海地方に多くみられる形態である。9は前期古墳等の副葬品として発見されることが多く、住居址からの出土は希少である。

（戸羽）

銅釧（第3・4・8図） 腕輪であるとみられる銅釧の現在までに確認された本県における出土例は、16遺跡59点である。図示した遺物の分布状況からみると、15点出土の真田・北金目遺跡群（38）と4点出土の原口遺跡（40）が存在する平塚市と、19点出土の根丸島遺跡（41）が存在する秦野市が群を抜き、さらに小田原市の千代遺跡群（44）にも6点の集中が見られる。この様な点から、本製品は特定の遺跡や地域にある程度集中して存在する傾向が看取でき、全体的な状況としては、相模湾側から若干内陸寄りに比較的多く分布し、東京湾沿岸の分布状況は疎であると言ったことが読み取ることが出来る。

（櫻井）

銅環（第5・9図） 銅環は指輪状の製品で、大半が板状の青銅片を巻いて作られる。破片を含め15遺跡48点がある。全体として県内各地域に広く分布するが、第1図の青銅器出土遺跡全体の分布状況と比較すると、

足柄平野、相模川東岸、横浜・川崎市域北西部がやや空白地帯となっている。またいくつかの地域的なまとまりが見て取れ、それぞれの出土点数をみると、下末吉台地3遺跡(2・6・9)5点、三浦半島地域2遺跡(15・16)11点、境川水系(藤沢・鎌倉)2遺跡(19・21)7点、相模川中流域(海老名・厚木)2遺跡(25・28)2点、金目川水系鈴川周辺地域(平塚・秦野)4遺跡(35・36・38・41)20点、秦野盆地1遺跡(42)1点、足柄平野1遺跡(44)2点となる。三浦半島地域および鈴川周辺が突出して多く分布するが、これは、佐島の丘遺跡群高原遺跡、赤坂遺跡、真田北金目遺跡群、根丸島遺跡の各遺跡で大量に出土しているためである。そのほか水道山戸ヶ崎遺跡でも6点出土しており、発掘調査面積等の相違も勘案する必要はあるが、遺跡単位・小地域単位での出土量の差は明瞭であり、これは地域色・遺跡の性格の差を示唆するものであろう。(新開)

その他(第6・10図) 上記以外の青銅器としては、銅鏡や小銅鐸のほか、用途不明な銅製品が認められる。いずれも出土量としては僅少で、出土した遺跡の位置をみても県内各地に散在しており、特に集中分布等の偏りは認められない。筒型銅製品(102)は棒状のものに嵌め込んで留める構造になっている。小銅鐸は図示したものを含めて、県内での出土例が3点みられるが、鈕の構造や鱗の有無、型持孔の位置など細かな属性は個体毎に違っている。こうした青銅器の分布が認められない地域は、もともと弥生時代遺跡の確認例が少ない山間部であり、上記の銅鏃・銅釧・銅環のような器種とは違い、該期の遺跡全体にわたって希少な存在であることが分布の点からも窺われる。青銅器自体が神奈川県域における弥生時代の社会においてどのような存在であったかということは、各遺跡における出土事例についての分析を深化させることによって、追求し得るものであろう。(渡辺)



第1図 銅製品出土遺跡分布図 [六十万分の一]

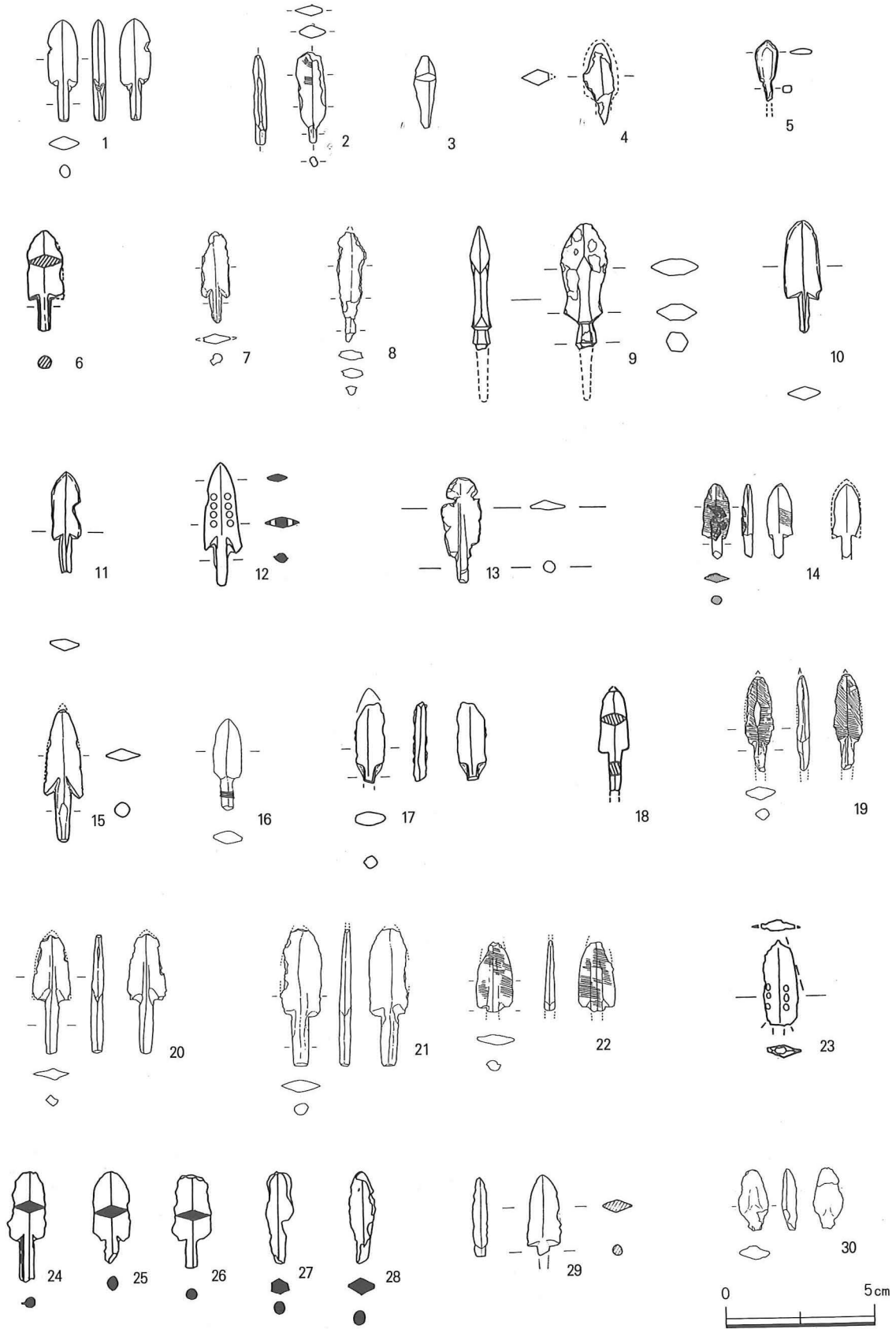
第1表 銅製品出土遺跡一覧表

市町村	遺跡番号	遺跡名	遺構名	遺物名	数量	時期	図番号	備考	文献No.
横浜市	1	梶山遺跡 (第4次)	包含層	銅鏡	1	弥生末～古墳初頭	—		1
	2	新羽大竹遺跡	第7号竪穴住居址	銅環片	1	弥生後期	72		2
	3	関耕地遺跡	6号住居址	銅釧	1	弥生後期	31	完形品	3
	4	大場第2地区遺跡群No. 2地区	Y T-10号住居跡	銅鏡	1	弥生後期	—	未報告	4
	5	稲荷前古墳群	住居跡	銅鏃	2	弥生後期	—		5
	6	山王山遺跡	57号住居址	銅環	1	弥生後期	73		6
	7	明神台遺跡・明神台北遺跡	NY 7a号住居	銅鏃	1	弥生後期末	1		7
	8	横浜市道高速2号線No. 9遺跡 A地区	1号住居跡	銅鏃	1	弥生後期	2		8
	9	三殿台遺跡	306-C号住居跡	銅釧片	1	弥生後期	—		9・10
			306-C号住居跡	銅環	1	弥生後期	—	完形品	
	?		銅環	1	?	—			
		314-B号住居跡	銅環	1	弥生後期	—	完形品		
10	そとごう遺跡	26号住居跡	銅鏃	1	弥生後期	3		11	
川崎市	11	下原遺跡	第7号住居址	銅鏃	1	弥生末～古墳初頭	4		12
	12	宮前小台遺跡	SI-07	銅鏡	1	古墳前期	—	未報告	③
横須賀市	13	吉井貝塚 (第1区)	表採	銅鏃	1		—		13
	14	住吉遺跡 (N地区)	包含層	銅鏃	1	弥生後期	6		14
	15	佐島の丘遺跡群 高原遺跡	Y61号住居跡	筒状銅製品	1	古墳前期前半	102		15
			Y142号住居跡	銅釧片	1	弥生後期後半～古墳初頭	32		
			Y154A号住居跡	銅環	1	弥生後期	77		
			Y160号住居跡	銅環	1	弥生後期	75		
			Y162号住居跡	銅環	1	弥生後期	78		
			Y170号住居跡	銅環	1	弥生後期	76		
			Y171号住居跡	銅釧片	1	弥生後期末～古墳初頭	33		
			Y175号住居跡	銅釧片	1	弥生後期末～古墳初頭	34		
			Y176号住居跡	銅環	1	弥生後期	74		
			Y201A号住居跡	銅環片	1	弥生後期	80		
			Y208A号住居跡	銅釧片	1	弥生後期後半～古墳初頭	35		
			Y208B号住居跡	銅鏃	1	弥生後期後半～古墳初頭	7		
Y231号住居跡	銅環	1	弥生後期	79					
Y258号住居跡	銅鏃	1	弥生後期	8					
三浦市	16	赤坂遺跡 (10次)	1A号住居跡	銅鏃	1	弥生後期	—	未報告	16
		赤坂遺跡 (16次)	2号住居跡	銅鏃	1	弥生後期	—	未報告	
		赤坂遺跡 (16次)	1号住居跡	銅釧片	1	弥生後期	—	未報告	
		赤坂遺跡 (16次)	4号住居跡	銅釧片	1	弥生後期	—	未報告	
		赤坂遺跡 (16次)	包含層	銅釧片	1	弥生後期	—	未報告	
		赤坂遺跡 (16次)	2号住居跡	銅釧	1	弥生後期	—	有鉤銅釧・未報告	
		赤坂遺跡 (14次B地点)	1F号住居址	銅環片	1	弥生後期	—	未報告	
		赤坂遺跡 (10次)	1A号住居跡	銅環片	1	弥生後期	—	未報告	

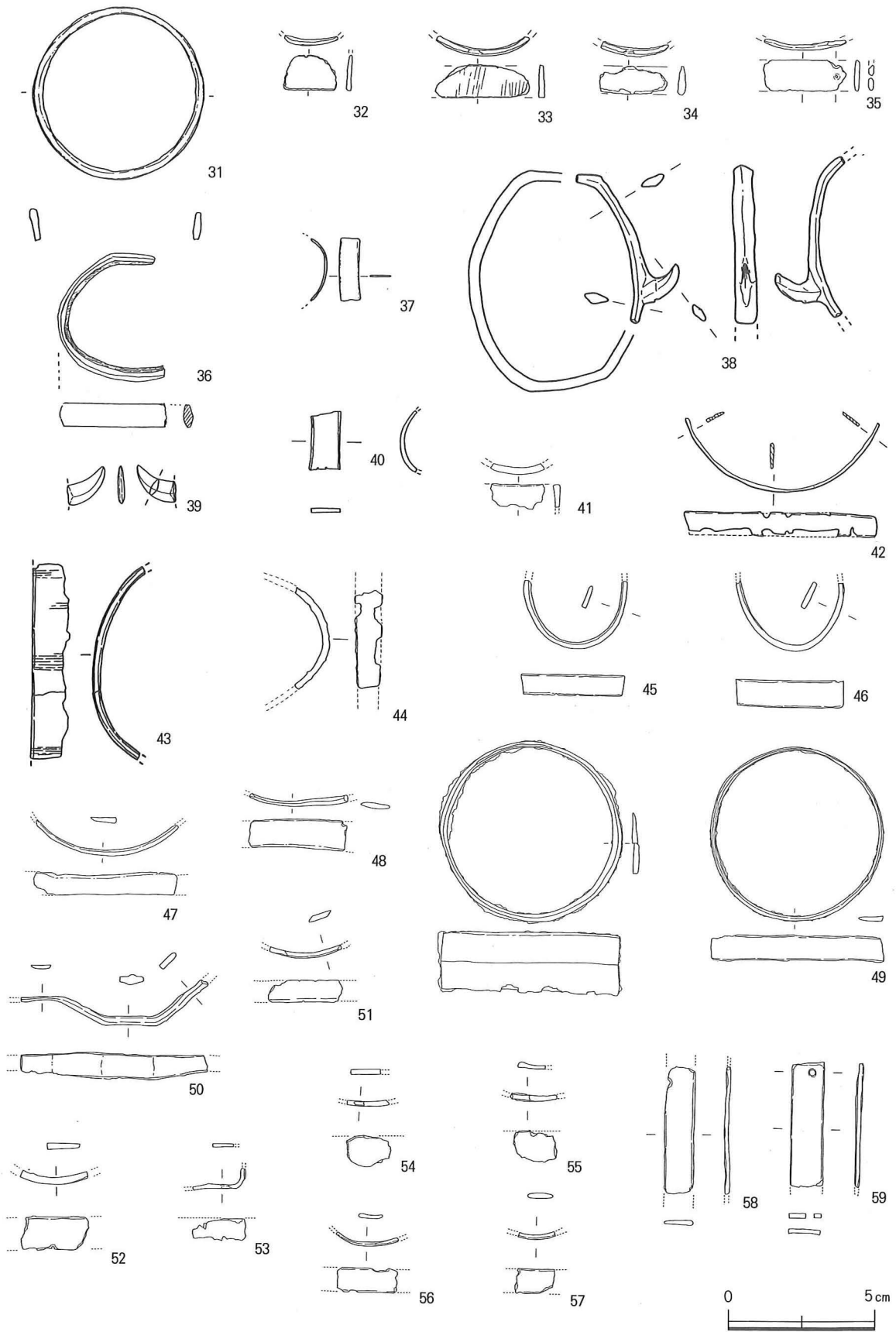
市町村	遺跡番号	遺跡名	遺構名	遺物名	数量	時期	図番号	備考	文献No.
三浦市	16	赤坂遺跡 (10次)	10号住居址	銅環片	1	弥生後期	—	未報告	16
		赤坂遺跡 (立教大調査)	IIIa住居跡	銅環片	1	弥生後期	—	未報告	
逗子市	17	持田遺跡 U区	第8号竪穴	銅釧	1	弥生後期	36	有鉤銅釧か	17
	18	池子遺跡群 No. 2 地点	第2号竪穴住居址	銅鏃	1	古墳前期	9	前期後半	18
		池子遺跡群 No. 2 地点	第2号竪穴住居址	銅鏡	1	古墳前期	98	前期後半	
		池子遺跡群 No. 6 地点	第1号竪穴住居址	用途不明品	1	弥生末～古墳初頭	105		
		池子遺跡群 No. 1-A東地点	包含層	銅鏃	1	古墳前期～中期	5		
		池子遺跡群 No. 1-A東地点	包含層	銅釧片	1	古墳前期～後期	37		
池子遺跡群 No. 1-A地点	旧河道	銅釧	1	弥生末～古墳初頭	38	有鉤銅釧	21		
鎌倉市	19	水道山戸ヶ崎遺跡	4号住居址	銅環片	4	古墳前期	—		22
			27号住居址	銅環片	2	弥生末～古墳初頭	—		
	20	手広八反目遺跡	第51号住居址	銅釧	1	弥生後期	39	有鉤銅釧	23
藤沢市	21	若尾山遺跡	12号住居跡	銅鏃	1	古墳初頭	10		24
			(古代住居跡)	銅鏃	1	弥生後期～古墳前期	11		
			包含層	銅環片	1	弥生後期～古墳前期	40		
	22	大庭城遺跡	住居跡	銅鏃	1	弥生後期	12	多孔銅鏃	25
茅ヶ崎市	23	七堂伽藍遺跡 (小出川河川改修事業関連)	包含層	銅釧片	2	弥生後期～古墳前期	—		26
綾瀬市	24	神崎遺跡	2号住居跡	銅鏃	1	弥生後期前半	13		27
海老名市	25	河原口坊中遺跡		小銅鐸	1	弥生後期	—	未報告	28
				銅鏃			—	未報告	
				銅釧片			—	未報告	
				銅環			—	未報告	
	26	本郷遺跡	KA地区 2号住居跡	銅鏃	1	弥生後期後半	14		30
DO地区 第25号住居址			小銅鐸	1	古墳前期	103			
厚木市	27	恩名仲町遺跡 第3地点	1号住居址	銅鏃	1		—	未報告	③
	28	宮の里遺跡	119号住居址	銅環	1	弥生後期	81		31
			遺構外	銅釧片	1		41		
29	愛甲宿遺跡	第11号住居跡	銅鏃	1	古墳前期	15		32	
伊勢原市	30	高森・宮ノ越遺跡	5号住居址	銅鏃	1	古墳前期	16		33
	31	成瀬第二地区遺跡群下糟屋C地区第2地点	102号住居址	銅鏡	1	古墳初頭	99		34
	32	下谷戸遺跡 (第1次)	101号住居址	銅鏃	1	古墳前期	—		35
			三ノ宮・下谷戸遺跡	2号住居址	銅鏃	1	弥生終末	17	
平塚市	33	新町遺跡 第3地点・A地区	包含層	銅鏃	1		—	未報告	③
	34	上ノ入遺跡 第4地点	2号竪穴住居跡	銅釧片	1	弥生後期	42		37
	35	御所ヶ谷遺跡	包含層	銅環片	1	古墳前期?	18		38
			客土層	銅釧片	1		43		
	36	桜畑遺跡	客土層	銅環片	1		83		39
	37	五領ヶ台遺跡 第9地点	(古墳後期住居跡)	銅釧片	1		44		40
38	真田・北金目遺跡群	8B区 S I O 3 4	銅釧	1	弥生末～古墳前期	79		41	
		8B区 S I O 3 4	銅釧片	1	//	84			

市町村	遺跡番号	遺跡名	遺構名	遺物名	数量	時期	図番号	備考	文献No.
平塚市	38	真田・北金目遺跡群	8B区 S I 0 4 8	銅釧片	1		92		41
			8B区 S I 0 6 8	不明銅製品	1	弥生後期	58	銅釧片	
			8B区 遺構外	銅鏃	1		19		
			8C区 S I 1 0 5 6	銅釧	1	弥生後期	45		
			8C区 S I 1 0 6 3	銅釧	1	古墳前期	46		
			8C区 S I 1 0 6 5	銅釧片	1	弥生後期	55		
			8C区 S I 1 0 7 5	銅鏃	1		20		
			8C区 S I 1 0 7 7	銅釧片	1	弥生後期	56		
			8C区 S I 1 0 7 9	銅環片	1		93		
			8C区 S I 1 0 8 6	銅釧片	1		51		
			8C区 S I 1 0 8 6	銅環	2		85・88		
			8C区 S I 1 0 9 6	銅釧片	1	弥生後期～古墳前期	52		
			8C区 S I 1 0 9 8	銅環片	1		3E+99		
			8C区 S I 1 0 9 9	銅環	1		87		
			8C区 S I 1 0 9 9	銅釧	2		53・54		
			8C区 S I 1 1 0 0	銅環片	1		91		
			8C区 S I 1 1 0 3	銅釧片	1		57		
			8C区 S I 1 1 0 7	板状銅製品	1	古墳前期	59	銅釧の再利用	
			8C区 S I 1 1 1 4	銅環	1	弥生後期～古墳前期	86		
			8C区 P 1 2 1 2	銅釧片	1		50	有鉤銅釧	
	8C区 遺構外	銅鏃	2		21・22				
	8F区 S D H 5 0 0 1	銅釧	3	弥生後期	49	3連			
	12A区 遺構外	銅釧片	1	—	47		42		
	30A・D区 S I 0 3 5	銅釧片	1	古墳前期	48		43		
	39	広川・公所遺跡群 内沢遺跡	M-1 (河道)	小銅鐸	1	古墳前期	—	未報告	44
	40	原口遺跡	YH34号住居址	銅釧	1	弥生後期	60	完形品	45
			YH38号住居址	銅釧片	1	弥生後期	63・64		
YH60号住居址			銅釧片	1	弥生後期	64			
第1号方形周溝墓			銅釧	2	弥生後期	61・62	完形品		
秦野市	41	根丸島遺跡	198号住居址	銅鏃	1		—	46	
			包含層	銅鏃	1		—		
			53号住居址	銅釧片	1		—		
			221号住居址	銅釧片	1		—		
				銅釧片	1		—		
			6号住居址	銅釧片	1		—		
			21号住居址	銅釧片	1		—		
			181号住居址	銅釧片	1		—		
			住居跡	銅釧片	1		—		
			?	銅釧片	1		—		
332号住居址	銅釧片	1		—					

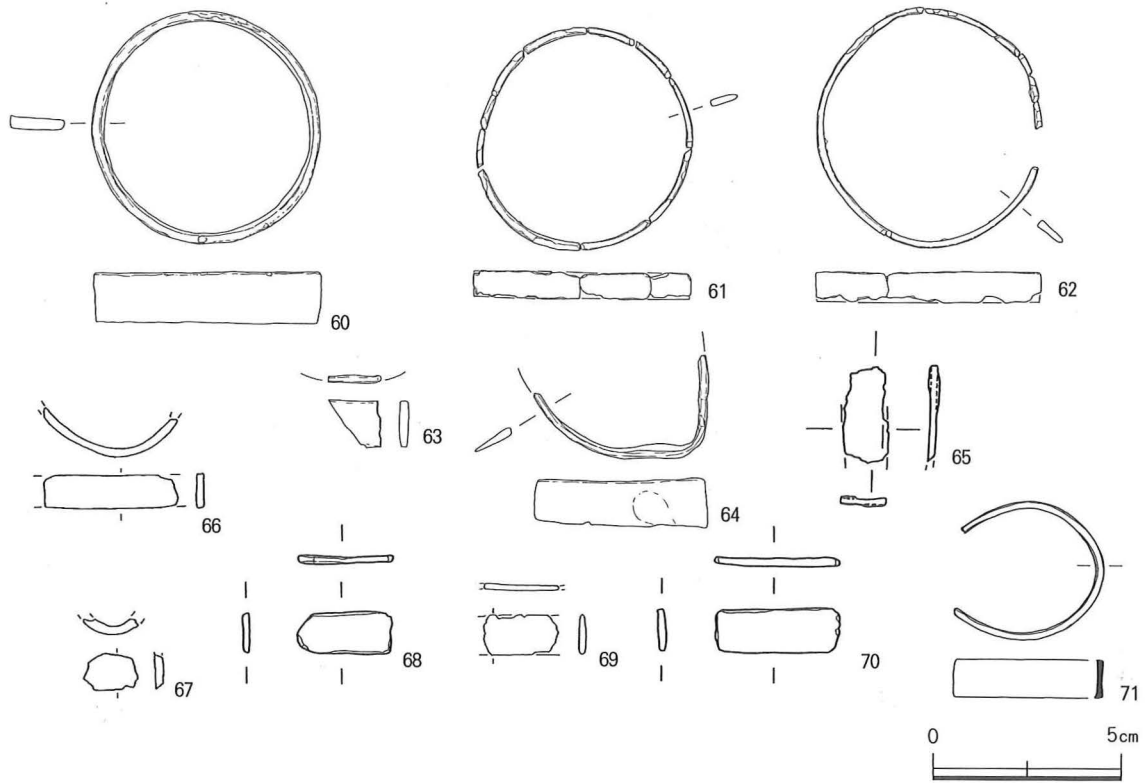
市町村	遺跡番号	遺跡名	遺構名	遺物名	数量	時期	図番号	備考	文献No.	
秦野市	41	根丸島遺跡	住居跡	銅釧片	1		—		46	
			164号住居址	銅釧片	1		—			
			87号住居址	銅釧片	1		—			
			住居跡	銅釧片	1		—			
			21号住居址	銅釧片	1		—			
			住居跡	銅釧片	1		—			
			58号住居址	銅釧片	1		—			
			198号住居址	銅釧片	1		—			
			住居跡	銅釧片	1		—			有鉤銅釧
			221号住居址	銅釧片	1		—			
			?	銅環	2		—			
			249号住居址	銅環	1		—			
			249号住居址	銅環片	1		—			
			166号住居址	銅環	1		—			
			166号住居址	銅環片	1		—			
			171号住居址	銅環	1		—			
			202号住居址	銅環	1		94			
			155号住居址	銅環	1		—			
			146号住居址	銅環片	1		—			
			包含層	銅環	1		—			
包含層	用途不明品	1		—		薄板折り重ね?				
42	東田原中丸遺跡	SI-03	銅環	1	古墳前期	95		47		
43	永塚下り畑遺跡	(古代住居跡)	銅鏡	1	古墳前期	100		48		
小田原市	44	千代光海端遺跡	1号住居址	銅環	1	弥生末～古墳初頭	96		49	
			4号住居跡	銅鏃	1	弥生後期	23	多孔銅鏃	50	
		千代仲ノ町遺跡 第IV地点	6号溝	銅釧片?	1		65			
			第6号住居址	銅釧片	1	弥生後期～古墳前期	68		51	
		千代吉添遺跡 第I地点	遺構外	銅釧片	1	弥生後期～古墳前期	70			
			千代南原遺跡 第V地点	遺構外	銅環	1		97		52
		千代南原遺跡 第XII地点	第6号竪穴住居址	銅釧片	1	弥生後期	69			
			第9号竪穴住居址	銅釧片	2	弥生後期	66・67		53	
		45	高田南原遺跡	包含層	銅釧片	1		71		54
				包含層	銅鏡	1		101		
46	諏訪の前遺跡	包含層	銅鏃	2	弥生終末?	24・25		55		
		表採	銅鏃	3	弥生終末?	26～28				
47	小田原城跡八幡山遺構群	第1号竪穴住居址	銅鏃	1	古墳前期	29		56		
		13a号住居址	銅鏃	1	古墳前期	30		57		



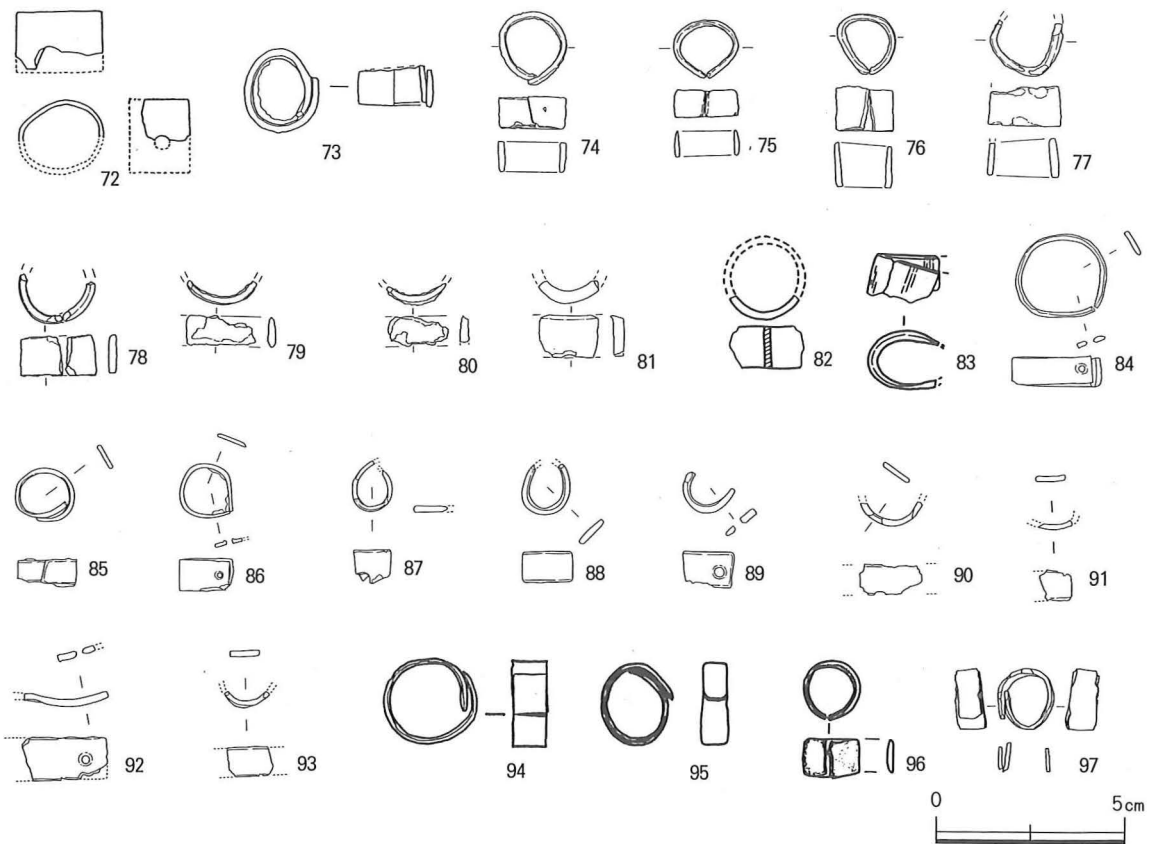
第2図 銅製品集成図(1)－銅鏃 [1/2]



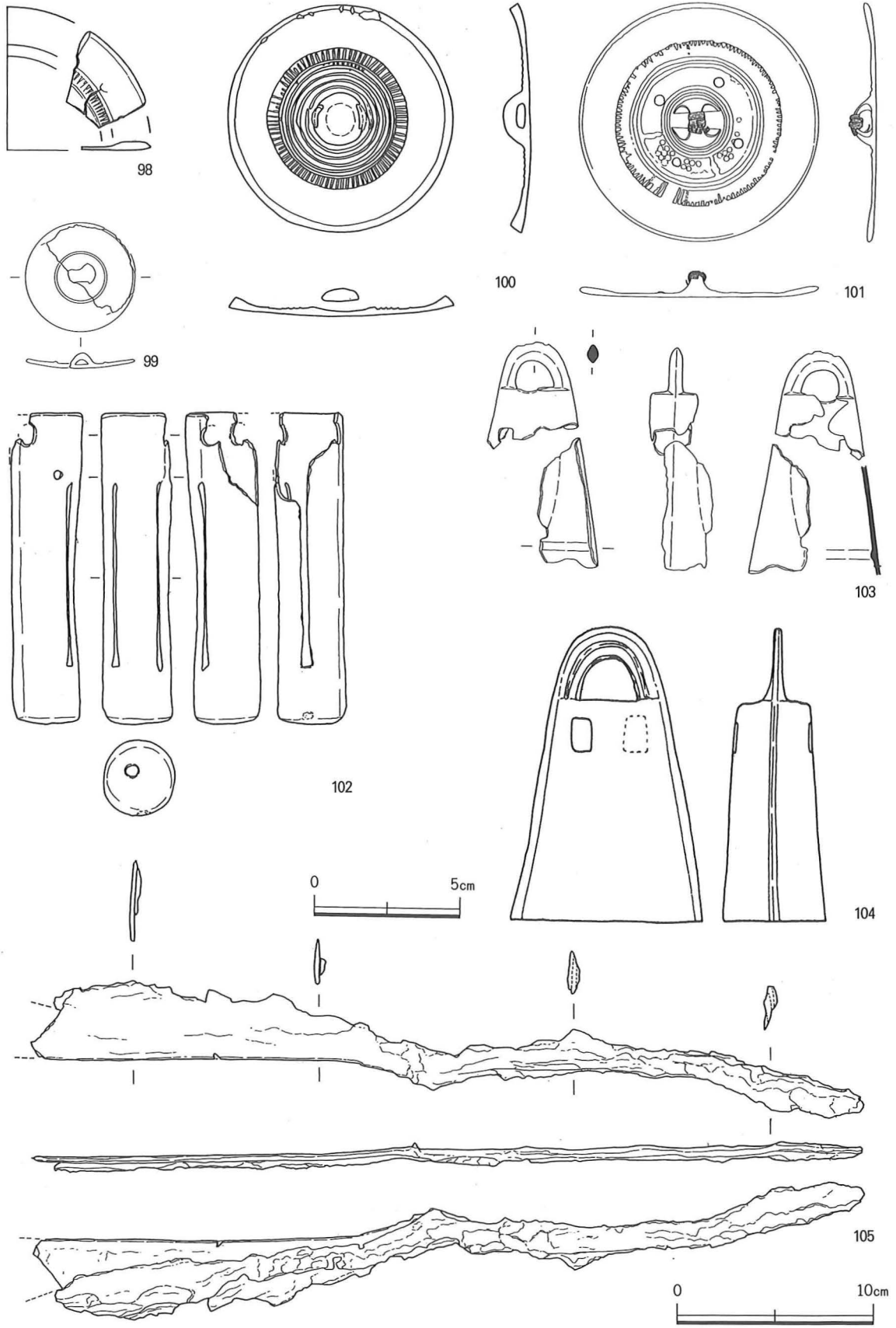
第3図 銅製品集成図(2)－銅剣① [1/2]



第4図 銅製品集成図(3)-銅釧② [1/2]



第5図 銅製品集成図(4)-銅環 [1/2]



第6図 銅製品集成図(5)－その他の銅製品 [1/2・105のみ1/3]



第7図 銅劔出土遺跡分布図 [六十万分の一]



第8図 銅劔出土遺跡分布図 [六十万分の一]



第9図 銅環出土遺跡分布図 [六十万分之一]



第10図 その他の銅製品出土遺跡分布図 [六十万分之一]

報告書等文献（番号は第1表の文献No.に対応）

1. 神澤勇一・川口徳治郎 1977 「梶山遺跡第4次発掘調査報告」『神奈川県立博物館発掘調査報告』第10号 神奈川県立博物館
2. 岡本孝之ほか 1980 『新羽大竹遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告5 神奈川県立埋蔵文化財センター
3. 田村良照ほか 1997 『関耕地遺跡発掘調査報告書』 観福寺北遺跡群発掘調査団
4. 国立歴史民俗博物館 1994 「共同研究「日本出土鏡データ集成」2-弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成一」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集 国立歴史民俗博物館
5. 甘粕 健 1969 「横浜市稲荷前古墳群をめぐる諸問題」『考古学研究』第16巻第2号 考古学研究会
6. 河野喜映・宍戸信悟 1985 『山王山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告8 神奈川県立埋蔵文化財センター
7. 近野正幸・畠中俊明 2006 『明神台遺跡・明神台北遺跡』かながわ考古学財団調査報告192
8. 岡田威夫ほか 1982 『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 No.6遺跡-I No.9遺跡-I 1981年度』横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団
9. 和島誠一編 1965 『三殿台』 横浜市教育委員会
10. 横浜市教育委員会 1970 『横浜市三殿台考古館収蔵品目録』
11. 鈴木敏弘 1972 『そとごう遺跡調査概報』 そとごう遺跡調査会
12. 浜田晋介ほか 2000 『下原遺跡』川崎市市民ミュージアム考古学叢書4 川崎市市民ミュージアム
13. 赤星直忠 1937 「神奈川県三浦郡吉貝塚調査」『史前学雑誌』第9巻第6号 史前学会
14. 小出義治 1981 『住吉遺跡発掘調査報告書』 神奈川県土木部・住吉遺跡調査団
15. 大坪宣雄・剣持輝久ほか 2003 『佐島の丘遺跡群発掘調査報告書』 佐島の丘埋蔵文化財発掘調査団
16. 中村 勉 1999 「三浦市赤坂遺跡」『月刊考古学ジャーナル 特集・三浦半島の考古学』 ニュー・サイエンス社
17. 赤星直忠 1975 『持田遺跡発掘調査報告書』 逗子市文化財調査報告書第6集 逗子市教育委員会
18. 山本暉久ほか 1994 『池子遺跡群 I No.2地点 No.1-B地点』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告27 神奈川県立埋蔵文化財センター
19. 山本暉久ほか 1997 『池子遺跡群IV』かながわ考古学財団調査報告26
20. 山本暉久・谷口 肇 1999 『池子遺跡群 No.1-A東地点』かながわ考古学財団調査報告45
21. 山本暉久・谷口 肇 1999 『池子遺跡群 X』かながわ考古学財団調査報告46
22. 大三輪龍彦 1981 『掘りだされた鎌倉 新発見の鎌倉遺跡と遺物展・図録』 鎌倉考古学研究所
23. 永井正憲 1984 『手広八反目遺跡発掘調査報告書』 手広遺跡発掘調査団
24. 継 実 1998 『若尾山（藤沢市No.36）遺跡-藤沢市立大道小学校内地点-発掘調査報告書』 東国歴史考古学研究所調査研究報告第16集 藤沢市立大道小学校内遺跡埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所
25. 合田芳正 1980 「関東地方の青銅製品について-大庭城遺跡発見の銅鏃をめぐって-」『考古学雑誌』第65巻第4号 日本考古学会
26. 依田亮一・飯塚美保ほか 2010『小出川河川改修事業関連遺跡群III』かながわ考古学財団調査報告251 平成22年3月刊行予定。
27. 小滝 勉・村上吉正 1992 『神崎遺跡発掘調査報告書』 綾瀬市埋蔵文化財調査報告2 綾瀬市教育委員会・綾瀬市史調査会・神崎遺跡発掘調査団
28. 宮井 香 2008 「河原口坊中遺跡（河川改修）」『年報15』 かながわ考古学財団
29. 小銅鐸以外の出土資料については担当者の加藤久美氏から情報提供を得た。
30. 伊東秀吉・大坪宣雄ほか 1995 『海老名本郷（X）』 富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団
31. 迫 和幸・中村哲也 2005 『宮の里遺跡発掘調査報告書』 玉川文化財研究所
32. 北川義明・山田不二郎 1998 「105 愛甲宿遺跡」『厚木市史 古代資料編（2）』 厚木市
33. 高杉博章 2001 『高森・宮ノ越遺跡』 玉川文化財研究所
34. 河合英夫ほか 2001 『成瀬第二地区遺跡群 下糟屋C地区第2・3地点 発掘調査報告書』 成瀬第二地区遺跡調査会
35. 小出義治 1966 『伊勢原町三ノ宮下谷戸特殊配石遺構の概要報告書』 国学院大学三の宮遺跡調査団

36. 宍戸信悟・宮坂淳一ほか 2000 『三ノ宮・下谷戸遺跡 (No.14) II』 かながわ考古学財団調査報告76
37. 栗山雄輝・上原正人ほか 1996 「第13章 上ノ入遺跡第4地点・第5地点」 『南原B遺跡他』 平塚市埋蔵文化財シリーズ29 平塚市遺跡調査会
38. 大川 清・河野一也ほか 1988 『御所ヶ谷遺跡』 日本窯業史研究所報告第23冊 日本窯業史研究所
39. 安藤文一 1982 『桜畑遺跡』 桜畑遺跡発掘調査団
40. 丸山由紀子 1995 『五領ヶ台遺跡—第9地点—』 平塚市埋蔵文化財調査報告書第12集 平塚市遺跡調査会
41. 若林勝司・中島由紀子ほか 2003 『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書3』 平塚市真田・北金目遺跡調査会
42. 若林勝司・中島由紀子ほか 2006 『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書5』 平塚市真田・北金目遺跡調査会
43. 若林勝司・川端清倫ほか 2008 『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書6』 平塚市真田・北金目遺跡調査会
44. 渡辺 務ほか 1999 「No.7 平塚市広川・公所遺跡群」 『第23回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』 神奈川県考古学会
45. 宍戸信悟・加藤久美 2001 『原口遺跡II』 かながわ考古学財団調査報告104
46. 伊東秀吉・杉山博久 1986 「根丸島遺跡」 『秦野市史 別巻 考古編』 秦野市
47. 安藤文一 1986 『東田原中丸遺跡』 秦野の文化財第22集 秦野市教育委員会・東田原中丸遺跡発掘調査団
48. 斎木秀雄・降矢順子ほか 2002 『下曾我遺跡 永塚下り畑遺跡IV地点』 鎌倉遺跡調査会・下曾我遺跡発掘調査団
49. 杉山博久 1984 「小田原市千代光海端遺跡」 『西相模における古式土師器の研究 (資料編)』 小田原考古学会
50. 諏訪間順・手島咲子ほか 1999 『千代仲ノ町遺跡 第IV地点』 小田原市文化財調査報告書第69集
51. 島崎麻里・諏訪間順ほか 2006 『平成15年度小田原市緊急発掘調査報告書3 千代吉添遺跡第I～IV地点』 小田原市文化財調査報告書第137集 小田原市教育委員会
52. 佐々木健作・田尾誠敏ほか 2004 『千代南原遺跡第V地点』 小田原市文化財調査報告書第119集 小田原市教育委員会
53. 滝澤 亮・小池 聡 2007 『千代南原遺跡第VII地点』 株式会社盤古堂
54. 天野賢一・永井 淳 2006 『高田南原遺跡』 かながわ考古学財団掘調査報告199
55. 杉山博久 1981 『諏訪前調査報告』 平塚市神田大野遺跡発掘調査団
56. 小川裕久・河野喜映 1984 『小田原城跡八幡山遺構群』 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告5 神奈川県立埋蔵文化財センター
57. 天野賢一・飯塚美保ほか 2006 『小田原城跡八幡山遺構群III (第3次調査)』 かながわ考古学財団調査報告201

参考文献

- ①. 宍戸信悟 1986 「神奈川県」 『弥生時代の青銅器とその共存関係 第三分冊』 埋蔵文化財研究会
- ②. 野澤誠一 2002 「銅剣・鉄剣からみた東日本の弥生社会」 『長野県立歴史館研究紀要』 第8号 長野県立歴史館
- ③. 林原利明 2001A 「神奈川県内の青銅製品 (1) —弥生・古墳時代前期集落関連遺跡出土品の集成—」 『西相模考古』 第10号 西相模考古学研究会
- ④. 林原利明 2001B 「神奈川県出土の弥生時代の青銅製品」 『シンポジウム 弥生後期のヒトの移動 ～相模湾から広がる世界～ 資料集』 西相模考古学研究会
- ⑤. 林原利明 2002 「神奈川県内の青銅製品 (2) —弥生・古墳時代前期集落関連遺跡出土品の追加資料、古墳前期までの墳墓出土品、前期古墳出土銅鏡の集成—」 『西相模考古』 第11号 西相模考古学研究会

神奈川県における集落遺跡出土の瓦の様相(3)

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

瓦は、寺院建築と共に大陸からもたらされ、国家的政策に基づき畿内を中心に次々と寺院が建立され、併せて瓦も大量生産、大量供給された。瓦は寺院のみならず、宮殿や官衙の一部の屋根をも飾るようになった。

瓦の研究は、製作技法、文様の系統・系譜・変遷、年代など瓦自体に向けられたもの、その研究の深化は瓦が葺かれていた寺院の造営時期・期間、寺院の変遷、寺院の造営主体の問題、さらには瓦の生産元の窯と供給先の寺院との流通関係といった研究課題にも当然のことながら大きな役割を果たしてきた。県下においてもこうした観点での研究が盛んになされ、成果を上げている。

今回、奈良・平安時代研究プロジェクトチームは、県内各地の古代寺院を除く遺構から出土した古代瓦を研究対象として取り上げることにし、2年かけて集成した。瓦の出土は寺院に偏ることは当然だが、寺院から距離を置いた集落の竪穴建物等から出土することもまま見られる。今回はこうした寺院以外の遺構出土の瓦に敢えて焦点を当てることで、これまでの瓦研究とは一味違った瓦観を描き出してみたいと考えた。従来どちらかという支配・権力側の枠内で語られていたものを、瓦の動きから在地社会が支配機構にどう関わっていたのか、あるいは地域間、地域内の交通・流通関係を解き明かす可能性を秘めた研究になるのではないかと考えた。そこで集落からの出土状況の分布、遺構の種類と構成、出土状況、軒丸・軒平瓦についてなど集成表から読み取ったデータについて若干の分析を試みた。以下に紹介する。

2. 古代瓦の分布について

昨年度まで古代プロジェクトでは集落遺跡から出土する瓦の様相として神奈川県内の集落遺跡から出土する瓦について集成を行ってきた。ここでは瓦の分布状況についてまとめ、結果と今後の展望について述べたい。第1図にこれまで集成してきた瓦の出土地点についてプロットしてみた。郡毎では、相模国では愛甲郡、高座郡、足下郡、大住郡、鎌倉郡、御浦郡、武蔵国では都築郡、橘樹郡に見られる。

古代寺院・国府等との関係

相模国内には瓦を産する遺跡が各地に点在する。7世紀後半から9世紀にかけては各地に寺院が建てられた。また、数度の移転があったといわれる相模国府、各郡にはそれぞれ郡衙が設けられた。今回集成が行われた遺跡も多くがこれらの寺院および国府等の推定地により近いことが挙げられる。愛甲郡では鐘ヶ嶽廃寺、高座郡では下寺尾廃寺と相模国分寺・尼寺、足下郡では千代廃寺、大住郡では四之宮下郷廃寺、国府推定地、鎌倉郡では鎌倉廃寺、御浦郡では宗元寺などがある。また、武蔵国南部の都築郡では岡上廃堂、橘樹郡では影向寺、寺尾台廃堂、長者原遺跡などがある。

古代駅路等との関係

第3図は相模国と武蔵国南部の駅伝路の想定図および瓦の出土地点を重ねた図である。おおよそ伝路沿いに出土が認められる。特に箕輪駅から夷参駅にかけては多くの出土が認められる。夷参駅は、『延喜式』には記されておらず、編纂以前に廃駅になったと言われている。今回の集成において駅より北側の推定道沿い

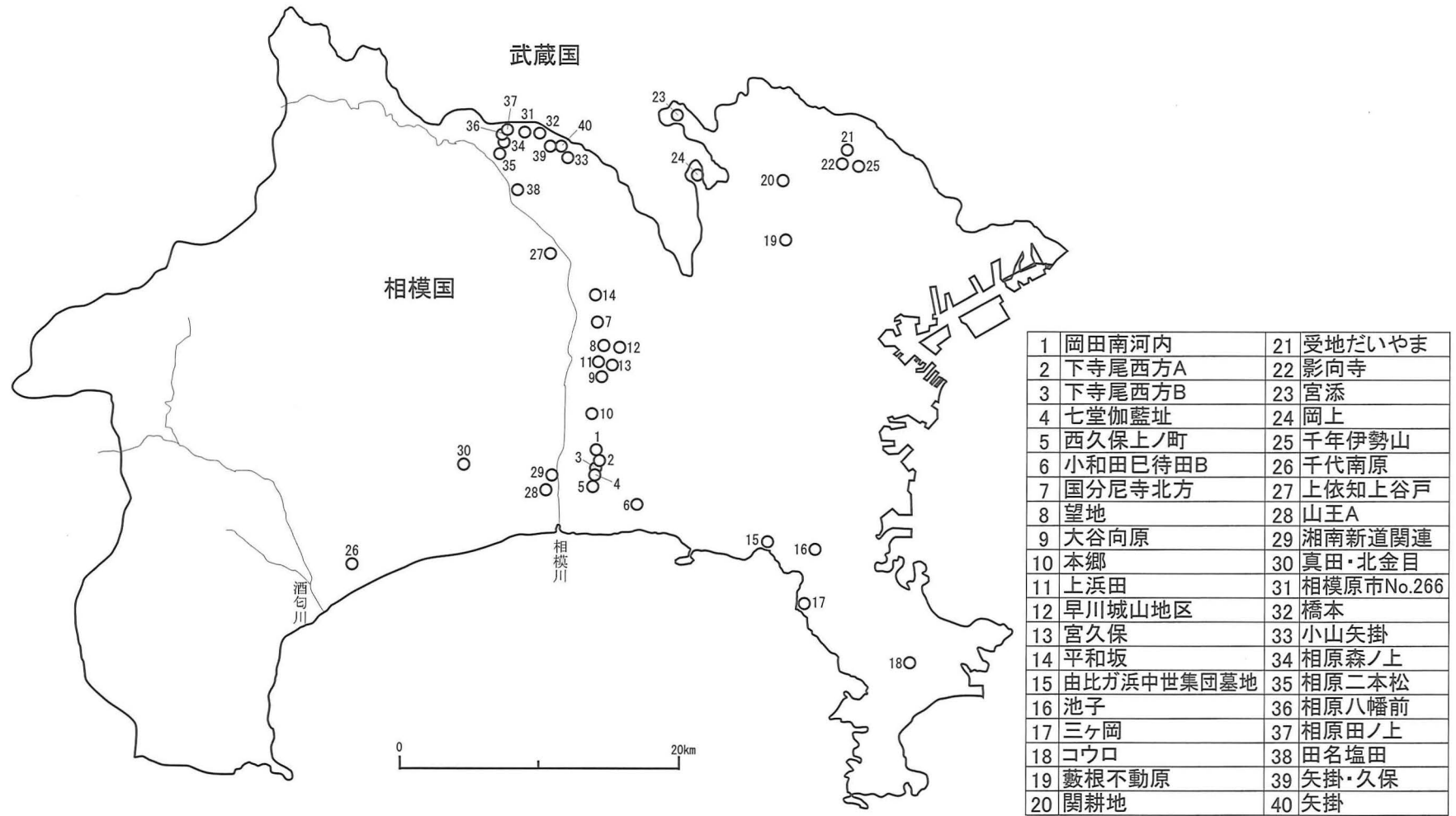
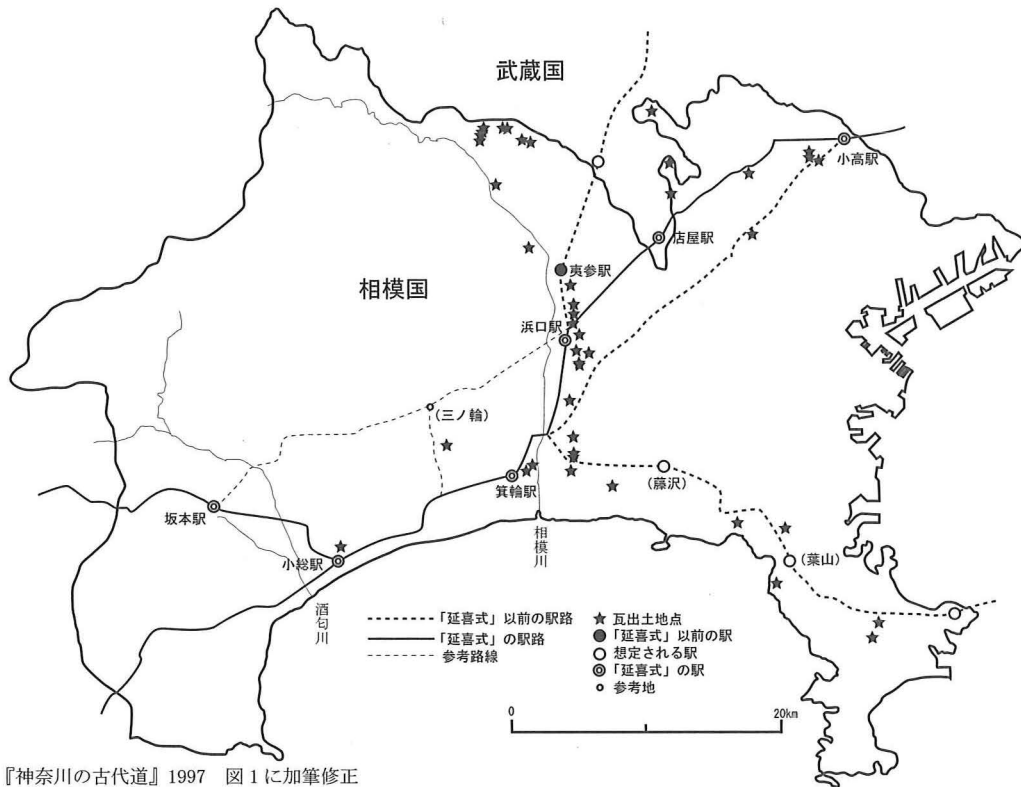


図1 瓦が出土した主な集落遺跡



『図録・瓦が語るかながわの古代寺院』2008 図1に加筆修正

図2 瓦出土地点および古代寺院と村落寺院、瓦窯の分布



『神奈川の古代道』1997 図1に加筆修正

図3 相模国と武蔵国南部の駅伝路想定図

では出土が見られないことも、出土に偏りがあったと言えよう。相模国北部（現在の相模原市域）からの出土状況からは、大きく駅路を逸れたところからも比較的まとまって分布がみられる。また、これまでは想定でしかない駅家の所在地についてもこれらの瓦の分布が手がかりとなる可能性がある。

以上、瓦の分布状況についてまとめてきた。やはり古代の寺院、国府等の周辺に多くの出土がみられるが、相模国北部の状況からは寺院以外の場所でも一定の出土量がみられた。相模国北部では周辺に瓦尾根瓦窯などの南多摩古窯郡の存在が知られ、寺院などの瓦以外に、瓦窯の存在も出土に影響を与えていることが窺える。また、駅伝路沿いに出土が偏ることも明らかとなった。中でも箕輪駅から夷参駅間の出土状況は濃密であることから、律令体制下においてこれらの駅間を盛んに人の往来があったことが窺われる。

なぜ集落内に瓦が持ち込まれるかは定かでない。出土状況をみる限りでは竈の補強材として使用したように見られるが、あるいは何らかの呪術的な意味合いがあるのかもしれない。まったく推測の域であるが、ありがたい寺院にまつわるものを家の中に持ち込み、竈の一部とすることに意味があったのかもしれない。

いずれにせよ、集落内から出土した瓦を集成することは様々な古代史研究の課題への切り口となることは間違いなくその意義は大きい。今後は瓦以外の出土遺物との比較を通して、より詳細な人的、物質的交流について明らかにしていきたい。

（相良）

3. 瓦出土の遺構について

2年にわたり集成した神奈川県内の集落遺跡から出土した瓦は約1650点にのぼる。集成にあたり遺構外・遺物包含層は除外しているが、明確な人為的な掘り込みを伴わない河道や土器集中、土器棄場状遺構、貝塚状遺構からなどという出土例もある。また、遺構内から出土した瓦を伴う遺跡の、遺構外出土の瓦も集成されている。ここでは瓦を出土した遺構に焦点を絞り、取り上げてみたいと思う。

出土した遺構の種類は竪穴住居址、掘立柱建物址の柱穴、井戸、溝状遺構、土坑、ピット、道状遺構、配石遺構や集石、土壇墓、不明遺構など多岐にわたる。通常集落遺跡で報告されるほとんどの遺構から出土していると言ってよい。これらの遺構内から出土した瓦の数は約1250点である。

集落遺跡で最も多く検出される遺構は竪穴住居址である。遺構内出土の瓦に限定しても竪穴住居址から出土する例が最も多い。遺構数は273軒、出土した瓦の数は708点と、遺構内出土瓦の2分の1以上を占めている。出土状況としては覆土中からの出土が点数としては最も多い。しかし川崎市内や海老名市内、平塚市内の遺跡では、竈の構築材として使用されていた出土例が複数確認されている。また、1軒の竪穴住居址から出土する瓦の数は、平均1～4点である場合が多い。稀に8～10数点、あるいは30点とまとまって出土する竪穴住居址が集落内に混在する。集落内に存在する住居址の多様性について課題を示唆するものであろうか。

竪穴住居址に次いで出土数が多い遺構は、218点を出土した溝状遺構である。溝状遺構の数は83条である。ひとくくりに溝状遺構といってもその性格は多様であろうが、瓦の出土状況は覆土中に混入した状況が大半である。

そのほか主だった遺構をみると、掘立柱建物址は遺構数31棟から98点出土している。井戸は27基から56点、土坑は18基から35点、ピットは23基から35点出土している。ピットの中には根固めに使用されていた今小路西遺跡のような例もあるが、ほとんどは覆土中からの出土である。このほか、意外に出土点数が多い遺構としては、道状遺構8条からの出土瓦は38点をあげることができる。

集落遺跡から出土した瓦の平瓦と丸瓦の割合は、おおよそ2：1である。遺構内の瓦が、完形あるいはほぼ完形で出土することは極めてまれである。竈の構築材を除くと元の大きさを復元することができない小破片として出土するケースが多い。軒丸瓦・軒平瓦は30点出土しているが、特筆すべき出土傾向は見いだせない。

以上、出土遺構について概観したが、遺跡の分布状況とあわせて考えてみると瓦を需要していた遺跡の周辺で、集落内に持ち込まれた可能性が高いことが再確認された。瓦を使用していた建物と集落の人々とのかわかりが、出土状況として表れているのであろう。しかし出土遺構は多岐にわたるが、そのほとんどは明確な使用状況を示すものではない。小破片が多いのはなぜだろうか。何のために持ち込んだのか、なぜ持ち込んだのかという疑問が、集成表を眺めて更に大きくなった。集落内の瓦はどのように再利用され、遺棄されたのであろうか。更なる資料の増加が待たれる。(加藤)

4. 集落遺跡における瓦の出土状況の検討

本項では、集落遺跡における瓦の出土状況をまとめ、使用方法の実態に迫りたい。

集落遺跡から出土する瓦は、出土状況や数量からすると、屋根に葺くという本来の目的とは異なる使用方法が取られていた可能性が高い。しかしながらその方法は、集成した瓦出土遺構についての8割以上が覆土や確認面から出土したもの(261遺構46%)、ないしは出土状況の記述がなく(218遺構38%)、不明な点が多い。堅穴住居址の床面から出土している事例も散見される(20遺構)が、やはりその用途は判然としない。出土状況から明確となっている瓦の使用方法是、堅穴建物址における竈の構築材(註1)、および柱穴に用いられる礎板・根固めとしての用途である。

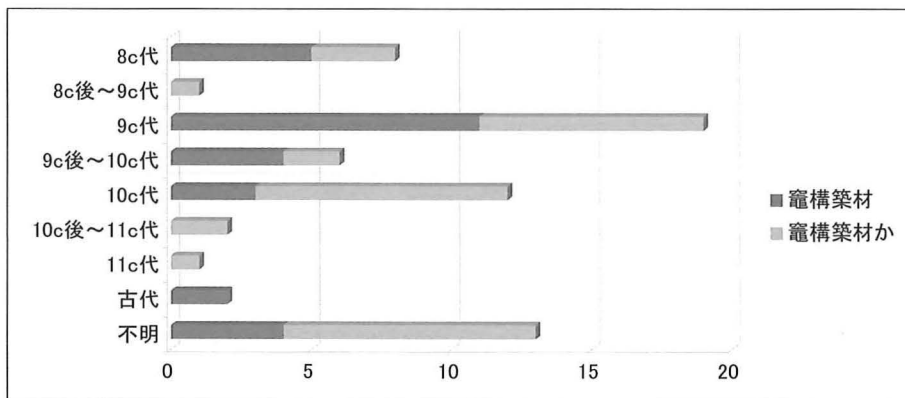
まず、竈構築材としての瓦の出土状況を概観する。今回の集成において、竈袖・竈構築材と報告される遺構は17遺跡32遺構が確認された。また、このほか出土位置に関する記述について竈・竈覆土や竈周辺となっているものが20遺跡34遺構確認されているが、これらの遺構から出土した瓦についても、竈の構築材として使用されていた可能性が考えられる。

これらの遺構について、帰属年代が明瞭なものは26遺構中51遺構であるが、初現は8世紀第2四半期である。瓦の使用は9世紀代をピークに11世紀代の遺構まで見られる(第1表)。8世紀代の遺構は、第2四半期に川崎市影向寺跡および岡上-4遺跡第2地点から検出されている。影向寺跡は7世紀末に遡る創建年代を持ち、8世紀中葉前後以降は郡寺としての公的な性格を持つようになるとされる寺院址である。岡上遺跡は、堂宇等は発見されていないが、表採資料などから古代寺院の存在が古くから知られる遺跡である。8世紀中頃からは、海老名市座間丘陵上に立地する上浜田遺跡にて散見されるようになる。上浜田遺跡から北方約1kmには相模国分寺が所在する。8世紀後半代からは国府城内の遺跡で検出される例が見られる。当該期はこのような寺院もしくは官衙関連の遺跡での事例があるのみである。そして9世紀代以降、このような官衙・寺院関連遺跡のほか、相模原市田名塩田遺跡群や横須賀市コウロ遺跡、平塚市真田北金目遺跡群など、分布が広がっていく。

竈構築材としての瓦は、袖の芯材や煙道・天井部の補強、支脚などに用いられる。使用される瓦は丸瓦・平瓦が主体であるが、構成比は概ね2：3となり、前述の集落遺跡から出土する瓦の組成比よりも、やや丸瓦が優勢である。今回の集成では反映されていないが、平成21年度刊行予定である小出川河川改修事業関連遺跡群では、完形の丸瓦が竈の両袖前面に貼り付いた状態で検出された事例が報告されている(註2)。このような事例からは、瓦種別に対する選択意図があったことも考えられるが、竈から出土する瓦の大半が破

第1表 竈構築材瓦出土遺構一覧と時期別推移

遺跡所在地	遺跡名	遺跡の性格	出土遺構		出土瓦			出土位置	遺構年代
			No.	種別	丸瓦	平瓦	その他		
川崎市	岡上-4遺跡第2地点	寺院関連・集落	H22	竪穴住居址	1	5	0	覆土・竈覆土	8c 第2
川崎市	岡上-4遺跡第2地点	寺院関連・集落	H12	竪穴住居址	5	11	0	竈材	8c 第2
川崎市	岡上-4遺跡第2地点	寺院関連・集落	H17	竪穴住居址	8	27	5	床面・竈材	8c 第2
川崎市	影向寺遺跡	寺院関連	8	竪穴住居址	1	1	0	竈材	8c 第2
海老名市	上浜田遺跡	集落	3	竪穴住居址	0	1	0	竈材	8c 中
川崎市	岡上-4遺跡第2地点	寺院関連・集落	H4	竪穴住居址	1	3	0	竈覆土	8c 後
海老名市	上浜田遺跡	集落	39	竪穴住居址	1	0	0	覆材	8c 後
平塚市	天神前遺跡第8地点	国府城	10	竪穴住居址	1	1	0	竈・覆土	8c 後
海老名市	国文尼寺北方遺跡	寺院関連	4	竪穴住居址	3	6	0	竈	8c 後~9c
海老名市	上浜田遺跡	集落	76	竪穴住居址	0	1	0	竈	9c
海老名市	国文尼寺北方遺跡	寺院関連	1	竪穴住居址	0	2	0	竈材	9c
海老名市	国文尼寺(北方)遺跡1次調査	寺院関連	6	竪穴住居址	0	2	0	竈材	9c
相模原市	田名塩田遺跡群A地区	集落	H8	竪穴住居址	5	1	0	竈覆土	9c 前
茅ヶ崎市	七堂伽藍址第2次確認調査2トレンチ	寺院関連・集落		竪穴住居址	0	1	0	竈袖	9c 前
海老名市	上浜田遺跡	集落	14	竪穴住居址	0	1	0	竈材	9c 前
海老名市	上浜田遺跡	集落	77	竪穴住居址	0	1	0	竈材	9c 前
川崎市	野川東耕地遺跡第2地点	集落	22a	竪穴住居址	3	1	0	竈覆土	9c 第2
川崎市	影向寺遺跡	寺院関連	10	竪穴住居址	1	2	0	竈	9c 第3
平塚市	四之宮下郷3区	国府城	7	竪穴住居址	0	3	0	竈覆土	9c 中
平塚市	大会原遺跡第4地点	国府城	NH70	竪穴住居址	0	0	2	竈袖補強材	9c 中
海老名市	上浜田遺跡	集落	16	竪穴住居址	1	11	0	竈材・掘り方	9c 中
海老名市	上浜田遺跡	集落	19	竪穴住居址	0	9	0	竈材	9c 中
海老名市	上浜田遺跡	集落	28	竪穴住居址	1	3	0	竈材	9c 中
海老名市	上浜田遺跡	集落	36	竪穴住居址	0	3	0	竈材	9c 中
海老名市	上浜田遺跡	集落	38	竪穴住居址	1	1	0	床面・竈	9c 中~後
横須賀市	コウロ遺跡	集落	4d	竪穴住居址	1	0	0	竈	9c 中~後
平塚市	天神前遺跡第7地点	国府城	2	竪穴住居址	1	1	0	竈(袖構築材)	9c 後
海老名市	上浜田遺跡	集落	17	竪穴住居址	0	2	0	竈材	9c 後
平塚市	平塚城跡遺跡	集落	2	竪穴住居址	0	1	0	竈	9c 後
平塚市	真田・北金目遺跡群12区	集落	57	竪穴住居址	1	0	0	竈	9c 後~10c 前
海老名市	国文尼寺北方遺跡	寺院関連	1	竪穴住居址	0	4	0	竈材	9c 後~10c 前
海老名市	上浜田遺跡	集落	5	竪穴住居址	3	4	0	床面・竈材・覆土	9c 末~10c
綾瀬市	宮久保遺跡	集落	123	竪穴住居址	0	3	0	竈材	9c 末~10c 初
海老名市	上浜田遺跡	集落	6	竪穴住居址	6	9	0	竈	9c 末~10c 前
綾瀬市	早川No.100遺跡	集落	H1	竪穴住居址	2	0	0	竈材	9c 末~10c 前
平塚市	天神前遺跡第7地点	国府城	36	竪穴住居址	2	3	0	竈・覆土	~10c
小田原市	千代南原第VI地点	遺物包蔵地	1	竪穴住居址	1	1	0	竈周辺	10c
平塚市	東中原B遺跡	集落	11	竪穴住居址	0	1	0	竈覆土	10c
平塚市	稲荷前B遺跡第5地点	国府城	8	竪穴住居址	0	0	1	竈	10c 前
平塚市	稲荷前B遺跡第5地点	国府城	19	竪穴住居址	0	0	1	竈	10c 前
川崎市	黒川地区遺跡群VII宮添遺跡	集落	5a	竪穴住居址	1	1	0	竈覆土	10c 前
相模原市	矢掛久保遺跡	集落	8	竪穴住居址	2	3	0	竈材	10c 初~中
相模原市	橋本遺跡	集落	82	竪穴住居址	4	0	0	竈材	10c 第2~3
平塚市	天神前遺跡第8地点	国府城	14	竪穴住居址	1	1	0	竈・覆土	10c 中
厚木市	上依知上谷戸遺跡	集落	H2	竪穴住居址	0	2	0	竈覆土	10c 中
相模原市	矢掛久保遺跡	集落	34	竪穴住居址	1	1	0	竈材・確認面	10c 中~後
相模原市	橋本遺跡	集落	72	竪穴住居址	11	6	0	竈覆土	10c 第3~4
相模原市	相原田ノ上遺跡	集落	6	竪穴住居址	5	2	0	竈覆土	10c ~11c 前
平塚市	真田・北金目遺跡群12区	集落	65	竪穴住居址	1	0	0	竈	10c 末~11c 後
平塚市	六ノ城遺跡第4地点	国府城	90	竪穴住居址	1	0	1	竈袖補強材	11c 前
平塚市	真田・北金目遺跡群12区	集落	56	竪穴住居址	1	0	0	竈	11c 後



片資料であり、選択意図の有無は、それが可能な状況にあったか否かを含む問題として捉えなければならぬ。

礎板・根固めとしての瓦は、今小路西遺跡のピット4基から検出されている。遺跡は鎌倉郡衙に比定され、郡庁域の建物群が検出されている。これらのピットもまた郡衙関連遺構の可能性を持つことから、集落遺跡とは異なる性格であると判断したため、今回の検討対象からは除外する。

以上、集落遺跡における瓦の出土状況についての概観を述べてきたが、各事例個別の出土状況について詳細な検討に至ることができず、使用実態としては竈の構築材としての用途しか明らかにすることはできなかった。それではなぜ瓦が構築材として使用されたのだろうか。利点としては、弧状を呈す形態から竈表面に貼付しやすいことや、ある程度の規格があることから扱いやすい等が考えられるが、同一遺跡内における同時期の竈でも瓦を使うものと使わないものがある。この差異が生じる要因については、機能的利点だけでなく、集落に持ち込む瓦の意義を見据えて考えていかなければならないだろう。(齊藤)

(註1) 神奈川県内における瓦を使用したについて、服部みはる氏は相模国の事例を集成しており、傾向及び特徴について、地域・時期・使用状況・種類・産地・共伴遺物から考察を行っている(服部みはる2005「瓦を使ったカマド～相模の事例～」『論叢古代相模 一相模の古代を考える会十周年記念論集一』相模の古代を考える会)。

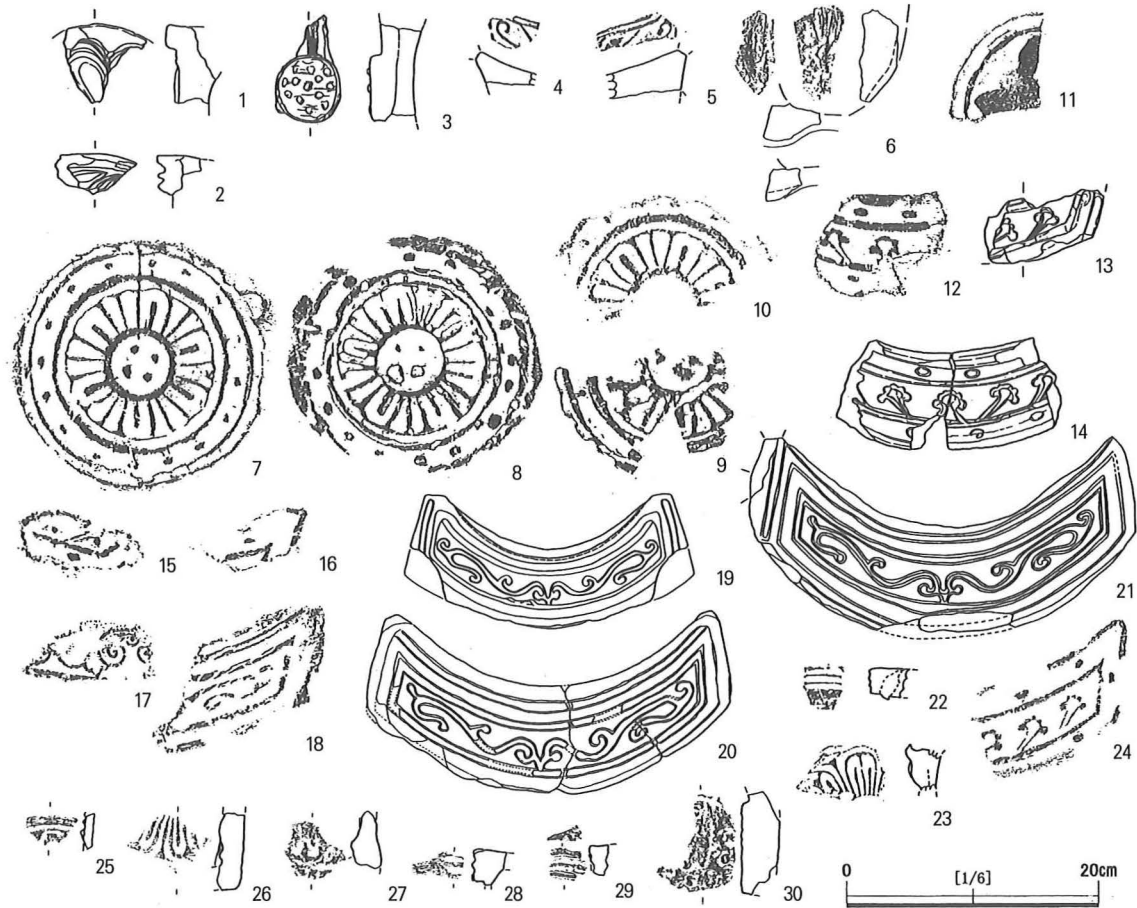
(註2) 小川岳人2004「小出川河川改修関連遺跡群」『第15回茅ヶ崎市遺跡調査発表会 発表要旨』茅ヶ崎市教育委員会・財団法人茅ヶ崎市文化振興財団

5. 文様瓦の様相

ここでは、研究紀要13・14号の2ヶ年で集成した古代瓦のうち、文様瓦の様相について概観する。集落遺跡から出土した文様瓦(軒丸瓦・軒平瓦)は全部で38例が確認されているが、このうち文様が判明するなどの主要な30例を第4図・第2表に掲げた。

まず、軒瓦が出土した遺跡と数量の内訳を見ていくと、川崎市で1箇所5例(岡上-4遺跡)、海老名市で2箇所3例(国分尼寺北方遺跡、国分尼寺関連遺跡)、平塚市の相模国府域およびその周辺で8箇所21例(大会原・坪ノ内・六ノ域・高林寺・天神前・諏訪前A・山王B・稲荷前B・道半地遺跡)、小田原市で2箇所9例(千代仲ノ町遺跡第5地点、千代南原遺跡第XV地点)が挙げられる。それぞれの遺跡は、川崎市は岡上廃寺、海老名市は相模国分尼寺、小田原市は千代廃寺など、いずれも古代寺院に極近接した地理的環境下であり、平塚市の場合も寺院の所在は必ずしも明確では無いが、相模国府付属の寺院(四之宮廃寺・高林寺寺院跡等)に関連するものと考えられる。その分布は必ずしも局所的なあり方では無いが、国府域の東方に偏る傾向は認められる。なお、平塚市に事例が多い背景としては、流通した瓦の数量というよりは、むしろ発掘調査件数の多寡が反映しているためであろう。

次に、文様構成を見ると、まず岡上-4遺跡では単弁八葉蓮華文・剣菱状八葉蓮華文の軒丸瓦3点と、唐草文系の軒平瓦2点が確認される。いずれも8世紀第2四半期後半の住居(H-17号住居址)から出土したもので、両者はほぼ同時期の組み合わせと見て良い。剣菱状八葉蓮華文の文様瓦は、武蔵国府・国分寺や日野市落川・一の宮遺跡、調布市染地遺跡、川崎市菅寺尾廃寺などでも事例があり、さらにその生産窯は稲城市の大丸瓦窯に求められ、多摩川流域各所の遺跡に分布する文様である(福田1988)。相模国分尼寺では、報告書には写真が掲載されているのみだが、尼寺関連遺跡の第1次調査で単弁八葉蓮華文の軒丸瓦として2点が報告されている(林原1989)。写真図版を見る限りでは、いずれも瓦当面外周に珠文が巡り、破片資料



第4図 集落遺跡出土の文様瓦

第2表 集落遺跡出土の文様瓦

No.	市町村	遺跡名	遺構名	遺構の時期	種類	文様・調整等	備考				
1	川崎	岡上-4遺跡 第1地点	H-17号住居址	8c-第II後	軒丸瓦	単弁八葉蓮華文					
2					軒丸瓦	単弁八葉蓮華文の中房か					
3					軒丸瓦	剣菱状八葉蓮華文	京所・中和田資料に近似。				
4					軒平瓦	唐草文系・図文詳細不明					
5					軒平瓦	唐草文系・図文詳細不明					
6	海老名	国分尼寺北方遺跡	道状遺構	中~近世	軒丸瓦	図文不明	瓦尾根瓦窯系。				
7	平塚	大会原遺跡 第4地点	NH70号住居	9c中	軒丸瓦	単弁六弁蓮華文	竈袖補強材。国分尼寺・七堂伽藍跡と同範。				
8					軒丸瓦	単弁六弁蓮華文					
9					軒丸瓦	単弁六弁蓮華文					
14						坪ノ内遺跡 第7地点	C1溝	中世	軒平瓦	飛雲文、縄叩き	(湘南新道関連遺跡)
13							遺構外	-	軒平瓦	飛雲文、縄叩き	
21						六ノ域遺跡 第4地点	S190	11c前	軒平瓦	均整唐草文、格子叩き	竈袖補強材。
11						六ノ域遺跡 第14地点	NH261号土坑		軒丸瓦	素弁蓮華文	(湘南新道関連遺跡)
12							遺構外	-	軒平瓦	飛雲文、縄叩き	
10						高林寺遺跡 第5地点	遺構外	-	軒丸瓦	単弁六弁蓮華文	
16			遺構外	-	軒平瓦	飛雲文、縄叩き					
18		高林寺遺跡 第7地点	SI11	10c中	軒平瓦	均整唐草文、格子叩き					
20		天神前遺跡 第7地点	2号住居	9c後	軒平瓦	均整唐草文	竈袖補強材。				
15		諏訪前A遺跡 第1地点	SD03	7-11c前	軒平瓦	飛雲文、縄叩き	(四之宮下郷1区)				
17		山王B遺跡		-	軒平瓦	均整唐草文、縄叩き	国分僧寺と同範。				
19		稲荷前B遺跡 第5地点	8号住居	10c前	軒平瓦	均整唐草文、格子叩き	竈袖補強材。				
-			19号住居	10c前	軒平瓦	均整唐草文、格子叩き	竈補強材。				
22	小田原	千代仲ノ町遺跡 第5地点	2号溝	10c後-11c初	軒丸瓦	外区:三重圏線・隆線鋸歯文					
23					軒丸瓦	内区:複弁蓮華文					
24		千代原南遺跡 第XV地点	第1号建物址 遺構外	-	軒平瓦	飛雲文、縄叩き	宗元寺と同範・後出。				
25					軒丸瓦	蓮弁					
26					軒丸瓦	蓮弁・圏線					
27					軒丸瓦	蓮弁・圏線					
29					軒丸瓦	蓮子10以上、中房片					
28					軒丸瓦	三重圏線					
30	軒丸瓦	三重圏線									

のため弁数が八葉か否かは確認出来ないが、尼寺出土の軒丸瓦は珠文縁を伴う八葉の文様瓦が主体のため（河野1998他）、本資料も同種の瓦と思われる。平塚の相模国府関連遺跡では、軒丸瓦は単弁六葉蓮華文が4個と素弁蓮華文が1個、軒平瓦は飛雲文が5個と均整唐草文が6個が出土している。軒丸・軒平瓦ともに住居カマドの補強材として転用されている事例が目立つことは興味深い、なかでも大会原遺跡第4地点のNH70号住居出土の単弁六葉蓮華文軒丸瓦は、海老名国分尼寺・下寺尾廃寺出土例と同範で、範傷からその先後関係が確認されている（高橋2009）。軒平瓦の調整の調整は飛雲文が縄叩き、均整唐草文が格子叩きを伴い、前者は宗元寺・千代廃寺（同図24）、後者は国分僧寺・尼寺にも同系の瓦がある。特に国分尼寺では単弁六葉蓮華文と均整唐草文の組み合わせが、9世紀後半代の再建期瓦に位置付けられており（國平2002）、国府域においても9世紀後半から10世紀代の堅穴住居より出土している事が確認される。最後に小田原の事例は、三重圏縁と鋸歯文・複弁蓮華文を施す軒丸瓦と飛雲文軒平瓦が出土している。軒丸瓦はいずれも細片で図文の詳細は不明だが、千代寺院へ製品を供給した松田町からさわ瓦窯に三重圏縁複弁十葉蓮華文の軒丸瓦があり、恐らくは当該窯産の文様瓦と思われる。（依田）

引用・参考文献

- 河野一也 1998 「相模国分寺」『聖武天皇と国分寺－在地から見た関東国分寺の造営－』雄山閣
- 國平健三 2002 「相模国分寺と地方寺院の研究」『総合研究－さがみの国と都の文化交流』神奈川県立歴史博物館
- 高橋 香 2009 「瓦の様相－湘南新道出土瓦の一樣相について－」『湘南新道関連遺跡 II』かながわ考古学財団調査報告 242 財団法人かながわ考古学財団
- 福田健司 1988 「日野市落川遺跡出土の磁器－その出土背景－」『貿易陶磁研究』No.8（のち、同著2008『南武蔵の考古学』福田健司さんの定年を祝う会刊行、に再録）
- 林原利明 1989 『相模国分尼寺関連遺跡 第1次調査発掘調査概報』相武考古学研究所

6. まとめ

瓦は本来、「古代寺院や都城、国府・郡衙等公的施設の建物の屋根を飾るもの」として用いられるものである。集落内で出土している瓦は本来の使用法とは異なり、堅穴住居址のカマド等に用いる等本来の使用とはかけ離れた使用法である事が窺える。では、どういった集落から出土しているのだろうか。

瓦が出土する集落の分布について、駅伝路沿いである事が指摘されている。確かに、出土地点をおとすと駅路沿いにみられる事、また、古代寺院や瓦窯に近接した集落からの出土が多い事が窺える。神奈川県北部に集中している点は、県境に瓦尾根瓦窯を中心とした瓦窯址群が北側に展開しており、瓦屋に所属する瓦工人の集落の可能性が想定されるだろう。また、国分寺や国府、郡衙などに近接した集落域からの出土事例が多い、というのも各施設の造営に携わった工人等の集落址と捉えられようか。基本的に、瓦の使用が可能＝その建造物の造営等に関与した工人等の集落として認識してよいだろう。もちろん、瓦が出土している集落すべてにいえる事ではなく、他の要素も考慮しなければならない事はいうまでもない。

使用方法については様々なパターンがみられたが、最も多いのが堅穴住居址のカマドの構築材としての使用方法である。カマドに使用する以外では、細かく破碎した後、それを転用砥石として使用するものがあり、これは須恵器片の使用事例と同様である。また、細かく破碎したものの中には土地改良の部材として使用しているものもあり、版築などの混和材などに用いたようである。カマドの芯材に瓦を使用する傾向は、作りつけカマドをもつ堅穴住居址がみられる地域で、なお且つ国府・国分寺など瓦を使用した建物址のある遺跡

に近接した集落遺跡からは普遍的に見られるようで、西は伊勢まで確認され、関東地方で多く出土事例が挙げられている。

瓦を使用していた空間が隣接ないしは近接していた場合、入手しやすい部材という事もあり、自在に扱っていたようであるが、古代人の瓦一枚に対する扱い方が様々であるのは興味深い。例えば、「知識衆」が寄進行為の1つとして平丸瓦に氏名等を記載したり、労役の実態を表すものとして扱われる一方で、「カマドに使用する」、という日常生活の一部としての使用方法がみられる。信仰の対象として用いた場合もあれば、特に意識しない人々にとっては使えるものはなんでも使う、というリサイクルの精神が古代人にもあったのだろうか。

今回の集成では、個々の瓦についての産地同定まで踏み込む事はできなかった。県内の瓦の産地については、近年の調査で横須賀市・乗越瓦窯の存在が明らかとなり、不明瞭であった相模国内の瓦の供給体制が明らかになりつつある。神奈川県内では、簡単にわけると、

- ・三浦半島を中心とした瓦窯体制
- ・からさわ瓦窯を中心とした瓦窯体制
- ・瓦尾根・南多摩を中心とした瓦窯体制

の三体制が想定される。瓦は、本来の所属先、つまり国府や国分寺、古代寺院等へ供給されており、集落へ直接供給されているわけではないが、各々の産地同定を行う事により、県内での流通経路が明らかになるだろう。

「古代寺院以外の瓦集成」という通常の瓦研究の視点とは異なった手法ではあったが、県内の瓦出土事例として、集落址からも比較的多く出土している、という事が明らかとなった。遺構が明確なもの、という限定をしている為、「遺構外」として出土している瓦の実態が反映されてはいないが、おおよその県内の出土事例が把握できるかと思われる。分布図の中では大磯・小田原地域が希薄なようにみられるが、遺構外出土事例が多かった、という事になるのだろうか。集成の結果、集落から出土している瓦の多くは、瓦本来の機能を失った、信仰とかけ離れたリサイクル品であった可能性を一つの考え方としてあげたいと思う。(高橋)

神奈川の中世城館(2)

中世研究プロジェクトチーム

はじめに

本プロジェクトでは前回から「神奈川の中世城館」と題し、県内城館の集成を行っている。今回は前回集成を見送っていた小田原市の中でも後北条氏の本城である小田原城を取り上げることとした。

小田原市では2008年に刊行された『小田原城下 本町遺跡第Ⅲ地点』において、小田原城及びその城下の調査について詳細な集成作業を行っており、300ヶ所を超える調査地点が網羅されている。そのため、本プロジェクトにおいて新たに調査地点を集成することは適さないと判断し、昨年度は小田原市内の中世城館についてその概要を示すに留めた。

県内には後北条氏との関連を指摘する中世城館は多く、堀底に障壁を有する堀（障子堀）の検出例も多い。他方、近年小田原城は発掘調査が進み、堀の規模や形態などが分かりつつある。また、上記した本町遺跡第Ⅲ地点などではこれまで知られていなかった地点に堀が発見されるなど、研究上重要な調査も増えてきている。そのため、発掘調査成果から堀構造の検討を行うことは、中世城館を理解する上で重要といえる。

そこで今回は、小田原城の堀について規模・形態・年代などの基礎集成を行い、今後の考察へと繋げることを目的とした。

例 言

1. 本集成は小田原城及びその城下で発掘調査によって検出された堀を対象としている。集成にあたっては、2009年度までに発掘調査報告書が刊行されている地点を対象とし、一部試掘や立会調査の成果なども含めている。なお、本年度調査において確認された堀については集成対象から外している（ただし平成21年遺跡発表会発表要旨に記載された調査報告については集成に加えている）。
2. 集成の対象は、後北条期の堀を基本としているが、近世の拡張・改修などにより規模・形態などが変化しているものもある。そのため、集成では拡張・改修後のデータを使用しているものもある。
3. 集成表の項目は以下の通りである。
 - (1) 遺跡名：遺跡名は、原則的に発掘調査報告書に使用されている遺跡名を使用し、一部現行の神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳に基づき、文献とは異なる遺跡名を使用しているものもある。
 - (2) 所在地：発掘調査が行われた住所及び地番を示しており、原則報告書抄録に記載されている所在地を使用した。
 - (3) 堀上幅・堀底幅・深さ：単位はmを使用し、堀底まで掘削が及んでいないなど全体の大きさが判明していない場合は（ ）で表している。
 - (4) 形態：薬研堀・箱堀などに区分している。
 - (5) 傾斜角：堀の傾斜を示し、途中で角度が変化する場合は〇～〇度と表記した。
 - (6) 土塁・土橋：調査での痕跡も含め確認されたものには〇、未確認である場合は×で表現した。

(7) 堀底形状：堀底に見られる構造で井上哲郎（財団法人千葉県文化財センター 2000）の分類を新たに 1・2類に区分し、随時小区分を設定した。区分については以下のとおりである。また、堀底まで掘削が及んでいないものについては－を表記している。

第1類：障壁（堀障子）を有するもの。

A類：堀の方向に沿って平行に障壁（堀障子）が作られているもの。

B類：障壁（堀障子）が堀の方向に直行し、単独ないし1列で連続するもの。

C類：障壁（堀障子）が堀の方向に直行し、2列以上連続するもの。

第2類：堅穴（落とし穴）を有するもの

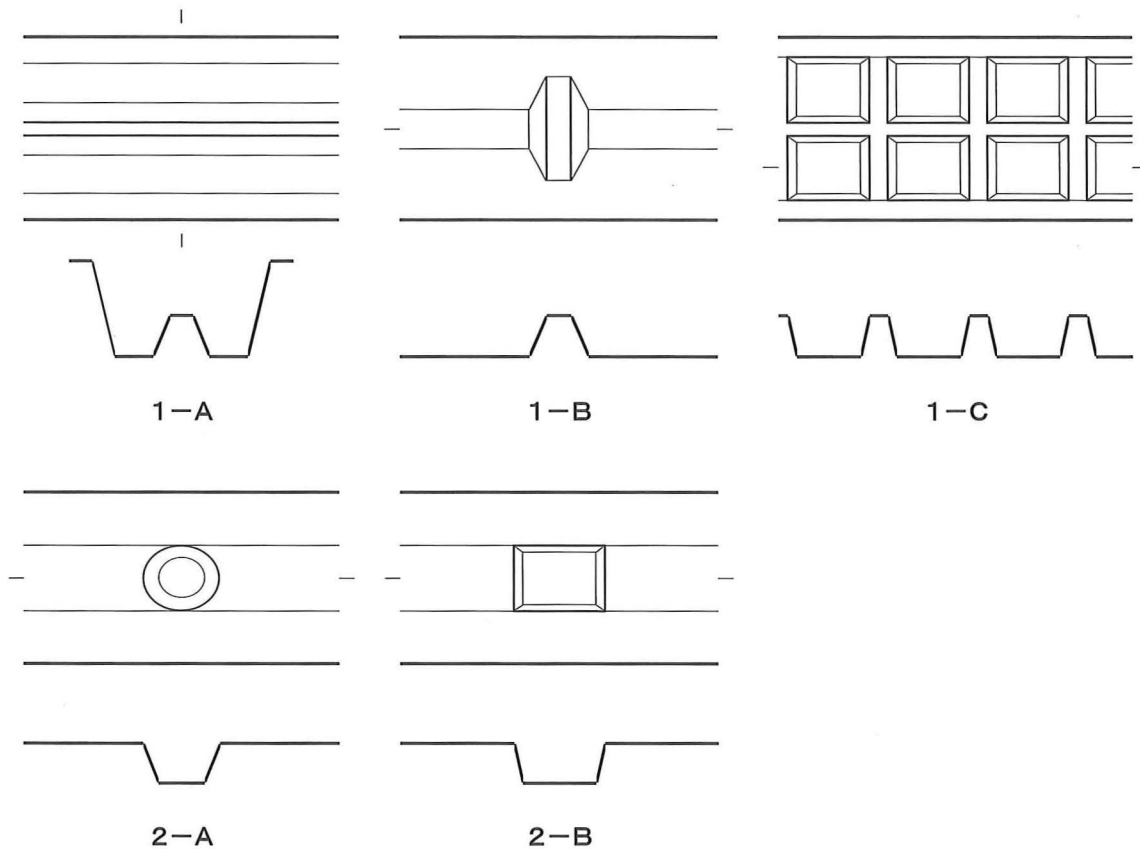
A類：平面形が円形を呈する。

B類：平面形が方形を呈する。

(8) 遺物年代：主に堀から出土した遺物を記述し、年代を記した。

(9) 備考：検出された堀について検出状況等特記事項を記した。

(10) 文献番号：末尾の文献一覧に対応する。



堀底形状分類模式図

No.	遺跡名	所在地	堀上幅×堀底幅×深さ (m)	形態	傾斜角	土塁	土橋	堀底 形状	出土遺物	遺物年代	備考	文献 番号
1	本丸・二の丸 (I次)	城内900番3号	—	—	—	×	×	—	詳細不明		トレンチ調査のため堀の規模の詳細不明	1
2	本丸・二の丸 (II次)	城内900番3号	—	—	—	×	×	—	瓦		トレンチ調査のため堀の規模の詳細不明	2
3	焔硝曲輪	栄町1丁目707番26号他	—	—	60～70 度	×	×	—	常滑甕、瓦質土器	15世紀末～ 16世紀	法面片側のみ検出、 詳細不明	13
4	住吉堀	城内900番6号他	3.4～4.8×2.6～3.8× 1.0～1.4	箱堀	60～70 度	×	×	1-B 1-C	青磁、中国染付、 瀬戸・美濃灰釉碗・ 天目碗、かわらけ、 土鍋、漆器碗、鉄 砲玉、金属製品、 銭、木製品	16世紀～ 17世紀		16 ・ 17
5	小田原城住吉堀	城内900番6	—×—×—	箱堀	—	○	○ (稲葉)	1-C	白磁、青磁、中国 染付皿、瀬戸・美 濃碗・天目碗・皿・ 播鉢、かわらけ、 瓦、銭、金属製品、 木製品、近世陶磁 器	16C～近世	二の丸中堀	21
6	小田原城跡 二の丸御殿跡	城内900番6	—×—×(2.2)	—	40度 前後	×	×	—	瓦		堀底まで調査せず 本丸東堀	34
7	二の丸東堀 第IV地点	城内54番1号外	—×—×—	—	—	×	×	—	陶磁器、瓦	19世紀	堀覆土のみの確認	53
8	三の丸北堀 第I地点	栄町1丁目10番4号	5.0×—×(3.0)	箱堀	45～70 度	×	×	—	肥前磁器、瀬戸・ 美濃陶器	17世紀～ 20世紀初頭		27
9	三の丸北堀 第II地点	栄町1丁目10番1号	(7.0以上)×(2.0以上) ×4.6	箱堀	46～50 度	×	×	—	なし			27

No.	遺跡名	所在地	堀上幅×堀底幅×深さ (m)	形態	傾斜角	土塁	土橋	堀底 形状	出土遺物	遺物年代	備考	文献 番号
10	三の丸南堀 第Ⅲ地点	南町1丁目1番35号地内	11.0以上×-×3.2以上	箱堀	30度	×	×	-	中国染付、瀬戸・美濃灰釉皿・志野皿・天目碗・笠原鉢・播鉢、唐津皿、かわらけ、五輪塔、銭、瓦	16世紀後半～17世紀		24
11	小田原城三の丸 南堀第Ⅳ地点	本町一丁目1番3	-×-×-	-	-	○	×	-	中国染付碗、瀬戸・美濃、常滑、かわらけ、近世陶磁器	中世～近代	堀底のみ確認 三の丸南堀	45
12	小田原城三の丸 南堀第Ⅴ地点	本町一丁目1番3	-×-×-	箱堀	約35度	○	×	-	中・近世陶磁器	中近世	三の丸南堀	45
13	小田原城三の丸 南堀第Ⅴ地点	本町一丁目1番3	-×-×(2.0)	-	-	×	×	-	なし		堀状遺構 三の丸南堀より以前	45
14	小田原城三の丸 南堀第Ⅵ地点	本町一丁目448番6	約18.0×-×(3.8)	箱堀?	約50度	○	×	-	中・近世陶磁器	中近世	三の丸南堀	45
15	小田原城三の丸 東堀第Ⅱ地点	本町一丁目9番25	(14.0)×(8.0)×5.0	箱堀	50度 前後	×	×	1-B	白磁皿、中国染付碗・皿、瀬戸・美濃天目碗・皿・播鉢、常滑甕、かわらけ、瓦、漆器、曲物、下駄、近世陶磁器	15C後半～ 近代	前期大久保期の野 面積石垣	23
16	小田原城三の丸 東堀第Ⅲ地点	栄町一丁目13番18	(15.0)×-×-	箱堀	35～60 度	×	×	1-C	漳州窯青花皿、瀬戸・美濃播鉢、近世・近代陶磁器	16C後半～ 近代	三の丸東堀 障子は前期大久保 寛文期改修	49
17	小田原城三の丸 東堀第Ⅳ地点	本町一丁目92番1	約18×3.0前後×3.9	箱堀	25度	○	×	1-B	近世・近代陶磁器 など	近世・近代	三の丸東堀寛文期 改修	46
18	小田原城三の丸 東堀第Ⅴ地点	本町一丁目30番7	-×-×-	-	-	○	×	-	近世・近代陶磁器 など	近世・近代	三の丸東堀寛文期 改修	46

No.	遺跡名	所在地	堀上幅×堀底幅×深さ (m)	形態	傾斜角	土塁	土橋	堀底 形状	出土遺物	遺物年代	備考	文献 番号
19	小田原城三の丸東堀第VI地点	本町一丁目29番3	(15.0) × 1.5 ~ 2.5 × (3.8)	箱堀	20 ~ 30度	○?	×	1-B	中国染付碗、瀬戸・美濃皿・播鉢・瓶、瓦、木製品、近世・近代陶磁器	16C 中葉 ~ 近代	三の丸東堀前期大久保	39
20	小田原城三の丸東堀第VI地点	本町一丁目29番3	(15.0) × 5.5 ~ 5.8 × (2.6)	箱堀	約15度	○?	×	—	中国染付碗、瀬戸・美濃皿・播鉢・瓶、瓦、木製品、近世・近代陶磁器	16C 中葉 ~ 近代	三の丸東堀稲葉氏改修	39
21	小田原城三の丸東堀第VII地点	本町一丁目28番16外1筆	(4.4) × — × (2.25)	箱堀	32度	○	×	—	近世・近代陶磁器	近世・近代	三の丸東堀寛文期改修	47
22	新堀第IV地点	城山4丁目250番13号	(8.0) × (7.0) × (1.0)	—	60度	×	×	—	なし			14
23	三の丸新堀第VI地点	南町1丁目130番1号、140番15号	南北堀 (8.5) × 2.9 × 4.9 ~ 5.3	箱堀	70度	×	×	1-B	瀬戸・美濃系陶器、鉄軸播鉢、肥前系磁器碗、かわらけ、銭	16世紀後半、18 ~ 19世紀代	三の丸新堀	49
			東西堀 4.8 ~ 5.1 × 1.2 × 2.9	箱堀	71度	×	×	1-B				
24	新堀第VII地点	城山四丁目250番71号	(7.5) × (6.5) × 1.3 ~ 1.6	箱堀	55 ~ 59度	×	×	1-B	なし		堀障子	66
25	新堀第VIII地点	城山四丁目250番72号	— × — × —	—	—	×	×	—	なし		堀覆土のみの確認	61
26	小田原城三の丸藩校集成館跡第III地点	本町一丁目853番6	13.0 × 3.0 ~ 3.5 × 3.94 ~ 4.76	箱堀	38 ~ 40度	×	×	1-B C	白磁、青磁、中国染付碗・皿、瀬戸・美濃天目碗・皿・播鉢、常滑甕、かわらけ、瓦、近世陶磁器	16C ~ 近世	箱根口3号堀	44
27	小田原城三の丸藩校集成館跡第V地点	本町一丁目12番1先	(15.0) × — × —	—	—	×	×	—	中国染付碗・皿、瀬戸・美濃碗・播鉢、瓦	16C 後半 ~ 17世紀初	堀底まで調査せず箱根口3号堀	30
28	三の丸鍛冶曲輪北堀	城山三丁目371番37号外	— × — × —	—	—	×	×	—	なし		堀覆土のみの確認	50
29	小田原城三の丸鍛冶曲輪北堀第III地点	城山三丁目371番48・49・50	— × — × (14.0)	箱堀?	25 ~ 70度	鍛冶曲輪土塁?	×	1-B	中国染付碗、瀬戸・美濃天目碗・碗・皿、常滑甕、瓦質羽釜、かわらけ、近世陶磁器	15C ~ 近世	鍛冶曲輪北堀堅堀	32

No.	遺跡名	所在地	堀上幅×堀底幅×深さ (m)	形態	傾斜角	土塁	土橋	堀底 形状	出土遺物	遺物年代	備考	文献 番号
30	鍛冶曲輪東堀 第Ⅰ地点	城山三丁目789番21号	-×-×-	-	-	×	×	-	なし		堀覆土のみの確認	66
31	元蔵堀	栄町1丁目地内	-	-	-	○	×	-	なし		トレンチ調査のため堀の規模の詳細不明	8
32	元蔵跡第Ⅰ地点	栄町1丁目1番39号	-	-	-	×	×	-	志野皿、漆器椀	17世紀	コーナー部分の検出、詳細不明	19
33	元蔵跡第Ⅱ地点	栄町1丁目637番4号	堀の存在のみ確認、 幅4.0以上	-	-	×	×	-	瀬戸・美濃陶器	18世紀後半		49
34	小田原城三の丸 元蔵堀第Ⅲ地点	城山一丁目707番1外4筆	(11.3)×-×(1.2)	-	53度	×	×	-	なし		堀底まで調査せず 三の丸元蔵堀	30
35	小田原城三の丸 元蔵堀第Ⅲ地点	城山一丁目697番1ほか	(11.5)×(7.0)×(5.0) 土塁を含める高さは15m か	箱堀	55～65 度	×	×	-	近世・近代陶磁器	近世・近代	元蔵堀	31
36	小田原城三の丸 元蔵堀第Ⅳ地点	城山一丁目697番1ほか	6.0×1.8×4.0	箱堀	45～65 度	×	×	-	青磁、中国染付、 かわらけ	15C後半～ 近世	元蔵堀、本来は堀 底に障子が存在か	31
37	小田原城三の丸 元蔵堀 第Ⅴ・Ⅵ地点	栄町一丁目8番115外	(12.0)×5.0×約5.0	箱堀	40度 前後	×	×	1-C	なし		三の丸元蔵堀	52
38	元蔵堀第Ⅶ地点	城山一丁目705番1・66号	4.2～8.3×1.1～2.7× 2.7～4.2	箱堀	40～55 度	×	×	1-B	瀬戸・美濃天目茶 碗、灰釉皿、かわ らけ	16～17世 紀		58
39	山本内蔵邸跡 第Ⅳ地点	本町1丁目91番16号	4.0×-×3.0	箱堀	-	×	×	1-A	白磁、中国染付、 瀬戸灰釉、天目碗、 かわらけ	16世紀末	障子堀	10
40	山本内蔵邸跡 第Ⅴ地点	本町1丁目1番30号	4.8×0.5×3.3	薬研堀	65～70 度	×	×	-	瀬戸・美濃鉄釉播 鉢、木製品、金属 製品、石製品			12
41	山本内蔵邸跡 第Ⅷ地点	本町1丁目91番17号他	4.0×0.2～0.5×3.0～ 3.6	薬研堀	55～60 度	×	×	1-B	白磁、青磁、瀬戸・ 美濃陶器、常滑陶 器、かわらけ、漆 器椀	16世紀中葉 ～17世紀後 葉		59

No.	遺跡名	所在地	堀上幅×堀底幅×深さ (m)	形態	傾斜角	土塁	土橋	堀底 形状	出土遺物	遺物年代	備考	文献 番号
42	山本内蔵邸跡第 X I 地点	栄町一丁目30番22号	- × - × -	-	-	×	×	-	なし			66
43	杉浦平太夫邸跡 第 I 地点	本町1丁目7番9号	- × - × (1.8)	-	60度	×	×	-	中国染付、瀬戸・ 美濃陶磁器、備前 甕、漆器椀、木製 品	16世紀～ 近世		9
44	香沼屋敷跡 第 II 地点	城山3丁目377番11号他	11.0×5.0×5.2	箱堀	60～65 度	×	×	1-B	なし			3
45	箱根口跡 第 II 地点	南町1丁目地内	1号堀 法面片側のみ検 出、深さ2.5以上	箱堀	30～60 度	×	×	-	青磁、白磁、中国 染付、瀬戸・美濃 灰釉皿・天目碗・ 播鉢・瓶、常滑片 口・甕、備前播鉢、 かわらけ、羽釜、 漆器椀、木製品、 銭	15世紀～ 16世紀		15
			2号堀 (3.2～3.8) × (1.3～2.4) × (1.0)	箱堀	50～55 度	×	×	1-B	青磁、白磁・中国 染付、初山鉄釉碗、 瀬戸・美濃灰釉皿・ 播鉢、常滑瓶、か わらけ、漆器椀、 陣笠、木製品、金 属製品、瓦	16世紀		
			3号堀 14.0×3.0×4.9	箱堀	40～45 度	×	×	-	瀬戸・美濃天目碗、 志野皿、木製品、 金属製品、銭	16世紀～17 世紀		
46	箱根口跡 第 III 地点	本町1丁目	法面片側のみ検出、 深さ1.8以上	-	60～65 度	×	×	-	中国染付	16世紀中頃		17
47	小田原城三の丸 箱根口 第 IV 地点	南町一丁目91番13	(8.0) × - × (2.4)	-	-	×	×	-	常滑		三の丸南堀、寛文 12年以前の堀	46
48	新道遺跡	本町1丁目138番4号	-	-	-	×	×	-	不明		トレンチ調査のため堀の規模の詳細不明	20

No.	遺跡名	所在地	堀上幅×堀底幅×深さ (m)	形態	傾斜角	土塁	土橋	堀底 形状	出土遺物	遺物年代	備考	文献 番号
49	御長屋跡 第Ⅰ地点	本町1丁目155番1号	1号堀 (4.1以上)×1.0 ×2.9	箱堀	60～75 度	×	×	—	古瀬戸灰釉緑釉 皿、かわらけ、銭	15世紀後半		28
			2号堀 (4.9以上)×— ×(3.9以上)	箱堀	45～70 度	×	×	—	中国染付、瀬戸・ 美濃緑釉皿・志野 菊皿・長石釉皿・ 天目碗・壺、丹波 播鉢、かわらけ、 瓦、石製品、鉄製 品、銭	15世紀後半 ～ 17世紀前半		
50	小田原城三の丸 御長屋跡 第Ⅱ地点	本町一丁目154番1ほか	—×1.3×(2.4)	U字 (箱)	40～65 度	×	×	—	なし		1号堀、16世紀前 半以前	41
51	小田原城三の丸 御長屋跡 第Ⅱ地点	本町一丁目154番1ほか	(6.2)×—×(1.8)	—	18～75 度	×	×	—	瀬戸・美濃天目碗、 瓦、五輪塔、近世 陶磁器	16C末～近 世	2号堀、17世紀中 葉以前	41
52	弁財天跡 第Ⅵ地点	柴町一丁目678番	—×—×—	—	—	×	×	—	なし			66
53	三の丸外堀	南町1丁目5番18	—	—	—	×	×	—	なし			5
		柴町1丁目687番26	—	—	—	○	×	—	なし			
		城山4丁目5番1	約16.0×約10.0×約5.7	箱堀	30度	×	×	1-B	なし			
54	八幡山堀切	城山3丁目26番1号外	1号堀 (1.8)×—×(2.4)	—	40度	×	×	—	白磁菊皿、明染付 皿、瀬戸・美濃卸 皿、美濃播鉢、か わらけ	16世紀代		4
			2号堀 (2.0)×—×(2.4)	—	30～40 度	×	×	—				
55	八幡山古郭	城山三丁目	—×—×—	箱堀	—	×	×	—	陶磁器		西曲輪西堀?、堀 底まで調査せず	54・55
56	小田原城跡八幡 山遺構群 (第2次調査)	城山三丁目26番1	13.0×4.5×6.0	箱堀	50～60 度	×	×	1-B	青磁皿、瀬戸・美 濃天目茶碗、信楽 水指、かわらけ	15～17世 紀前半	南入堀	54

No.	遺跡名	所在地	堀上幅×堀底幅×深さ (m)	形態	傾斜角	土塁	土橋	堀底 形状	出土遺物	遺物年代	備考	文献 番号
57	小田原城跡八幡山遺構群 (第3次調査)	城山三丁目26番1	(2.7) × - × -	-	-	×	×	-	中国染付皿、瀬戸美濃播鉢、かわらけ	16世紀	西曲輪西堀の西肩のみ	63
58	小田原城八幡山枝堀	城山三丁目718番21	- × - × (2.4)	-	-	×	×	-	近代陶磁器		堀底まで調査せず八幡山枝堀	35
59	八幡山古郭字八幡堀枝堀	城山3丁目16番10	4.6×2.5×2.4	箱堀	20～30度	○	○	1-B	なし		障子堀	5
60	八幡山古郭字八幡堀枝堀 第Ⅲ地点	城山三丁目803番	- × - × -	-	-	×	×	-	なし		八幡枝堀	60
61	小田原城八幡山古郭本曲輪 第Ⅲ地点	城山三丁目803番3	1.5～1.8×0.25～0.6 ×0.8～1.2	箱堀 薬研堀	30～65度	×	×	1-B (3-B)	中国染付碗、瀬戸・美濃播鉢、かわらけ、近世陶磁器	16C～近世	箱薬研?	25
62	小田原城八幡山古郭南曲輪東堀 第Ⅱ地点	城山三丁目856番21	(3.1) × - × (3.2)	-	51度	×	×	-	漳州窯青花碗、瓦、近世陶磁器	16C末～近代	堀底まで調査せず法面最上部から柵と推定されるピット群	67
63	小田原城八幡山古郭南曲輪東堀 第Ⅲ地点	城山三丁目853番285	(10.2) × - × (1.9)	-	20～68度	×	×	-	なし		堀底まで調査せず	67
64	小田原城八幡山古郭南曲輪東堀 第Ⅳ地点	城山三丁目856番33	- × - (1.1)	-	60～65度	×	×	-	中国染付、かわらけ	戦国時代	八幡山南曲輪東堀	36
65	北条幻庵居館址	久野字森上1592	0.6×-×0.64	箱堀	83度	○	×	1-B	なし			6
66	大外郭	城山1-227-34番地	-	-	50度	×	×	-	なし		空堀法面のみ検出	6
67	竜洞院裏 第Ⅰ地点	荻窪字柚ノ木169-2	6.0×3.2×2.2	箱堀	50～70度	×	×	1-B	五輪塔			7
68	小峯曲輪西堀	栄町1丁目707番26号	-	-	60～70度	×	×	-	中国染付、古瀬戸灰釉小皿、瀬戸灰釉皿・播鉢、常滑甕、天目碗、かわらけ、五輪塔	16世紀	法面片側のみ検出、詳細不明	11

No.	遺跡名	所在地	堀上幅×堀底幅×深さ (m)	形態	傾斜角	土塁	土橋	堀底 形状	出土遺物	遺物年代	備考	文献 番号
69	小田原城小峯御 鐘ノ台大堀切 東堀第Ⅰ地点	城山3丁目1050番1号他	10.0以上×4.6×3.2以上	箱堀	45～50 度	○	○	1-B	中国染付、瀬戸・ 美濃播鉢、常滑瓶	16世紀後半		26
70	小田原城小峯御 鐘ノ台大堀切 西堀第Ⅰ地点	十字4丁目1100番25号他	9.8×-×1.4以上	箱堀	40度	○	×	-	なし			26
71	小田原城小峯御 鐘ノ台大堀切 中堀第Ⅰ地点	十字4丁目1045番3号他	-	箱堀	-	×	×	-	瀬戸・美濃皿、志 野皿、唐津	17世紀初頭	コーナー部分の検 出、詳細不明	26
72	二の丸総構	城山4丁目10番16	(8.0)×-×(5.9)	箱堀	40～50 度	×	×	-	なし			5
		城内1番36号	-	箱堀	-	×	×	-	なし			
73	小田原城総構 鉄砲矢場 第Ⅰ地点	板橋字堂屋敷730番54 十字四丁目1016番193	(5.4)×-×(2.0)	箱堀	45～50 度	○	×	-	瀬戸・美濃灰釉皿、 常滑甕、かわらけ	16世紀	堀底まで調査せず	60・65
74	小田原城総構 鉄砲矢場 第Ⅱ地点	十字四丁目1016番5号 板橋字堂屋敷730番24号	(8.8)×-×(1.3)	-	39度	○	○	-	なし			70
75	伝肇寺西 第Ⅰ地点	板橋字堂屋敷730番35号 十字四丁目1016番9号	16.5×6.5×10.0	箱堀	57～63 度	○	×	1-B	青磁菊皿、中国染 付皿、染付碗、瀬 戸・美濃灰釉皿、 五輪塔、宝篋印塔	16～17世 紀	堀障子	53
76	小田原城総構遺 跡標柱西 第Ⅱ地点	城山一丁目31番33	-×-×(1.7)	-	40～45 度	×	×	-	青磁、瀬戸・美濃 天目碗、瓦質器、 かわらけ	14C～16C 中葉	堀状遺構犬走り状 テラス	36
77	上二重外張 第Ⅰ地点	十次丁目1031番3号	5.2×2.05×4.1	箱堀	61～67 度	×	×	1-B	なし			43
78	上二重外張 第Ⅱ地点	城山4丁目995番5号	法面片側のみ検出、 深さ3.0以上	-	50度	×	×	-	なし			43
79	小田原城総構上 二重外張 第Ⅱ地点	十字四丁目1032番	-×-×(1.6)	-	40度	×	×	-	なし		総構の堀	43

No.	遺跡名	所在地	堀上幅×堀底幅×深さ (m)	形態	傾斜角	土塁	土橋	堀底 形状	出土遺物	遺物年代	備考	文献 番号
80	小田原城総構上 二重外張 第Ⅱ地点	城山四丁目999番5外1筆	- × - × (3.0)	-	50度	×	×	-	なし		堀底まで調査せず 総構	43
81	小田原城総構城 下張出	荻窪487番1	(3.0) × - × (2.2)	-	50～55 度	×	×	-	なし		総構(城下張出) の堀	32
82	小田原城総構一 枚畠南第Ⅰ地点	板橋字香林寺山894番17	(7.5) × - × (4.2)	-	36度	×	×	-	なし		堀底まで調査せず 総構の堀(1号堀)	40
83	小田原城総構一 枚畠南第Ⅰ地点	板橋字香林寺山894番17	7.3×2.35×1.2	浅鉢形	-	×	×	-	なし		2 a号堀	40
84	小田原城総構一 枚畠南第Ⅰ地点	板橋字香林寺山894番17	(4.55) × (2.35) × 1.4	浅鉢形	-	×	×	-	なし		2 b号堀	40
85	谷津山神遺跡 第Ⅱ地点	谷津297外	(9.0) × - × (1.2)	-	50～60 度	×	×	-	かわらけ、瀬戸・ 美濃皿	16C前半	堀底まで調査せず 総構の堀	30
86	関東学院大学高 地内遺跡A地区 (立野遺跡)	荻窪字立野	竪堀 2.5～3.5×1.8～ 2.5×0.95	箱堀	70～80 度	×	×	-	白磁碗、中国染付、 瀬戸・美濃皿・播 鉢、かわらけ、火 縄銃弾丸	15世紀後半 ～ 16世紀後半		29
			堀切 1.8～2.0×0.5～ 1.5×0.6～0.8	箱堀	50～65 度	×	×	-	火縄銃弾丸			
			C地点堀 3.0～5.0× 1.1～2.1×1.1～1.3	箱堀	40～80 度	×	×	-	なし			
87	一枚畠南 第Ⅰ地点	板橋字香林寺山894番7号	1号堀 法面片側のみ検 出、深さ4.2以上	-	35度	×	×	-	なし			43
			2a堀 7.3×2.4×1.4	箱堀	20～30 度	×	×	-	なし			
			2b堀 4.55以上×3.6以 上×1.4以上	箱堀	20～30 度	×	×	-	なし			
88	幸田口跡 第Ⅰ地点	栄町1丁目661番1号	3.0～3.1×0.4～0.5× 2.95	薬研堀	70～72 度	×	×	-	中国染付	16世紀後半		49
89	中宿町遺跡 第Ⅱ地点	本町一丁目47番	3.0×(1.8)×2.0	箱堀	65度 前後	×	×	-	瀬戸・美濃播鉢・ 皿・壺、常滑甕、 かわらけ、木製品	15C後半～ 17C	規模等から堀の可 能性も指摘(第5 号溝状遺構)	22

No.	遺跡名	所在地	堀上幅×堀底幅×深さ (m)	形態	傾斜角	土塁	土橋	堀底 形状	出土遺物	遺物年代	備考	文献 番号
90	伊羅窪遺跡	城山一丁目186番1外	(3.0～4.0)×-×-	箱堀	-	×	×	-	中国染付碗・皿、 かわらけ	16C	居館の堀堀底は障 子堀	35
91	伊羅窪遺跡	城山一丁目10番	1.5×-×1.5 推定(3.0～4.0)×-× (2.5～3.0)	薬研堀	約55度	×	×	1-B	白磁皿、中国染付 碗・天目碗、瀬戸・ 美濃天目碗・皿、 かわらけ、近世陶 磁器	16C前半～ 近世	居館の堀堀底は障 子堀	42
92	小田原城下瓦長 屋跡第Ⅰ地点	南町一丁目2番9	2.5×-×1.8	箱堀	65度 前後	×	×	-	青磁、瀬戸・美濃 播鉢、かわらけ、 木製品	15C中～16 世紀後半	堀の可能性あり	38
93	法雲寺旧境内遺 跡第Ⅱ地点	城山三丁目378番1号	-×-×-	-	-	×	×	-	中国染付皿、志戸 呂碗、志野皿、か わらけ	16～17世 紀初	堀覆土及び遺構確 認面の確認	69
94	山角町遺跡 第Ⅳ地点	南町四丁目465番1号外4 筆	(2.8)×1.0×2.2	箱堀	40～60 度	×	×	-	白磁皿、中国染付 皿、瀬戸・美濃 皿、志野皿、かわ らけ、漆皿、下駄	15末～17世 紀		62
95	本町遺跡 第Ⅲ地点	本町三丁目286番1号	(7.0)×(6.1)×2.4	箱堀	45～65 度	×	×	1-B	青磁碗、白磁皿、 中国染付碗・皿、 瀬戸・美濃天目茶 碗、灰釉皿、播鉢、 広口有耳壺、かわ らけ、内耳鍋、湯 釜	16世紀初～ 中頃	堀障子	68
96	小田原市 No.62遺跡	城山四丁目8番6号	-×-×-	-	-	×	×	-	なし		堀覆土のみの確認	66
97	愛宕山遺跡 第Ⅱ地点	城山一丁目450番イ外	-×-×-	-	-	×	×	-	なし			66

- 1 奥田直栄 1972『第一小田原城跡発掘調査について』小田原市教育委員会
- 2 奥田直栄 1974『第二小田原城跡発掘調査について』小田原市教育委員会
- 3 金子皓彦 1980『小田原城香沼屋敷』小田原城香沼屋敷発掘調査団
- 4 河野喜映 1984『小田原城跡八幡山遺構群』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告5 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 5 杉山博久 1985『埋もれた小田原城—その中世遺構を掘る—』小田原考古学研究会
- 6 塚田順正 1986『小田原城大外郭の調査』小田原市文化財調査報告第21集 小田原市教育委員会
- 7 諏訪間順 1988『小田原城三の丸・大外郭』小田原市文化財調査報告第23集 小田原市教育委員会
- 8 杉山幾一・諏訪間順 1989『小田原城三の丸土塁』小田原市文化財調査報告第28集 小田原市教育委員会
- 9 金子皓彦 1990『小田原城三の丸跡の発掘調査』小田原城三の丸遺跡発掘調査団
- 10 小田原市 1990『小田原城とその城下』
- 11 川上久夫・降矢順子 1990『小田原城二の丸西遺構』小田原城二の丸西遺跡調査団
- 12 諏訪間順・近藤英夫 1991『小田原城三の丸山本内蔵邸跡第V・VI地点』小田原市文化財調査報告第34集 小田原市教育委員会
- 13 塚田明治 1991『小田原城焰硝曲輪』小田原市文化財調査報告第33集 小田原市教育委員会
- 14 服部実喜 1991『神奈川県遺跡範囲確認調査報告』1 神奈川県教育委員会
- 15 諏訪間順 1992『小田原城三の丸箱根口跡』小田原市文化財調査報告第37集 小田原市教育委員会
- 16 塚田順正・諏訪間順 1993『史跡小田原城二の丸中堀Ⅰ』小田原市文化財調査報告第45集 小田原市教育委員会
- 17 諏訪間順 1993『小田原城箱根口門跡』小田原市文化財調査報告第40集 小田原市教育委員会
- 18 塚田順正・大島慎一 1994『史跡小田原城二の丸中堀Ⅱ』小田原市文化財調査報告第48集 小田原市教育委員会
- 19 諏訪間順 1994『小田原城八幡山古郭本曲輪 三の丸元蔵跡』小田原市文化財調査報告第51集 小田原市教育委員会
- 20 南館則夫 1994『小田原城新道遺跡』小田原市文化財調査報告第53集 小田原市教育委員会
- 21 塚田順正・大島慎一 1994『史跡小田原城跡 二の丸中堀Ⅱ』小田原市文化財調査報告書第48集 小田原市教育委員会
- 22 青木豊・内川隆志 1994『小田原城下 中宿町遺跡第Ⅱ地点』中宿町遺跡発掘調査団
- 23 小林義典 1995『神奈川県小田原市 小田原城三の丸東堀第2地点発掘調査報告書』東京電力株式会社・玉川文化財研究所
- 24 諏訪間順 1995『小田原城三の丸南堀第Ⅲ地点』小田原市文化財調査報告第55集 小田原市教育委員会
- 25 小林義典 1995『小田原城 八幡山古郭本曲輪第Ⅲ地点』玉川文化財研究所
- 26 諏訪間順他 1996『小田原城小峯御鐘ノ台大堀切』小田原市文化財調査報告第60集 小田原市教育委員会
- 27 小林義典 1996『神奈川県小田原市小田原城三の丸北堀第Ⅰ・Ⅱ地点』玉川文化財研究所
- 28 山口剛志 1997『小田原城三の丸御長屋跡第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告第62集 小田原市教育委員会
- 29 小林義典 1997『関東学院大学小田原校地内遺跡—立野遺跡・駒形遺跡発掘調査報告書』関東学院大学用地内遺跡発掘調査団
- 30 諏訪間順・山口剛志 1997『平成6年度小田原市緊急発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第64集 小田原市教育委員会
- 31 小林義典 1997『神奈川県小田原市 三の丸元蔵堀第Ⅲ・Ⅳ地点・加藤直衛邸跡第Ⅰ地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 32 諏訪間順 1998『平成7年度小田原市緊急発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第66集 小田原市教育委員会
- 33 高橋勝広 1998『伊羅窪遺跡発掘調査報告書』小田原市城山1丁目遺跡発掘調査団
- 34 大島慎一 1999『史跡小田原城跡 二の丸御殿跡 試掘調査の概要』小田原市文化財調査報告書第76集 小田原市教育委員会
- 35 諏訪間順 1999『平成8年度小田原市緊急発掘調査報告書(2)』小田原市文化財調査報告書第74集 小田原市教育委員会
- 36 諏訪間順ほか 2000『平成9年度遺跡範囲確認調査』小田原市文化財調査報告書第81集 小田原市教育委員会
- 37 諏訪間順 2000『小田原城三の丸東堀第Ⅳ・Ⅴ地点』小田原市文化財調査報告書第77集 小田原市教育委員会
- 38 諏訪間順 2000『小田原城下 瓦長屋跡第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第78集 小田原市教育委員会
- 39 中村哲也 2000『小田原城三の丸東堀第Ⅵ地点発掘調査報告書』小田原城三の丸東堀発掘調査団
- 40 大島慎一・山口剛志 2001『小田原城総構』小田原市文化財調査報告第89集 小田原市教育委員会
- 41 小林義典 2001『神奈川県小田原市 御組長屋遺跡 第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点発掘調査報告書』都市計画道路小田原早川線改良工事遺跡発掘調査団
- 42 小林義典 2001『小田原城三の丸元蔵堀第Ⅴ・Ⅵ地点』『平成13年度小田原市遺跡調査発表会発表要旨』小田原市教育委員会
- 43 大島慎一・山口剛志 2001『小田原城総構』小田原市文化財調査報告書第89集 小田原市教育委員会
- 44 小林義典 2002『小田原城三の丸 藩校集成館跡第Ⅲ・Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第100集 小田原市教育委員会
- 45 山口剛志・佐々木健策 2002『小田原城三の丸南堀第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ地点』小田原市文化財調査報告書第93集 小田原市教育委員会

- 46 佐々木健策 2002『小田原城三の丸 箱根口第Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第95集 小田原市教育委員会
- 47 山口剛志 2002『小田原城三の丸 東堀第Ⅶ地点』小田原市文化財調査報告書第94集 小田原市教育委員会
- 48 香川達郎 2002『小田原城三の丸 御長屋跡第Ⅱ地点発掘調査報告書』御長屋跡第Ⅱ地点発掘調査団
- 49 小林義典 2003『小田原城三の丸・城下 1 城下日向屋敷跡第Ⅰ地点 三の丸元蔵堀第Ⅱ地点 三の丸元蔵跡第Ⅱ・Ⅲ地点 2 三の丸幸田口第Ⅰ・Ⅳ地点 3 三の丸東堀第Ⅲ地点 4 三の丸大久保雅楽介邸跡第Ⅳ地点 5 三の丸大久保弥六郎邸跡第Ⅱ地点 6 三の丸新堀第Ⅵ地点』小田原市文化財調査報告書第110集 小田原市教育委員会
- 50 佐々木健策 2003『平成12年度試掘調査』小田原市文化財調査報告書第107集 小田原市教育委員会
- 51 小林晴生 2003『小田原城三の丸 元蔵跡第Ⅳ地点—大蓮寺第一雨水幹線工事に伴う埋蔵文化財調査—』小田原市文化財調査報告書第115集 小田原市教育委員会
- 52 山口剛志 2004『平成13年度試掘調査』小田原市文化財調査報告書第117集 小田原市教育委員会
- 53 山口剛志 2004『小田原城総構 伝肇寺西第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第118集 小田原市教育委員会
- 54 大上周三・加藤久美ほか 2004『小田原城跡八幡山遺構群Ⅱ（第2次調査）県立小田原高等学校校舎建替工事に伴う調査』かながわ考古学財団調査報告161
- 55 小田原市教育委員会 2004『平成16年小田原市遺跡調査発表会発表要旨』
- 56 佐々木健策 2005『平成14年度試掘調査（2）』小田原市文化財調査報告書第128集 小田原市教育委員会
- 57 小田原市教育委員会 2005『平成17年小田原市遺跡調査発表会発表要旨』
- 58 吉田浩明 2005『神奈川県小田原市 小田原城三の丸元蔵堀第Ⅶ地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 59 木下正史 2006「小田原城三の丸山本内蔵邸跡第Ⅷ地点」『Archaeo-Clio』第7号 東京学芸大学考古学・文化財科学研究室
- 60 大島慎一ほか 2006『平成15年度試掘調査（1）』小田原市文化財調査報告書第135集 小田原市教育委員会
- 61 小田原市教育委員会 2006『平成18年小田原市遺跡調査発表会発表要旨』
- 62 小山裕之 2006『神奈川県小田原市 山角町遺跡第Ⅳ地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 63 依田亮一ほか 2006『小田原城跡八幡山遺構群Ⅲ（第3次調査）県立小田原高等学校校舎建替工事に伴う調査』かながわ考古学財団調査報告201
- 64 諏訪間順 2007『小田原城跡 鉄砲矢場第Ⅰ地点』小田原市教育委員会
- 65 諏訪間順 2007『小田原城総構 鉄砲矢場第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第144集 小田原市教育委員会
- 66 小田原市教育委員会 2007『平成19年小田原市遺跡調査発表会発表要旨』
- 67 山口剛志 2007『小田原城八幡山古郭 南曲輪東堀第Ⅱ・Ⅲ地点』小田原市文化財調査報告書第138集 小田原市教育委員会
- 68 諏訪間順 2008『小田原城下 本町遺跡第Ⅲ地点』小田原市文化財調査報告書第146集 小田原市教育委員会
- 69 佐々木健策 2008『小田原城下 法雲寺旧境内遺跡第Ⅱ地点』小田原市文化財調査報告書第147集 小田原市教育委員会
- 70 山口剛志 2008『小田原城総構 鉄砲矢場第Ⅱ地点』小田原市文化財調査報告書第148集 小田原市教育委員会

近世民家の集成(7)

近世研究プロジェクトチーム

はじめに

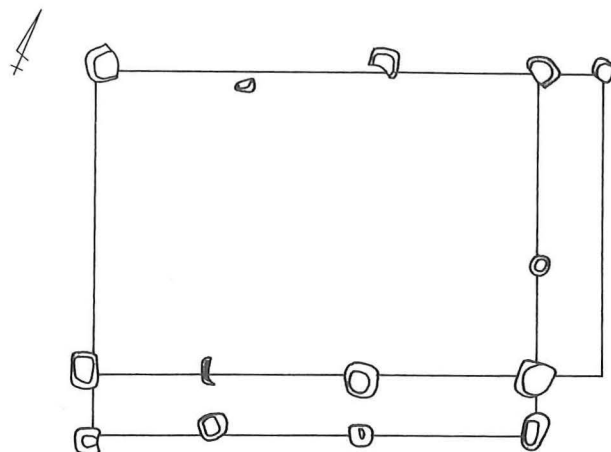
県内の近世民家の集成の第7回目である。本プロジェクトチームでは、県内で調査された近世建物址の集成を行い、これまでに186棟分のデータを蓄積してきた。前回からは宮ヶ瀬遺跡群の集成に入り、上村遺跡、北原(No.9・No.10・No.11北)遺跡、南(No.2)遺跡の集成を行った。今回は、表の屋敷(No.8)遺跡及び馬場(No.6・No.7)遺跡を取り上げ、新たに43棟を追加した。

凡例

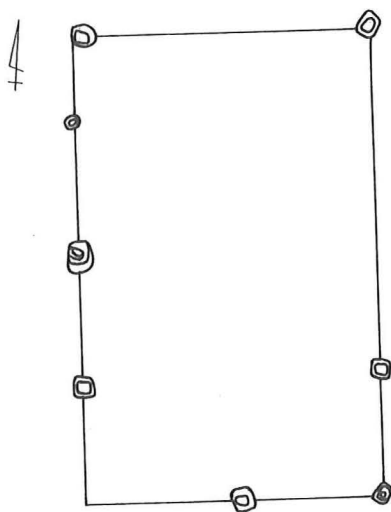
- ・資料Noは近世民家の集成(1)からの続き番号である。
- ・遺構名は報告書の記載に基づく。
- ・建物の縮尺は1/100とし、スケールを省略したが、規模の大きいものについては適宜縮尺を変え、図面ごとにスケールを示した。
- ・梁間、桁行の間数は単に柱穴の数ではなく、柱間距離から概略割り出した1間の梁間及び桁行寸法で換算した数値を示している。
- ・坪数は梁間×桁行の面積を、現行の一坪3.3㎡で除したものである。
- ・建物の機能・構築時期については、報告書の記載に準じているが、母屋と付属建物の別が明確なもの、出土遺物から時期が推定できるものについては記載した。

資料No.	187	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷(No.8)				所在地	清川村宮ヶ瀬			
遺構名	K4号掘立柱建物址		構築場所	造成を伴う段丘の上段面平坦部							
規模	梁間	4.3m	桁行	6.1m	2×3間		面積	26.2㎡	坪数	7.9坪	
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.2m	桁	1.6~2.2m	主軸方位	N-66°-E			
出土遺物					付属施設	南側に2.2×3.8m(1×2間)の張出し					
建物の機能	主屋				構築時期	17世紀中葉以降					
備考											

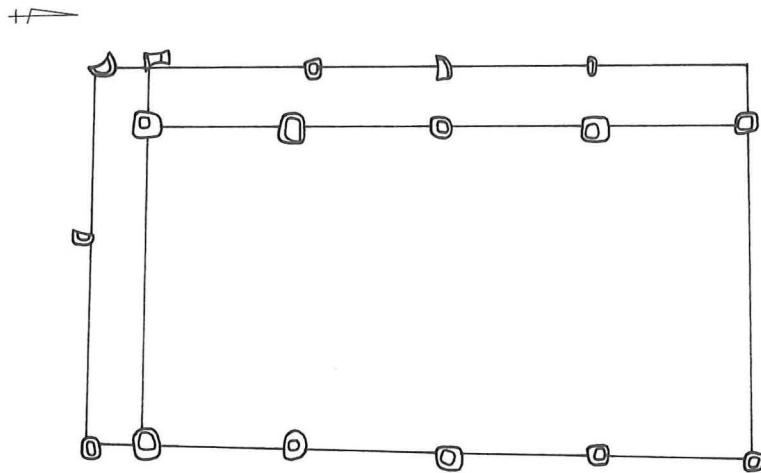
資料No.	188	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷 (No.8)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K5号掘立柱建物址		構築場所	造成を伴う段丘の上段面平坦部					
規模	梁間	4.0m	桁行	5.9m	2 × 3 間	面積	23.6㎡	坪数	7.1坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.5・2.5m	桁	1.8~2.3m	主軸方位	N-65°-E	
出土遺物				付属施設	東側及び南側に庇				
建物の機能	主屋			構築時期	17世紀中葉以降				
備考									



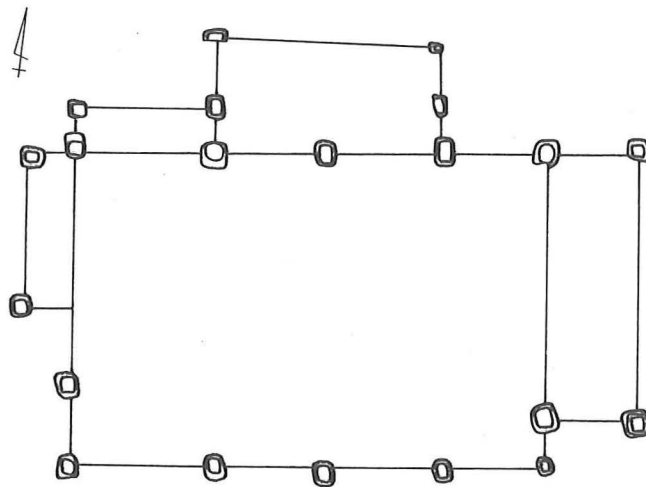
資料No.	189	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷 (No.8)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K9号掘立柱建物址		構築場所	造成を伴う段丘の上段面平坦部					
規模	梁間	3.9m	桁行	6.2m	2 × 4 間	面積	24.2㎡	坪数	7.3坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.8~2.1m	桁	1.1~1.8m	主軸方位	N-7°-W	
出土遺物				付属施設					
建物の機能	主屋			構築時期	17世紀後半以前				
備考									



資料No.	190	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷 (No.8)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K28号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	4.3m	桁行	8.1m	2 × 4 間	面積	34.7㎡	坪数	10.5坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	4.3m	桁	2.0~2.1m	主軸方位	N-2°-E	
出土遺物					付属施設	西側及び南側に庇			
建物の機能	主屋				構築時期				
備考									

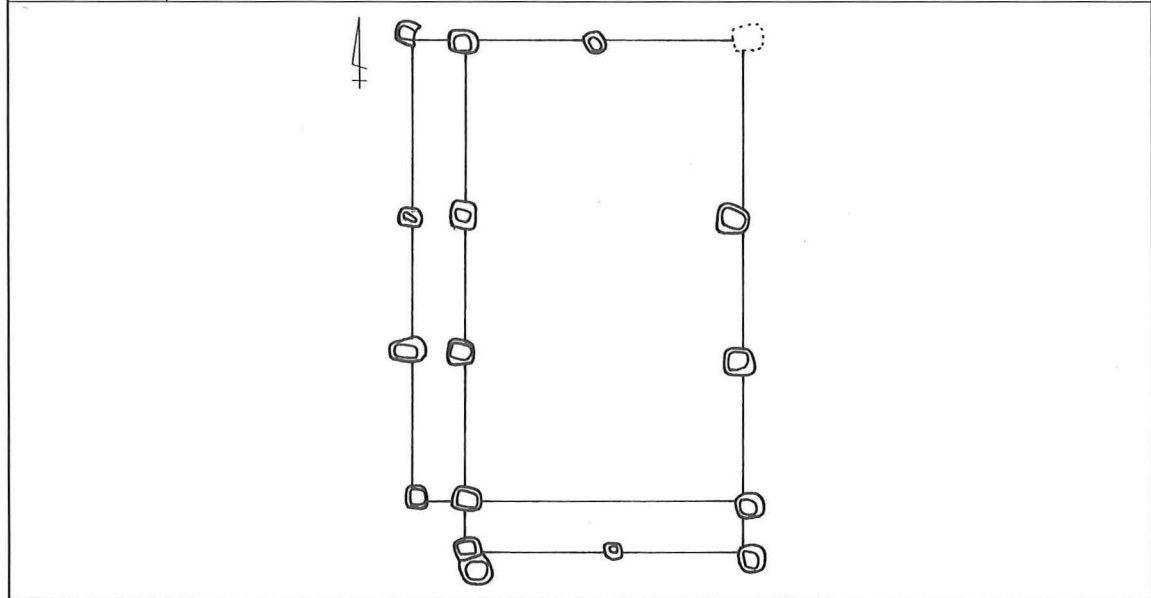


資料No.	190	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷 (No.8)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K29号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	6.2m	桁行	9.5m	3 × 4 間	面積	58.9㎡	坪数	17.8坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.1m	桁	2.4m	主軸方位	N-86°-E	
出土遺物					付属施設	東西及び北側中央・北側西寄りに張出し			
建物の機能	主屋				構築時期	17世紀後半以前			
備考									

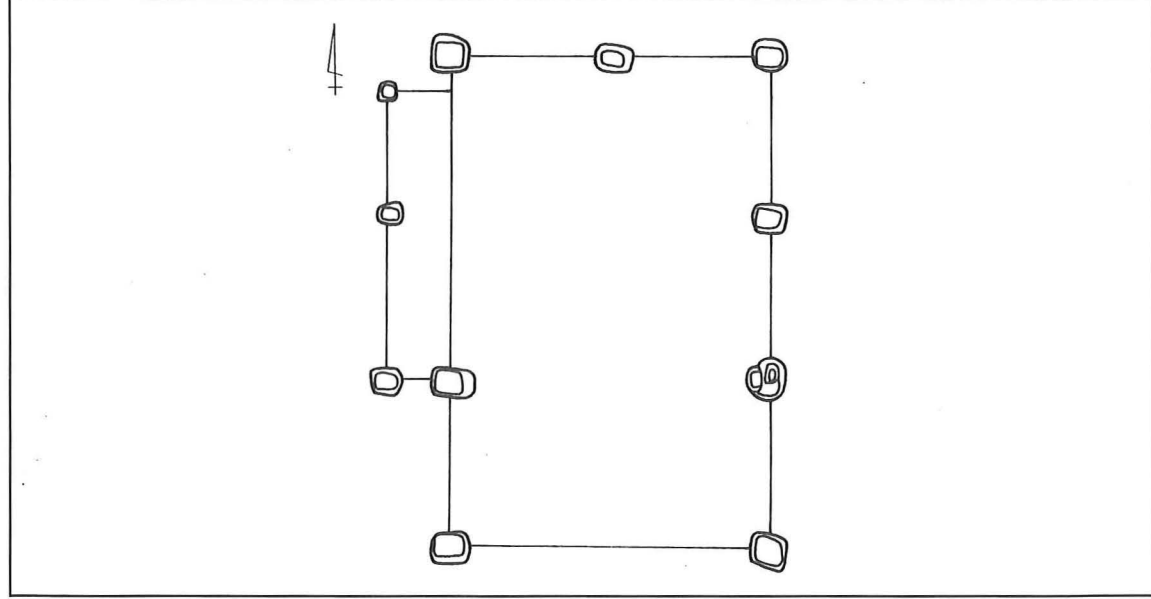


[S : 1/150]

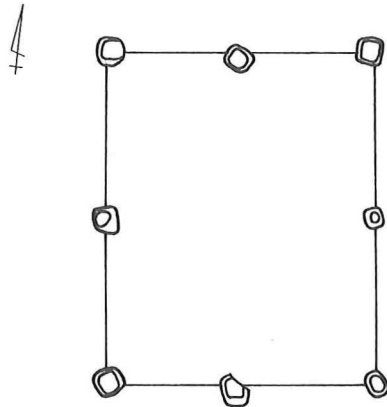
資料No.	192	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷 (No.8)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K30号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	3.7m	桁行	6.0m	2 × 3 間	面積	22.2m ²	坪数	6.7坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.7・2.0m	桁	1.8~2.3m	主軸方位	N-1°-E	
出土遺物				付属施設	西側及び南側に庇				
建物の機能	主屋			構築時期	17世紀後半以前				
備考									



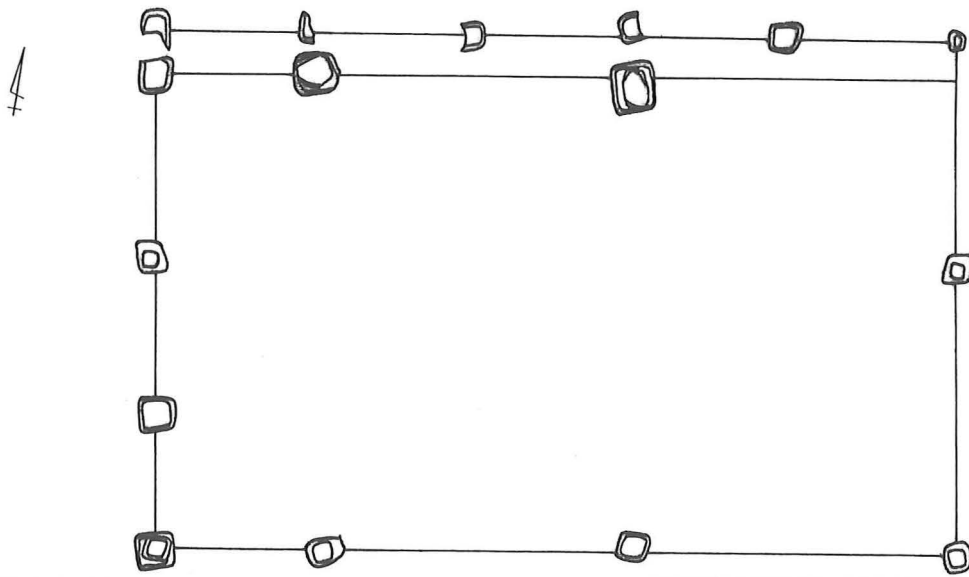
資料No.	193	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷 (No.8)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K31号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	4.3m	桁行	6.5m	2 × 3 間	面積	28m ²	坪数	8.5坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.1・2.2m	桁	2.1~2.3m	主軸方位	N-1°-E	
出土遺物				付属施設	西側に張出し				
建物の機能	主屋			構築時期					
備考									



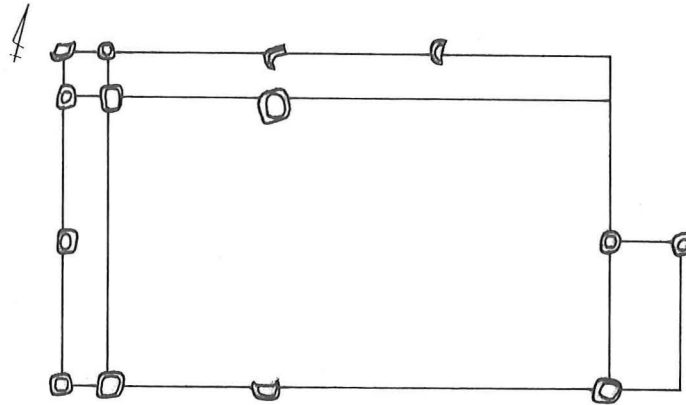
資料No.	194	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷 (No.8)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K43号掘立柱建物址		構築場所		東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面				
規模	梁間	3.6m	桁行	4.3m	2 × 2 間	面積	15.5㎡	坪数	4.3坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.9・1.7m	桁	2.1・2.2m	主軸方位	N-8°-W	
出土遺物	肥前陶磁器			付属施設					
建物の機能	副屋			構築時期		17世紀後半以前			
備考	K44・45号掘立と重複、K44号掘立よりも新しい								



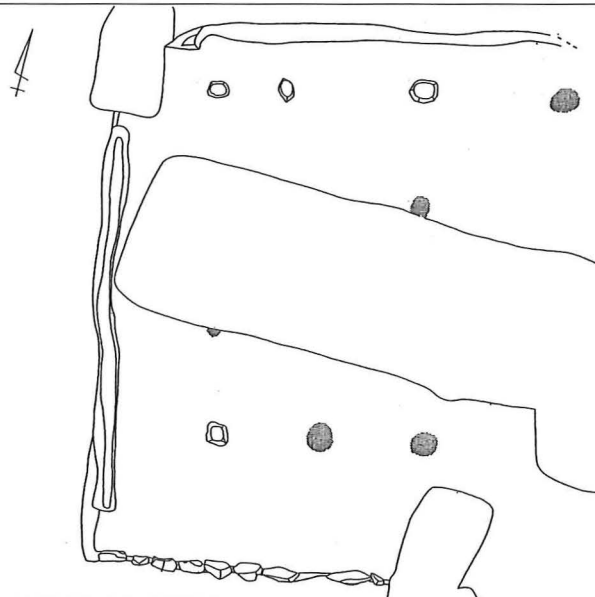
資料No.	195	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷 (No.8)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K44号掘立柱建物址		構築場所		東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面				
規模	梁間	6.3m	桁行	10.6m	3 × 5 間	面積	66.8㎡	坪数	20.2坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.8~2.4m	桁	2.2~2.7m	主軸方位	N-81°-E	
出土遺物				付属施設		東側に庇			
建物の機能	主屋			構築時期		17世紀後半以前			
備考	K43・45号掘立と重複、K43号掘立よりも古い								



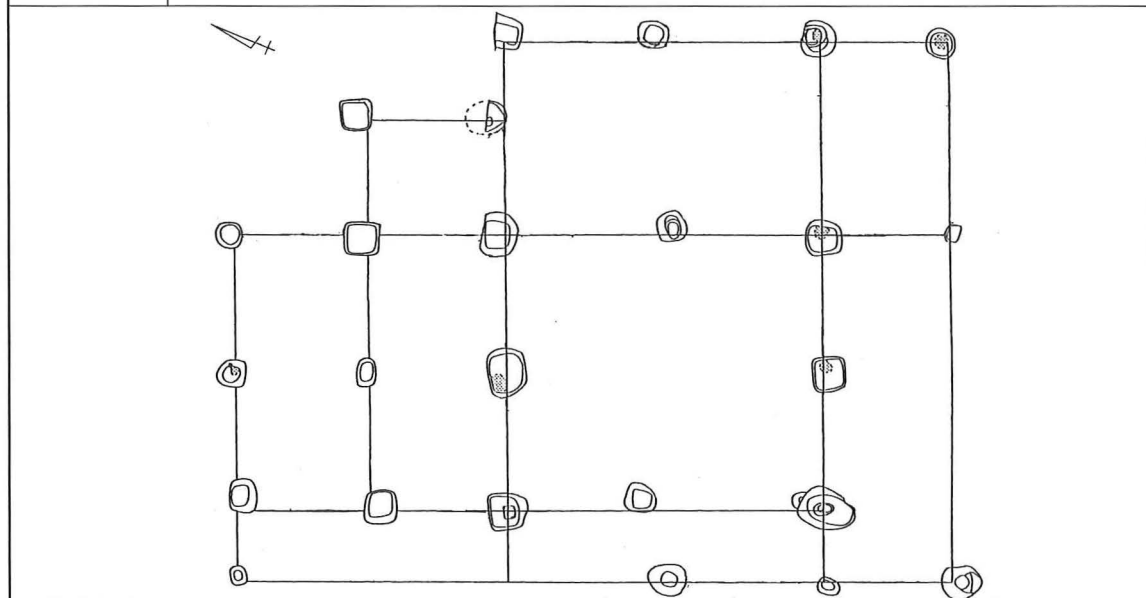
資料No.	196	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷 (No.8)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K45号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	3.8m	桁行	6.7m	2 × 3 間	面積	25.5m ²	坪数	7.7坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.9m	桁	2.1・2.2m	主軸方位	N-82°-E	
出土遺物					付属施設	北側及び西側に庇、東側南寄りに張り出し			
建物の機能	主屋				構築時期	17世紀後半以前			
備考	K43・44号掘立と重複								



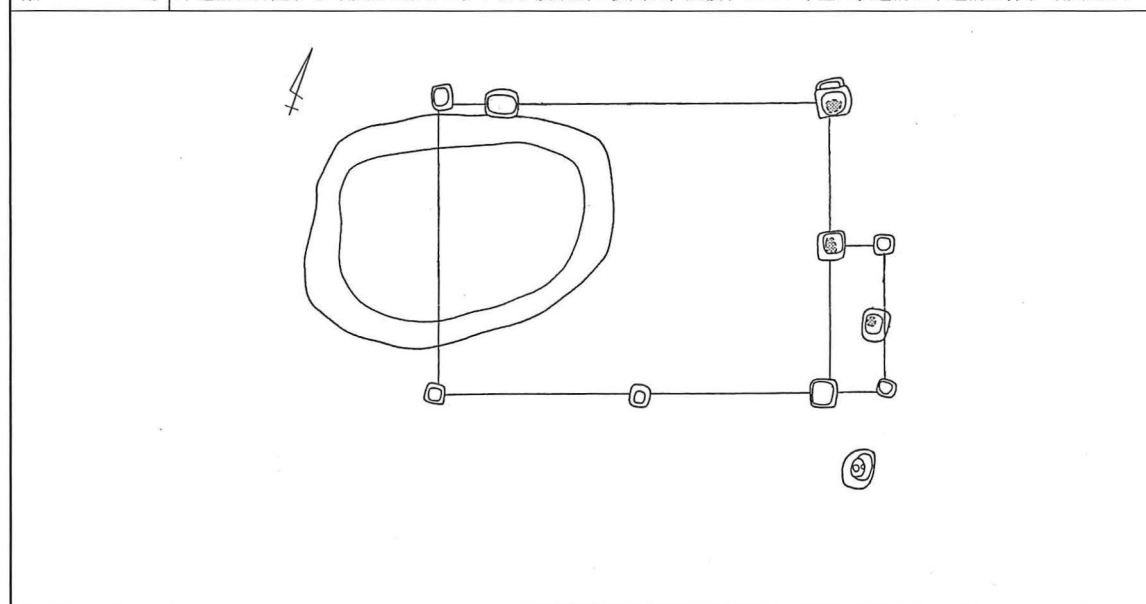
資料No.	197	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷 (No.8)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K2号礎石建物		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	m	桁行	m	4? × 4? 間	面積	m ²	坪数	坪
柱穴の形状		柱間距離	梁	~ m	桁	~ m	主軸方位	N-12°-W	
出土遺物	陶磁器、石製品、金属製品				付属施設				
建物の機能					構築時期				
備考	礎石は川原石、礎石の間隔は0.8~1.8m、19世紀代に火災によって廃絶したと推測されている								



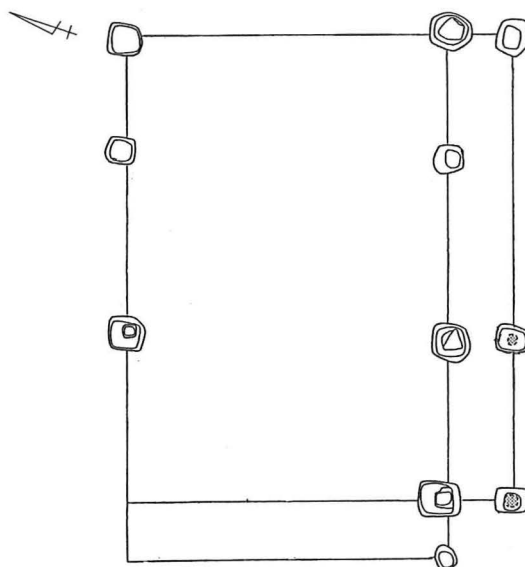
資料No.	198	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 6)			所在地	清川村宮ヶ瀬			
遺構名	K19号掘立柱建物址		構築場所		丘陵緩斜面					
規模	梁間	m	桁行	m	×	間	面積	39.3㎡	坪数	11.9坪
柱穴の形状	方形主体	柱間距離	梁	1.6~2.1m		桁	1.6~2.0m		主軸方位	N-68°-E
出土遺物	瀬戸・美濃天目碗、寛永通寶			付属施設	北西側及び南側に張り出し、西側に庇					
建物の機能	主屋			構築時期	17世紀中葉以降					
備考	主屋はL字形を呈する、規模は南側が2 (4.2m) × 4 (6.2m) 間、北側が2 (3.6m) × 2 (3.7m) 間、付属施設の床面積は22.7㎡を測る									



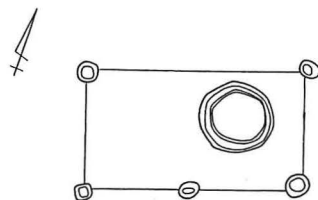
資料No.	199	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 6)			所在地	清川村宮ヶ瀬			
遺構名	K30号掘立柱建物址		構築場所		丘陵緩斜面					
規模	梁間	3.8m	桁行	5.3m	2 × 2	間	面積	20.1㎡	坪数	6.1坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.8・2.0m		桁	2.6・2.7m		主軸方位	N-70°-E
出土遺物				付属施設	東側に張り出し					
建物の機能	主屋			構築時期						
備考	本遺構に付随する可能性のあるピットより渡来銭3枚出土、重複するK7号竪穴状遺構は本遺構に伴う可能性あり									



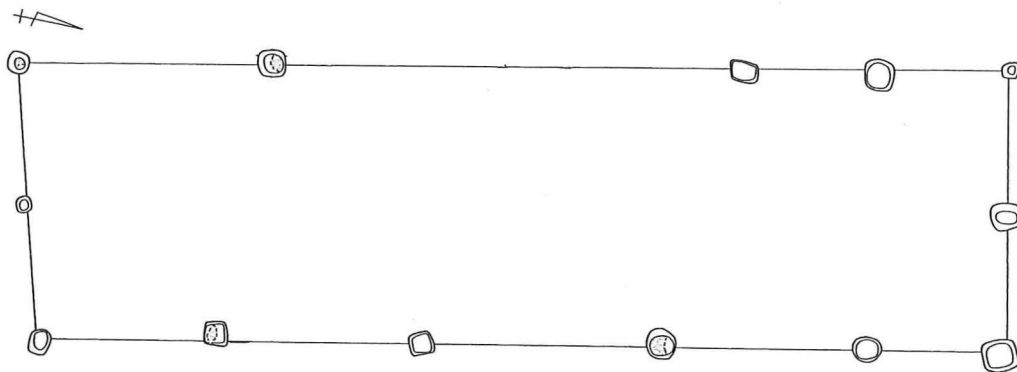
資料No.	200	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No.6)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K31号掘立柱建物址		構築場所		丘陵緩斜面				
規模	梁間	4.3m	桁行	6.2m	2 × 3 間	面積	26.7㎡	坪数	8.1坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.2m	桁	1.5~2.5m	主軸方位	N-75°-E	
出土遺物				付属施設	西側及び南側に庇				
建物の機能	主屋			構築時期					
備考									



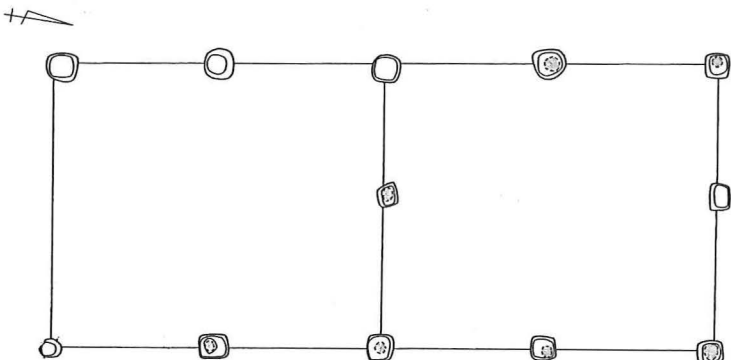
資料No.	201	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No.6)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K35号掘立柱建物址		構築場所		丘陵緩斜面				
規模	梁間	1.6m	桁行	2.9m	1 × 2 間	面積	4.6㎡	坪数	1.4坪
柱穴の形状	方形主体	柱間距離	梁	1.6m	桁	1.4・1.5m	主軸方位	N-73°-E	
出土遺物				付属施設					
建物の機能	副屋			構築時期					
備考	建物内に位置するK70号土坑は同時期に存在していた可能性あり								



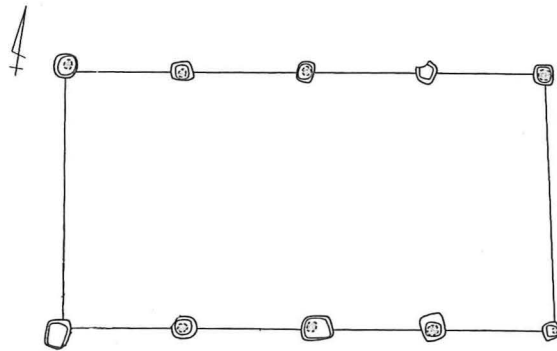
資料No.	202	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬				
遺構名	K 1号掘立柱建物址		構築場所		L字状を呈する段切り造成面						
規模	梁間	3.8m	桁行	12.8m	2 × 5 間	面積	48.6㎡	坪数	14.7坪		
柱穴の形状	方形主体	柱間距離	梁	1.9m		桁	1.8~3.3m		主軸方位	N-11°-W	
出土遺物				付属施設							
建物の機能	主屋			構築時期		17世紀代					
備考	南東側に付属屋 (K 8号掘立) あり、約4m西側にあるK 1号柱穴列は同時期に機能していた可能性あり										



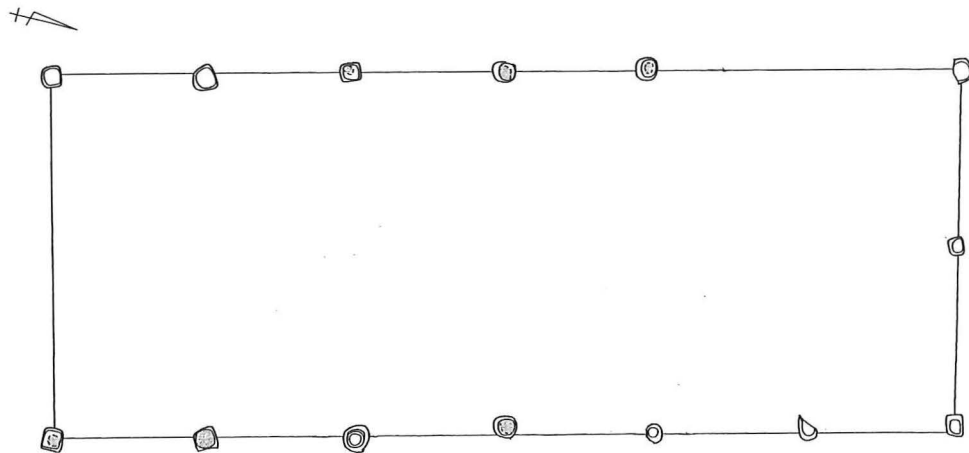
資料No.	203	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬				
遺構名	K 2号掘立柱建物址		構築場所		L字状を呈する段切り造成面						
規模	梁間	3.8m	桁行	8.8m	2 × 4 間	面積	33.4㎡	坪数	10.1坪		
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.8~2.0m		桁	2.1~2.3m		主軸方位	N-11°-W	
出土遺物				付属施設							
建物の機能	副屋			構築時期		17世紀代					
備考	主屋 (K 7号掘立) は南西側にあり										



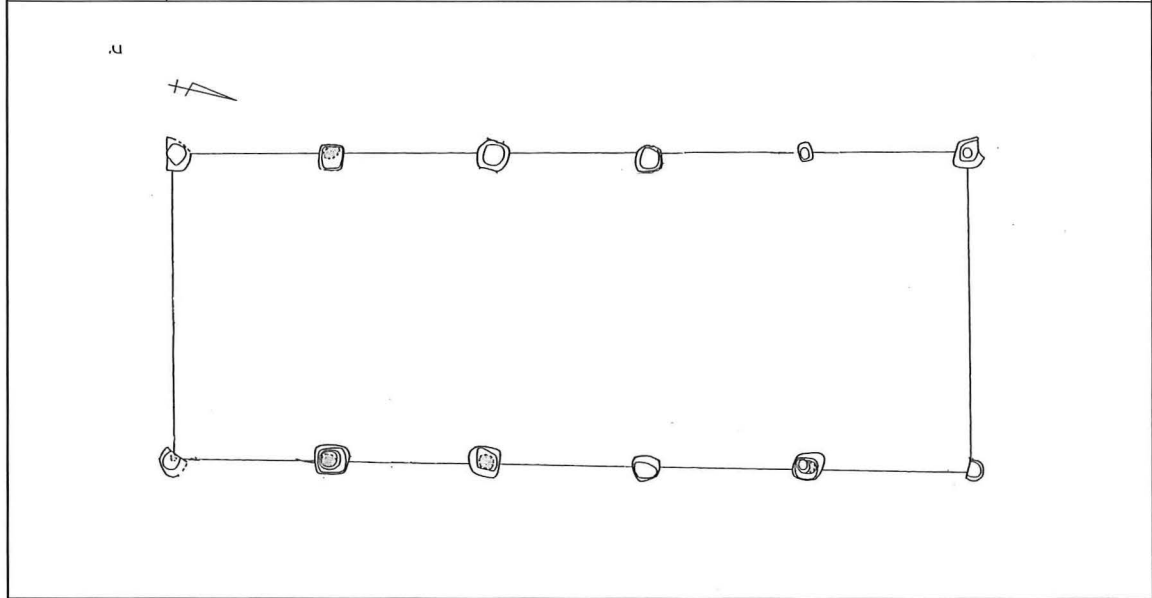
資料No.	204	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No.7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K 6号掘立柱建物址		構築場所	L字状を呈する段切り造成面					
規模	梁間	3.4m	桁行	6.5m	2 × 4 間	面積	22.1m ²	坪数	6.7坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	3.4m	桁	1.6~1.8m	主軸方位	N-83°-E	
出土遺物					付属施設				
建物の機能	主屋				構築時期 18世紀代				
備考	南側に位置するK 9号掘立は同時併存の可能性あり								



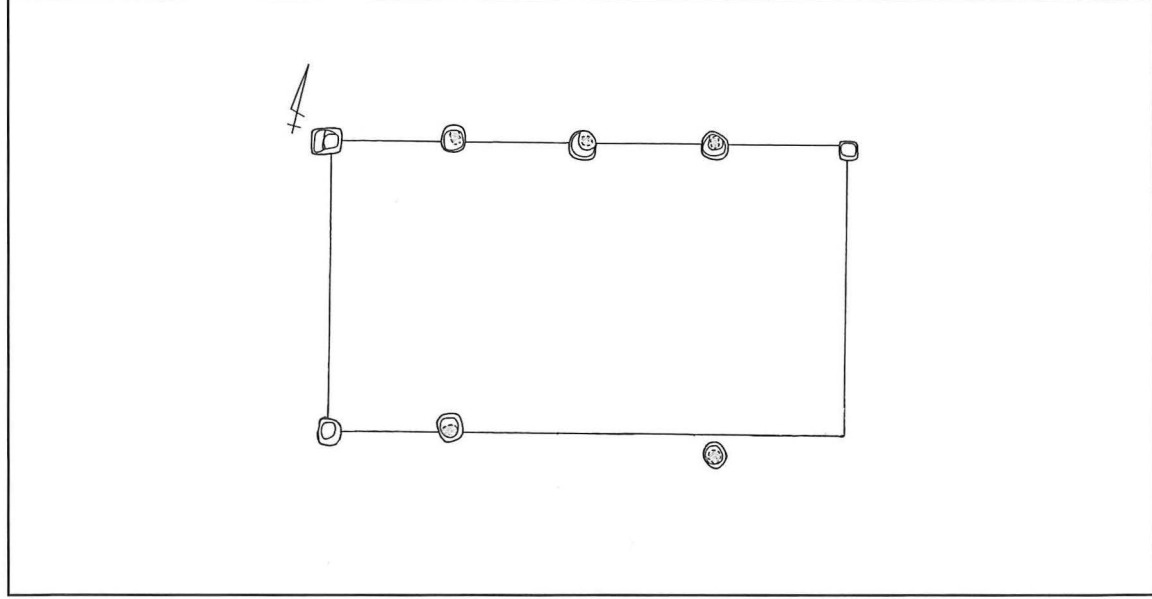
資料No.	205	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No.7)			所在地	清川村宮ヶ瀬			
遺構名	K 7号掘立柱建物址		構築場所	L字状を呈する段切り造成面						
規模	梁間	4.8m	桁行	12.0m	2 × 6 間	面積	57.6m ²	坪数	17.5坪	
柱穴の形状	方形主体	柱間距離	梁	2.4m	桁	2.0m	主軸方位	N-12°-W		
出土遺物					付属施設					
建物の機能	主屋				構築時期 17世紀代					
備考	北東側に付属屋 (K 2号掘立) あり									



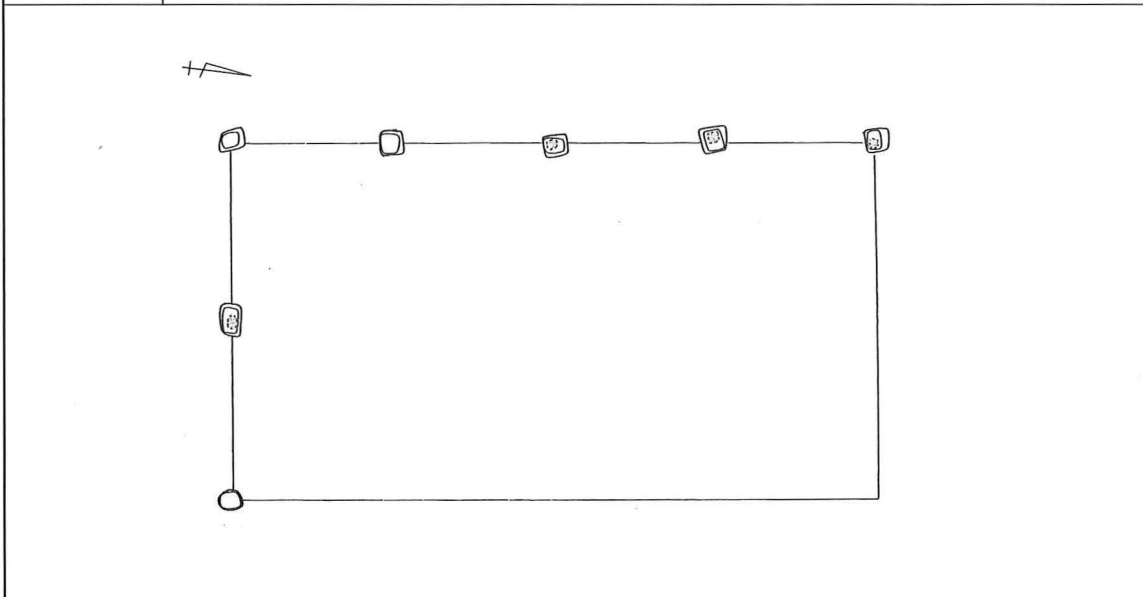
資料No.	206	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬				
遺構名	K 8号掘立柱建物址		構築場所		L字状を呈する段切り造成面						
規模	梁間	4.2m	桁行	10.6m	2 × 5 間	面積	44.5㎡	坪数	13.5坪		
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	4.2m	桁	2.1m	主軸方位	N-12°-W			
出土遺物					付属施設						
建物の機能	副屋				構築時期		17世紀代				
備考	主屋 (K 1号掘立) は北西側にあり										



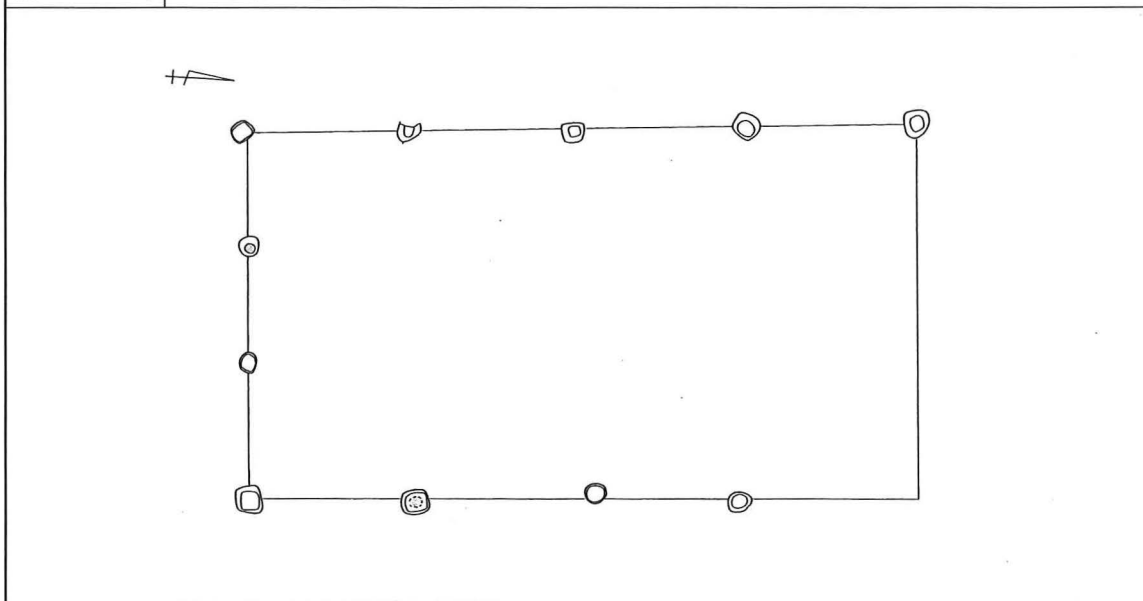
資料No.	207	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬				
遺構名	K 9号掘立柱建物址		構築場所		L字状を呈する段切り造成面						
規模	梁間	3.8m	桁行	7.0m	2 × 4 間	面積	26.6㎡	坪数	8坪		
柱穴の形状	方形・円形	柱間距離	梁	3.8m	桁	1.7~1.8m	主軸方位	N-77°-E			
出土遺物					付属施設						
建物の機能	主屋				構築時期		18世紀代				
備考	北側に位置するK 6号掘立は同時併存の可能性あり										



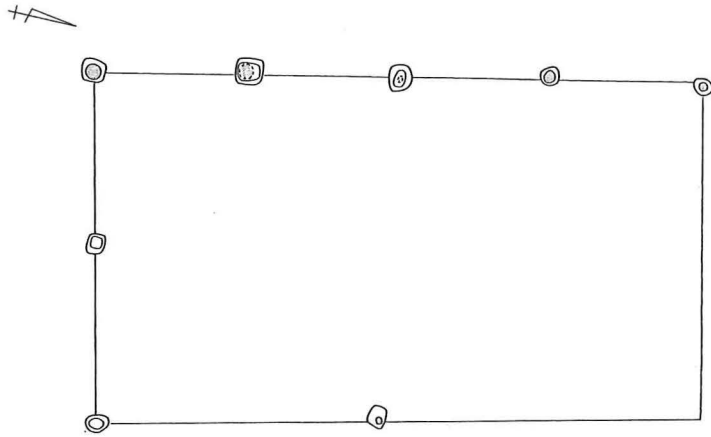
資料No.	208	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No.7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K16号掘立柱建物址		構築場所	段切り造成面 (上段)					
規模	梁間	4.7m	桁行	8.6m	2 × 4 間	面積	40.4m ²	坪数	12.2坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.3~2.4m	桁	2.1~2.2m	主軸方位	N-9°-W	
出土遺物					付属施設				
建物の機能	主屋				構築時期	17世紀代			
備考									



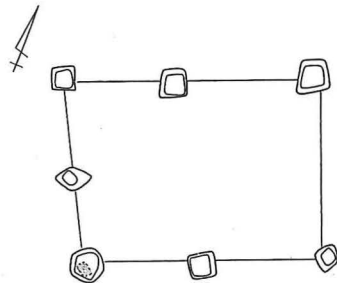
資料No.	209	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No.7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K17号掘立柱建物址		構築場所	段切り造成面 (下段)					
規模	梁間	4.8m	桁行	8.9m	3 × 4 間	面積	42.7m ²	坪数	12.9坪
柱穴の形状	方形主体	柱間距離	梁	1.5~1.8m	桁	1.9~2.4m	主軸方位	N-4°-W	
出土遺物					付属施設				
建物の機能	主屋				構築時期	17世紀代			
備考	K18号掘立と重複するが新旧不明								



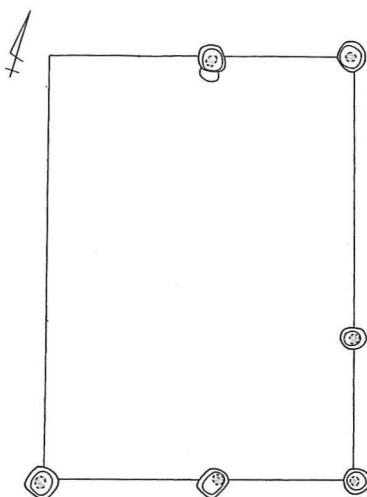
資料No.	210	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬				
遺構名	K18号掘立柱建物址		構築場所	段切り造成面 (下段)							
規模	梁間	4.6m	桁行	8.1m	2 × 4 間	面積	37.2㎡	坪数	11.3坪		
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.3m	桁	2.0~2.1m	主軸方位	N-9°-W			
出土遺物					付属施設						
建物の機能	主屋				構築時期	17世紀代					
備考	K17号掘立と重複するが新旧不明										



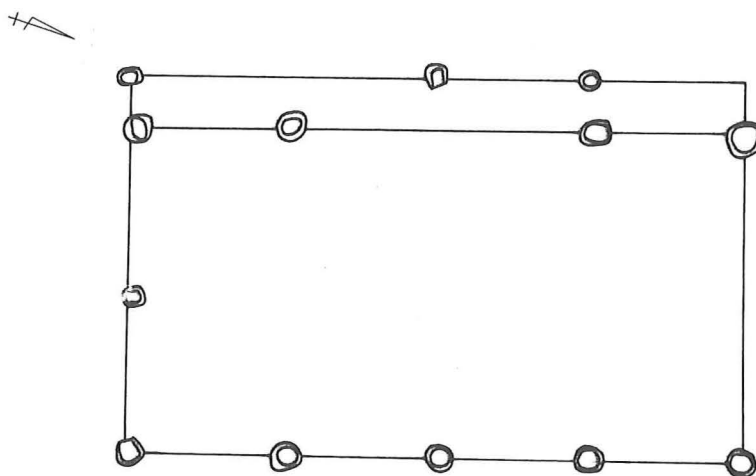
資料No.	211	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬				
遺構名	K19号掘立柱建物址		構築場所	段切り造成面 (下段)							
規模	梁間	2.5m	桁行	3.4m	2 × 2 間	面積	8.5㎡	坪数	2.6坪		
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.2~1.6m	桁	1.5~1.9m	主軸方位	N-70°-E			
出土遺物					付属施設						
建物の機能	副屋				構築時期	18世紀中葉以					
備考	主屋は石場建てで、削平により消滅した可能性あり										



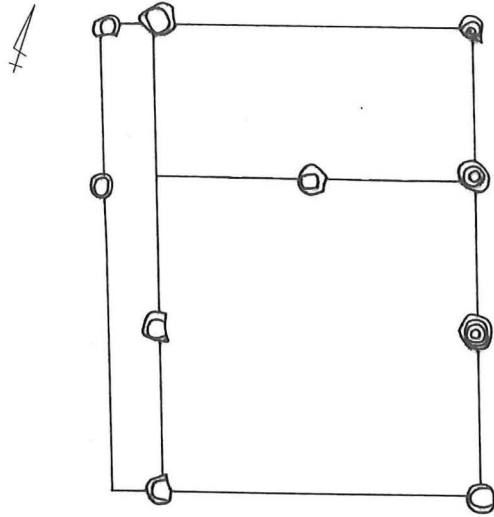
資料No.	212	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No.7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K20号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	4.1m	桁行	5.6m	2 × 3 間	面積	23m ²	坪数	7坪
柱穴の形状	方形、円形	柱間距離	梁	1.9~2.2m	桁	1.9・3.7m	主軸方位	N-18°-W	
出土遺物					付属施設				
建物の機能	主屋				構築時期	19世紀代			
備考									



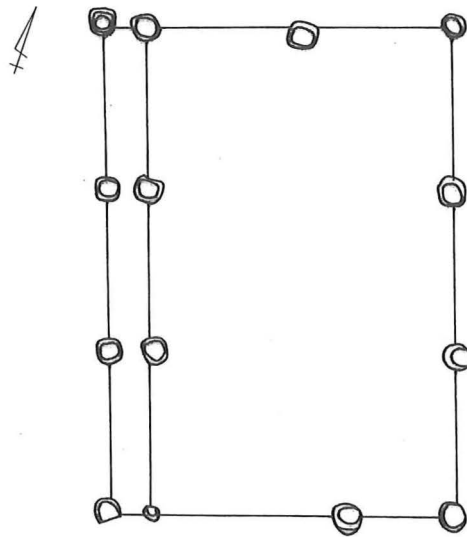
資料No.	213	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No.7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K21号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	4.3m	桁行	8.2m	2 × 4 間	面積	35.2m ²	坪数	10.7坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.0・2.3m	桁	2.0~2.1m	主軸方位	N-18°-W	
出土遺物					付属施設	西側に庇			
建物の機能	主屋				構築時期	18世紀中以降			
備考	K21~K23号掘立は建て替えの可能性あり (22号→23号→21号)								



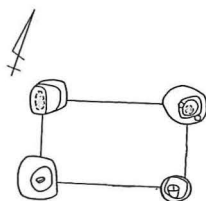
資料No.	214	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K22号掘立柱建物址		構築場所		東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面				
規模	梁間	4.2m	桁行	6.1m	2 × 3 間	面積	25.6㎡	坪数	7.8坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.5・2.7m	桁	2.0~2.1m	主軸方位	N-20°-W	
出土遺物				付属施設	西側に庇、K47・52号土坑				
建物の機能	主屋			構築時期	17世紀代				
備考	K21~K23号掘立は建て替えの可能性あり (22号→23号→21号)、北側に厩 (K28号掘立) あり								



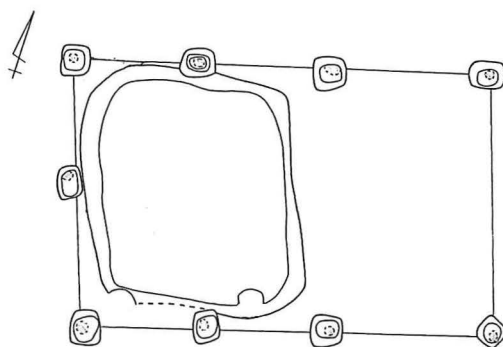
資料No.	215	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K23号掘立柱建物址		構築場所		東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面				
規模	梁間	4.1m	桁行	6.5m	2 × 3 間	面積	26.7㎡	坪数	8.1坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.0・2.3m	桁	2.1~2.2m	主軸方位	N-19°-W	
出土遺物				付属施設	西側に庇、K46・48・50・51号土坑				
建物の機能	主屋			構築時期	17世紀代				
備考	K21~K23号掘立は建て替えの可能性あり (22号→23号→21号)、南東側に付属屋 (K31号掘立)、北側に厩 (K28号掘立) あり								



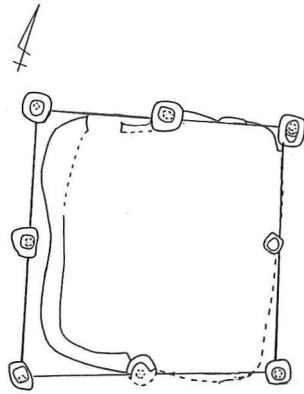
資料No.	216	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬			
遺構名	K26号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面						
規模	梁間	1.1m	桁行	1.9m	1 × 1 間		面積	2.1㎡	坪数	0.6坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.1m	桁	1.9m	主軸方位	N-76°-E		
出土遺物	かわらけ、灯明皿等				付属施設					
建物の機能					構築時期	18世紀中以降				
備考										



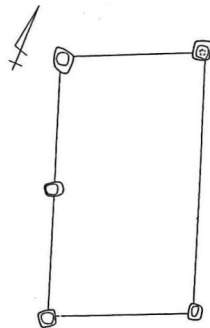
資料No.	217	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬			
遺構名	K27号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面						
規模	梁間	3.5m	桁行	5.6m	2 × 3 間		面積	19.6㎡	坪数	5.9坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.6・1.9m	桁	1.6~2.1m	主軸方位	N-74°-E		
出土遺物					付属施設	K 2号竪穴状遺構				
建物の機能	厩				構築時期	17世紀代				
備考	K27・K28号掘立は建て替え (28号→27号)、南側に主屋 (K23号掘立) あり									



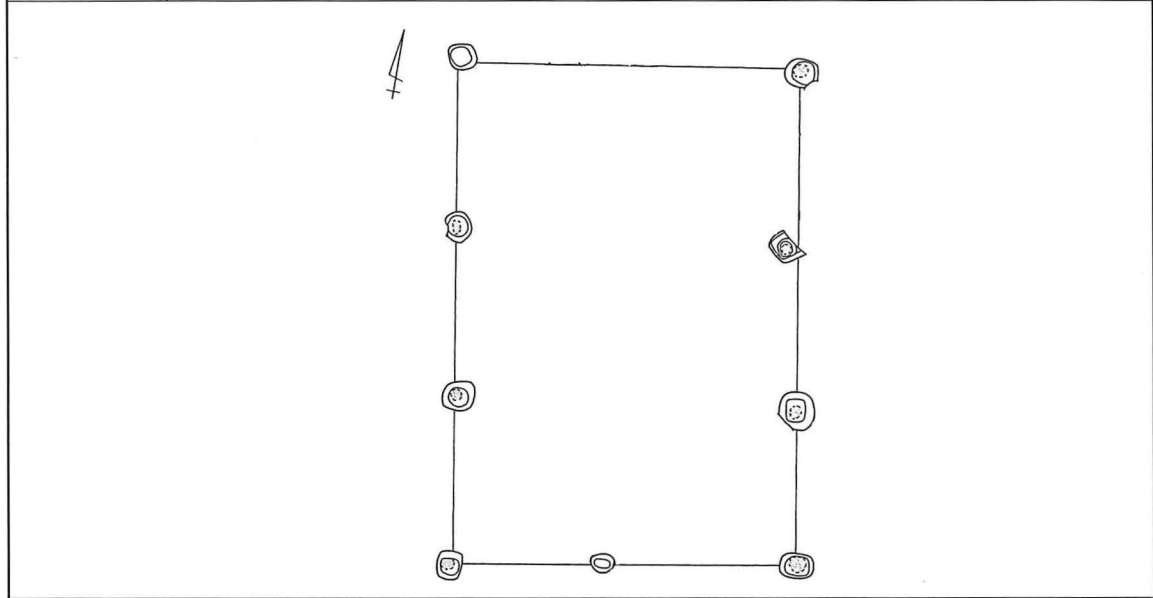
資料No.	218	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K28号掘立柱建物址		構築場所		東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面				
規模	梁間	3.3m	桁行	3.4m	2 × 2 間	面積	11.2m ²	坪数	3.4坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.6・1.7m	桁	1.6~1.8m	主軸方位	N-74°-E	
出土遺物				付属施設	K3号竪穴状遺構				
建物の機能	厩			構築時期	17世紀代				
備考	K27・K28号掘立は建て替え(28号→27号)、南側に主屋(K22号掘立)あり								



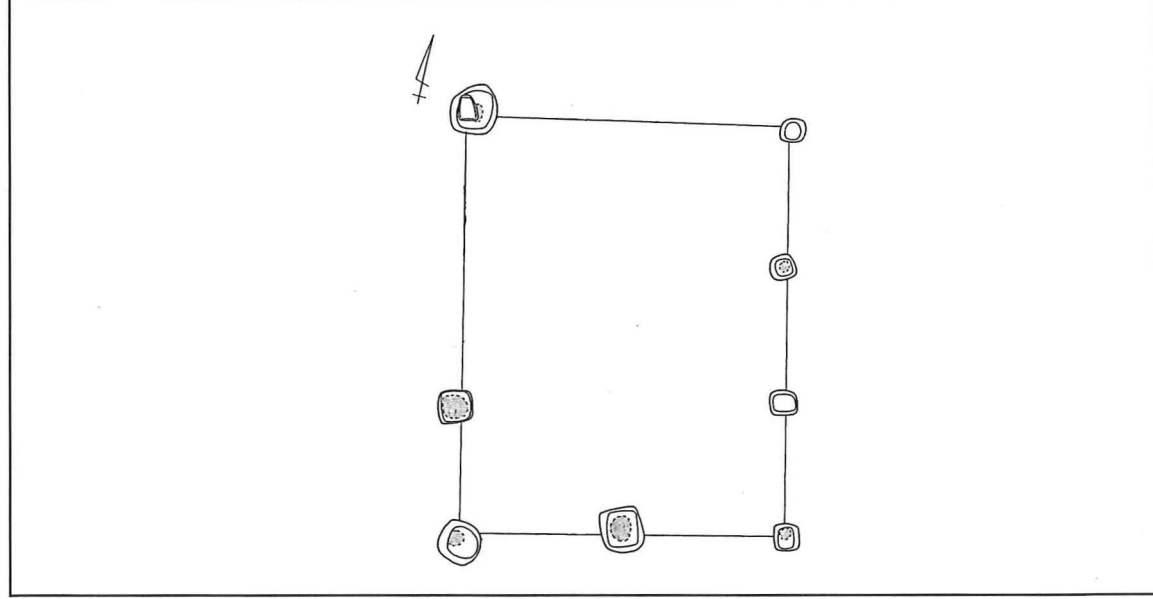
資料No.	219	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K31号掘立柱建物址		構築場所		東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面				
規模	梁間	1.9m	桁行	3.4m	1 × 2 間	面積	6.5m ²	坪数	2坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.9m	桁	1.7m	主軸方位	N-20°-W	
出土遺物				付属施設					
建物の機能	副屋			構築時期	17世紀代				
備考	主屋(K23号掘立)は北西側にあり								



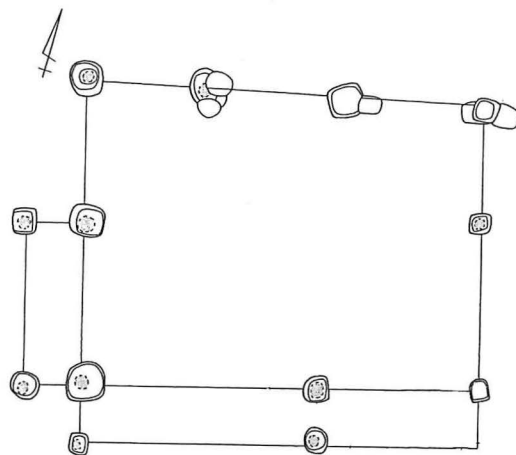
資料No.	220	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K32号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	4.5m	桁行	6.6m	2 × 3 間	面積	29.7m ²	坪数	9坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.0・2.5m	桁	2.1~2.4m	主軸方位	N-11°-W	
出土遺物					付属施設	K3号竪穴状遺構			
建物の機能	主屋				構築時期	17世紀代			
備考	南側に厩 (K36号掘立) あり								



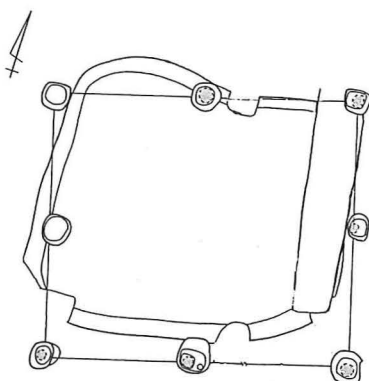
資料No.	221	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K33号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	4.3m	桁行	5.5m	2 × 3 間	面積	23.7m ²	坪数	7.2坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.1・2.2m	桁	1.7~1.9m	主軸方位	N-11°-W	
出土遺物					付属施設				
建物の機能	主屋				構築時期	17世紀代			
備考	約2m西側にあるK2号柱穴列は同時期に機能していた可能性あり								



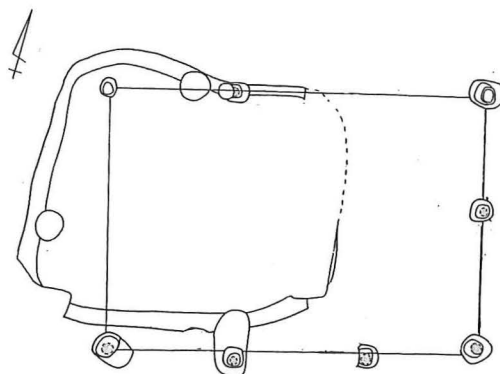
資料No.	222	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K35号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	4.0m	桁行	5.3m	2 × 3 間	面積	21.2㎡	坪数	6.4坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.6~2.2m	桁	1.8~3.1m	主軸方位	N-76°-E	
出土遺物				付属施設	南側と西側に庇				
建物の機能	主屋			構築時期	18世紀中葉以降				
備考	南側に厩 (K37号掘立) あり								



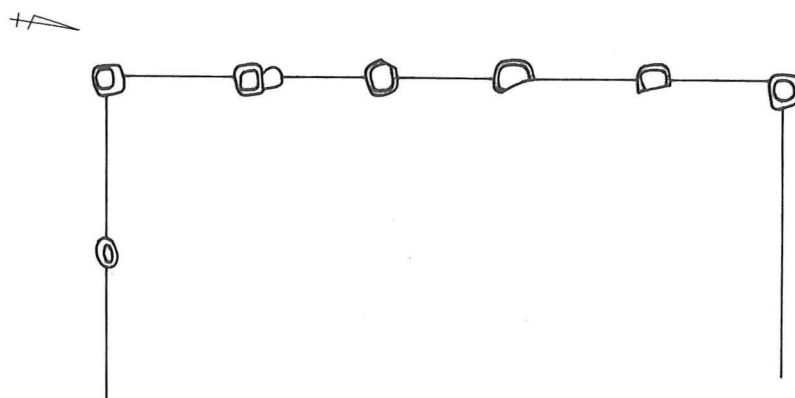
資料No.	223	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K36号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	3.5m	桁行	4.0m	2 × 2 間	面積	14㎡	坪数	4.2坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.7~1.8m	桁	2.0m	主軸方位	N-75°-E	
出土遺物				付属施設	K5号竪穴状遺構				
建物の機能	厩			構築時期	17世紀代				
備考	K36・K37号掘立は建て替え (36号→37号)、北側に主屋 (K32号掘立) あり								



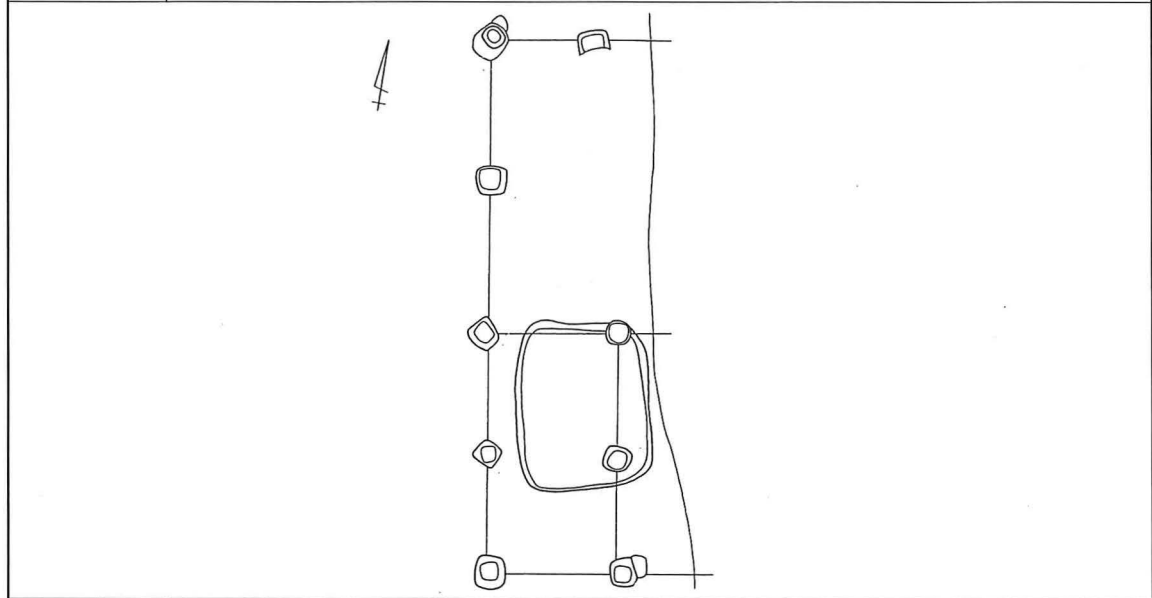
資料No.	224	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K37号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	3.4m	桁行	5.0m	2 × 3 間	面積	17m ²	坪数	5.2坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.5・1.9m	桁	1.5~1.8m	主軸方位	N-76°-E	
出土遺物				付属施設	K 5号竪穴状遺構				
建物の機能	厩			構築時期	18世紀中葉以降				
備考	K36・K37号掘立は建て替え(36号→37号)、北側に主屋(K35号掘立)あり								



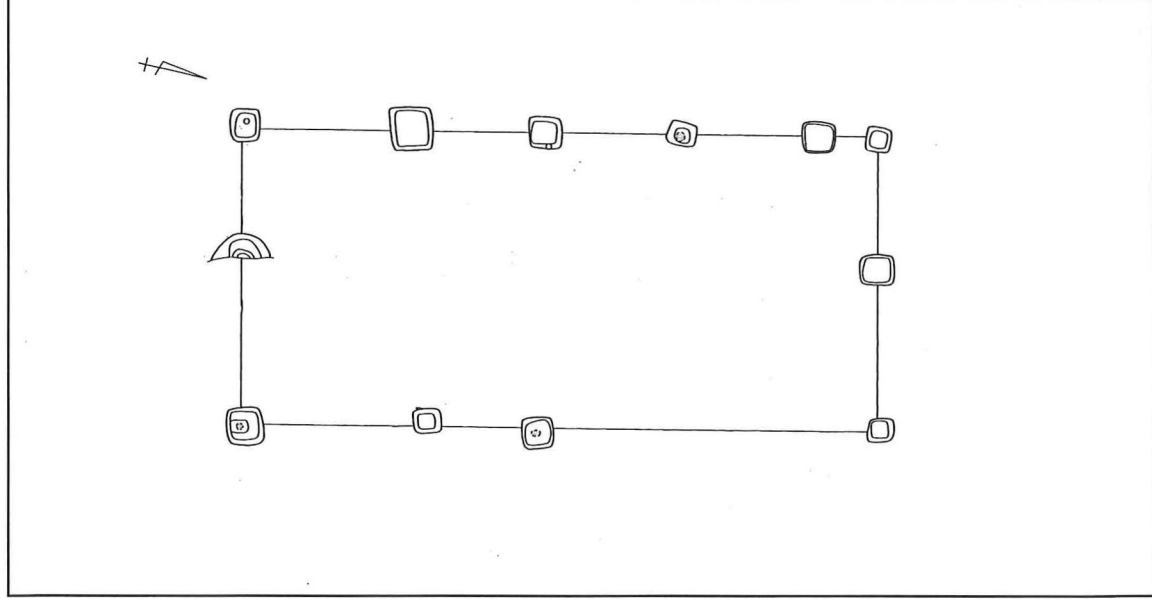
資料No.	225	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K38号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	4.6m	桁行	9.0m	2 × 5 間	面積	41.4m ²	坪数	12.5坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.3m	桁	1.8m	主軸方位	N-8°-W	
出土遺物				付属施設					
建物の機能	主屋			構築時期	17世紀代				
備考									



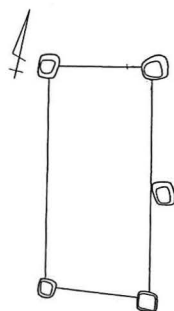
資料No.	226	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬				
遺構名	K40号掘立柱建物址		構築場所		東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面						
規模	梁間	3.6m	桁行	7.1m	2 × 4 間	面積	25.6㎡	坪数	7.7坪		
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.4~1.8m	桁	1.6~2.0m	主軸方位	N-8°-W			
出土遺物					付属施設						
建物の機能	主屋				構築時期		18世紀中葉以降				
備考	西側に付属屋 (K42号掘立) あり										



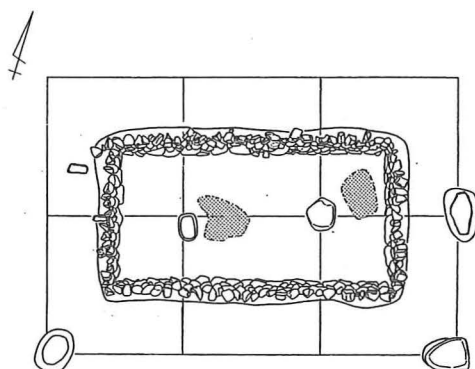
資料No.	227	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)			所在地	清川村宮ヶ瀬				
遺構名	K41号掘立柱建物址		構築場所		東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面						
規模	梁間	3.9m	桁行	8.5m	3.9 × 8.5 間	面積	33.2㎡	坪数	10坪		
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.7~2.2m	桁	0.8~2.3m	主軸方位	N-12°-W			
出土遺物					付属施設						
建物の機能	主屋				構築時期		17世紀代				
備考											



資料No.	228	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No.7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K42号掘立柱建物址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の中段面					
規模	梁間	1.4m	桁行	3.1m	1 × 2 間	面積	4.3m ²	坪数	1.3坪
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	1.4m	桁	1.4・1.7m	主軸方位	N-11°-W	
出土遺物					付属施設				
建物の機能	副屋				構築時期	18世紀中葉以降			
備考	主屋 (K40号掘立) は東側にあり								



資料No.	229	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No.7)			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K1号蔵址		構築場所	東に向かって緩やかに傾斜する段丘の下段面					
規模	梁間	3.6m	桁行	5.3m	2 × 3 間	面積	19.1m ²	坪数	5.8坪
柱穴の形状	不整形	柱間距離	梁	1.8m	桁	1.8m	主軸方位	N-70°-E	
出土遺物	陶磁器、金属製品、ガラス製品				付属施設				
建物の機能	蔵				構築時期	19世紀中頃			
備考	柱穴内に礎石残存、竪穴は4.1m×2.3m・壁高52cmを測り壁際には幅30cmの溝が掘られ石垣が組まれている								



研究紀要15

かながわの考古学

発行日 2010(平成22)年3月31日

発行 財団法人かながわ考古学財団

〒232-0033 神奈川県横浜市南区中村町3-191-1

tel : (045)-252-8689 fax : 045-262-8162

<http://kaf@kaf.or.jp>

印刷 野崎印刷紙器株式会社

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.15

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies: Paleolithic Artifacts in Kanagawa Prefecture Distribution (3) Layer L1S~L1H	1
Project Team for Jōmon Period Studies: Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (VIII): An Example in the first part of Late Period. An Aspect of the Horinouti-Type Pottery Period, Part 1	13
Project Team for Yayoi Period Studies: The Corpus of Yayoi Era Metaltool in Kanagawa Prefecture(2)	21
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (3): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note"	35
Project Team for Nara-Heian Period Studies: Aspect of Tile of Village Ruins excavated in Kanagawa Prefecture (3)	51
Project Team for Medieval Age Studies: Castle Site in the Medieval Age in Kanagawa Prefecture (2)	61
Project Team for Early Modern Age Studies: The Corpus of Common Houses in the Early Modern Age (7)	75

March,2010

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama,Japan